

世界代表司教会議 第13回通常総会
報 告

「キリスト教信仰を伝えるための新しい福音宣教」

(2012年10月7日～28日)

カトリック中央協議会

【 目 次 】

1. はじめに	3
2. 宮原良治司教 世界代表司教会議（シノドス）に参加して	5
3. 開催概要	10
4. 参加者・開催日程	17
5. 教皇ベネディクト十六世 開会ミサ説教	20
6. 宮原良治司教の発表	25
7. 最終メッセージ（要約）	27
8. 最終メッセージ	30
9. 提言	48
10. 教皇ベネディクト十六世 閉会ミサ説教	78
11. 教皇ベネディクト十六世 10月28日の「お告げの祈り」のことば	83
資料1 世界代表司教会議第13回通常総会 提題解説 「キリスト教信仰を伝えるための新しい福音宣教」	85
資料2 第13回通常シノドス『提題解説』に対する日本カトリック司教 協議会の公式回答	152
資料3 世界代表司教会議第13回通常総会 討議要綱（目次）	164

1. はじめに

世界代表司教会議 (Synodus Episcoporum = シノドス) 第 13 回通常総会は、2012 年 10 月 7 日から 28 日まで、ローマで開催された。今回のテーマは「キリスト教信仰を伝えるための新しい福音宣教」である。日本の司教協議会からは、2010 年度臨時司教総会 (2011 年 2 月) で代表者に選出された福岡教区の宮原良治司教が参加した。

世界代表司教会議 (シノドス) とは

「シノドス」とは、「ともに歩む」という意味のギリシア語で、一定時に会合する司教たちの集会のことである。教皇と司教たちとの関係を深め、信仰および倫理の擁護と向上、規律の遵守と強化のための助言をもって教皇を補佐する。また、世界における教会の活動に関する諸問題を研究する。

世界代表司教会議は、第二バチカン公会議教父たちの要望にこたえて、公会議の体験によって生まれた積極的な精神を生き生きと保つために、1965 年、教皇パウロ六世が自発教令『アポストリカ・ソリチトゥード』(1965 年 9 月 15 日) によって設置した。『カトリック新教会法典』では、342 条～348 条に世界代表司教会議に関する規定が述べられている。なお、前回の第 12 回通常シノドス (2008 年) から、2006 年に改訂された『シノドス規則』が実施されている。

世界代表司教会議は、提起された問題を討議し、教皇に意見を具申するが、決定機関ではない。会議に関する権限は、すべて教皇にある。会議の招集、代議員の指名・任命、会議要綱の決定、会議の主宰、閉会、延期、解散などは教皇の権限で行われる。

世界代表司教会議には、通常総会と臨時総会がある。特定地域または複数の地域に直接に関連する問題を取り扱う特別会議が開催されることもある。通常シノドスは 1967 年の第 1 回からほぼ 2～4 年ごとに開かれている。前回の第 12 回通常総会は 2008 年 10 月に「教会生活と宣教における神のことば」をテーマに行われた。臨時シノドスは 1969 年と 85 年に、地域別の特別シノドスは 1980 年のオランダ特別シノドス以来 9 回行われている。とくに大聖年の 2000 年を前に集中的に開催された。アフリカ (1994 年)、レバノン (1995 年)、アメリカ (1997 年)、アジア (1998 年)、オセアニア (1998 年)、(第

2回) ヨーロッパ(1999年)などである。最近では2009年に第2回アフリカ特別シノドス、2010年に中東のための特別シノドスが開催された。

「提題解説」と「討議要綱」

世界代表司教会議が開催される前に、教皇庁シノドス事務総局は、準備文書を各国司教協議会にあらかじめ送付する。この準備文書は「提題解説」(Lineamenta)と呼ばれる。シノドス事務総局は、今回の世界代表司教会議のための提題解説を2011年2月2日付で各国司教協議会に送り、同年11月1日までに、シノドス事務総局宛、「提題解説」の質問事項に対する「回答」を送るよう指示した。

日本カトリック司教協議会はこの「提題解説」を全訳し、全司教に配布した。全司教は2011年6月に開催された2011年度定例司教総会において協議を行い、同司教総会で出された意見を元に、「提題解説」に対する公式回答を作成することを決議した。司教総会の後、司教協議会は「提題解説」の全訳をカトリック中央協議会ホームページに掲載するとともに、各教区・修道会の意見を聴取した。2011年9月末日までに各教区と男女修道会・宣教会総長管区長から提出された諸意見に基づき、シノドス代表参加者の宮原良治司教が回答を作成した。回答書案は特別臨時司教総会(2011年10月7日)で検討、承認され、10月17日に教皇庁シノドス事務総局に提出された。

シノドス事務総局は、各国の司教協議会の「回答」に基づき、2012年5月27日付で「討議要綱」(Instrumentum Laboris)を発表した。この「討議要綱」がシノドスの議論の材料として用いられた。

なお、世界代表司教会議の議長は教皇が務めるが、実際の司会は議長代理が交互に行う。総書記は、分団会・全体会で議論するために、参加者から指摘された議題をまとめて報告する。また、総書記と特別秘書は、シノドス教父の提言をまとめて、教皇に提出する。これらの提言を踏まえて、教皇はシノドス後の使徒的勧告を発表する。

2. 世界代表司教会議（シノドス）に参加して

ドミニコ 宮原良治 司教

シノドス前の準備

第13回通常シノドス（以下、第13回シノドスとする）は、2012年10月7日（日）から28日（日）まで、「キリスト教信仰を伝えるための新しい福音宣教」というテーマでバチカンにおいて開催されました。しかし、約3週間の開催期間だけではなく、開催の前から長期に渡る周到的準備がなされています。シノドス事務総局は、ベネディクト十六世教皇がシノドスのテーマに選んだ「キリスト教信仰を伝えるための新しい福音宣教」を『提題解説』として2011年3月4日に発表し、全世界の司教協議会、男女修道会の国際協議会、教皇庁の諸機関に配布して意見を求めました。日本司教協議会も各教区と日本の男女修道会に同『提題解説』を配布して提言を求め、それらの総括文を2011年10月7日の特別臨時司教総会で審議した後バチカンに提出しました。全世界からバチカンのシノドス事務総局に寄せられた回答結果は90.5%に達し、テーマに関する関心の高さが示されました。大陸別では、オセアニア100%、アメリカ95.8%、アジア88.8%、ヨーロッパ81.25%、アフリカ66.6%です。シノドス事務総局は全世界から寄せられた回答結果を分析し、2012年6月19日に『討議要綱』に要約してシノドス参加予定者全員に配布しました。『討議要綱』はシノドスの議題となり、約3週間これを参照しながらさまざまな角度から審議して、教会と社会にとって重要なテーマに新たな光を当てました。

さらに、シノドスの準備として第二バチカン公会議公文書などのさまざまな文献が活用されましたが、その準備として重要な役割を果たしたのが、教皇ベネディクト十六世の自発教令の形で書かれた2つの使徒的書簡です。一つは、教皇庁新福音化推進評議会の設立に関する2010年9月21日の『ウビクムクエ・エト・センベル』、もう一つは、「信仰年」開催を告示した2011年10月11日の『信仰の門』です。

祈りのシノドス

キリスト信者は、主イエスの模範に従って、絶えず祈るよう招かれています（一テサロニケ5・17）が、シノドスの活動のすべてに伴い、これを生か

していたのも祈りでした。シノドスの主宰者であるローマ司教を囲んで集まった全世界の司教団を代表する司教の集会は、祈りの雰囲気なしに進むことがありえないといえるほど、祈りがシノドスの議論の中で第一の場を占めていました。第13回シノドスの開会ミサの中で、教皇は二人の教会博士、アピラの聖ヨハネとピンゲンの聖ヒルデガルトを列聖し、さらに、10月21日には7人の福者の列聖式を司式しました。第二バチカン公会議開幕50周年と『カトリック教会のカテキズム』発布20周年を記念してささげられた10月11日のミサは「信仰年」を開始するもので、シノドスとの関連の中で特別な意味と重要性がありました。

毎回、午前シノドスの初めに会議の主役である聖霊に祈り求め、午後の会議前にも短い祈りが唱えられました。会議の終わりにも、教会の母であり新しい福音宣教の星である聖なるおとめマリアのご保護を祈りました。シノドス・ホールに隣接した礼拝堂には聖体が安置され、シノドス参加者が会議の前後に主のみ前で黙想できるよう配慮されていました。

シノドス参加者

第13回シノドスには262名のシノドス教父が参加しました。これはシノドス史上最大の数でした。ヨーロッパから103名、アメリカから63名、アフリカから50名、アジアから39名、オセアニアから7名です。シノドス教父の大半の182名は選出された代表者であり、その内の172名は司教協議会から選出され、残りの10名は修道会総長連合の代表でした。自主権を有する東方カトリック教会の代表者は3名、職務上の参加者は37名、教皇による任命者は41名です。全体の内訳は、総大司教6名、枢機卿49名、首位大司教6名（うち1名は枢機卿）、大司教71名、司教120名、司祭14名です。自主権を有する東方教会の代表者は10名、司教協議会会長32名、ローマ教皇庁の責任者は26名、裁治権者211名、補佐司教11名です。

ベネディクト十六世教皇は総書記としてワシントン（米国）大司教のドナルド・ウィリアム・ヴェール枢機卿を、特別秘書としてモンペリエ（フランス）大司教のピエール＝マリー・カレ師を任命しました。議長代理として、香港（中国）司教のジョン湯漢（トンホン）枢機卿、グアダハラ（メキシコ）大司教フランシスコ・ロブレス・オルテガ枢機卿、キンシャサ（コンゴ民主共和国）大司教のローラン・モンセングオ・パシンヤ枢機卿が任命され

ていました。

シノドス総会には、世界各地で福音宣教に携わっている男女から45名の専門家が選ばれ、またオブザーバーとして49名が参加していました。また、カトリック教会と完全な交わりをもたない15の教会・教会共同体から友好使節が参加し、その中でも、カンタベリー大主教のローワン・ダグラス・ウィリアムズ師はシノドスの中で発表を行い、また、コンスタンチノーブル大主教・世界総主教のバルトロマイー世も参加していました。この二人の存在はシノドスにとって特別のエキューメニカルな貢献でした。

シノドスには特別招待者として、テゼ（フランス）の院長のブラザー・アロイス、アメリカ聖書協会の総主事のラマルル・ヴェスト師、バーゼル大学（スイス）バイオセンター微生物学教授で教皇庁科学アカデミー会長のヴェルナー・アーバー博士の3名も参加していました。

その他にアシスタントや通訳がサポートし、シノドス通常総会には総計400名以上の人々が参加していました。

重要な行事

3週間の日程は、23回の全体会議、公式言語に従って分けられた12の分団会のメンバーによる8回の分団会がありました。重要な行事として、10月8日（月）の午前中に事務総長と総書記が報告を行い、午後から5大陸の司教団の代表者がテーマに関して短い発表を行いました。9日（火）の午後の全体会議で、マルク・ウエレット枢機卿が、前回第12回通常シノドス後に発布された使徒的勧告『主のことば』について、その後の受容に関する報告を行いました。10日（水）午後の全体会議の中で、ローワン・ダグラス・ウィリアムズ・カンタベリー大主教・英国と世界聖公会主座主教が、新しい福音宣教とキリスト教信仰に関する聖公会の見解を発表しました。12日（金）には、バーゼル大学（スイス）バイオセンター微生物学教授であり、また教皇庁科学アカデミー会長でもあるヴェルナー・アーバー博士が科学と信仰に関する考察を発表し、当日午後の全体会議の自由討議で活発な意見交換がなされました。11日（木）「信仰年」開始ミサの中で、世界総主教バルトロマイー世はミサ参加者全員に「信仰年」開年に際してのあいさつを行いました。

シノドスの途中、12人で構成されるメッセージ委員会委員が選出されました。同委員会委員長には事前にフィレンツェ（イタリア）大司教のジュ

ゼッペ・ベトリー枢機卿と副委員長にマニラ（フィリピン）大司教のルイス・アントニオ・G・タグレ師が教皇によってあらかじめ任命されていましたが、他の2名が新たに追加任命され、残りの8名の委員をシノドス教父が選出しました。メッセージ委員会には、言語別の各分団会で選出された議長と報告者も加わり、委員会によって起草された「最終メッセージ」の草案は、全体会議と分団会で何度か審議した上承認され、シノドス参加教父からのメッセージとして神の民に発表されました。

シノドス教父の全体会議での発表は5分間以内、自由討議での発言は3分以内、友好使節とオブザーバーの発表は4分以内に制限され、規定の時間を超過するとマイクの音源が切られます。投票は筆記形式と電子形式の両方で行われました。

3週間の間一貫して漂っていた雰囲気は、ローマ教皇を中心にして、参加者全員がともに祈り、耳を傾け、考察するというものでした。この体験を通して、司教どうし、また司教団とその頭であるローマ教皇との連帯と愛のきずなが深まり、さらに、神の民から選ばれた相当数のシノドス参加者も、カトリック教会を構成する神の民のメンバーとしての交わりとそのきずなを強め、教会感覚を豊かにしたものと思います。

また、友好使節のシノドス出席は、シノドスにエキュメニカルな性格を与え、参加者に勇気と希望をもたらしました。バルトロマイー世とカンタベリー大主教ローワン・ダグラス・ウィリアムズ師の参加はとくに印象的でした。新しい福音宣教は、教会共同体全体の一致を必要としているということの具体的なしるしになりました。

審議内容

前回の第12回通常シノドスは「神のみことば」がテーマであり、その前が「感謝の祭儀・聖体」がテーマでした。今回のシノドスのテーマである「キリスト教信仰を伝えるための新しい福音宣教」は、これら前回と前々回のシノドスのテーマから必然的に導き出されたもので、「信仰の営み」としての一貫性のあるテーマとして選ばれています。なぜなら、新しい福音宣教の目的は信仰の伝達であり、さまざまな困難や障害に直面している信仰伝達の過程は、新しい福音宣教という目的に向けて遂行されるからです。

3週間の間テーマについて審議したおもな要点は、①新しい福音宣教の

2. 世界代表司教会議（シノドス）に参加して

本質は何か、②教会を取り巻いている現代の社会的・文化的・宗教的現状とその課題は何か、③教会はそれらの課題に何を答えたらいいか、④それらの具体策をだれがどのように推進していくか、ということに焦点を絞り、最終的に58の提言にまとめて教皇に提出しました。同時に、審議された内容は「神の民へのメッセージ（最終メッセージ）」としてもまとめられ、公表されました。さまざまな困難や逆風の中でも、むしろ勇気づけと励ましにあふれたメッセージであるとの印象を受けました。

教皇に提出された58の提言の中には具体的な取り組みの提言もいくつか含まれていました。司教協議会レベルで取り組むものや、教区で取り組むもの、小教区や団体や家庭で取り組むものなどさまざまですが、近い将来、教皇が使徒的書簡か自発教令の形で公式に発表します。

日本の司教団は、数年前から日本の教会の方向性と新たな福音宣教について審議していました。その中で確認されたことは、1984年に発表された「日本の教会の基本方針」と「優先課題」は間違っていなかったという結論でした。つまり、社会の現実と生活の現場から信仰を見つめ直し、社会と人々に開かれた教会共同体造りを目指しながら、人々に寄り添い、人々とともに歩む教会共同体、とくに小さく弱くされた人々を優先し、ともに喜びを分かち合える共同体に成長することを目指して、これまで歩んできました。その努力はさまざまな実りとなって確実に成果をもたらしているのも事実ですし、以前にもまして共同体が豊かに成長しているのも確認できます。しかし、現実の社会は、バブルの崩壊などに象徴されるように、あまりにも急速に激変し、日本の教会がその変化のスピードについていくことができず、目指す方向での実現には程遠い側面があることも素直に認めざるをえません。改善と刷新の余地はまだまだ多岐に渡っていますが、今回のシノドスは、日本の教会が推進している基本方針と優先課題を後押ししてくれる内容であったと思います。今回のシノドスで審議された「キリスト教信仰を伝えるための新しい福音宣教」の成果が、日本の教会においても、大きく花開き、素晴らしい実を結ぶことを念じています。

3. 開催概要

世界代表司教会議開催に先立って、シノドス事務総局のニコラ・エテロヴィッチ事務総長は、2012年10月5日(金)、今回のシノドスの開催概要を発表した。以下はその全文の翻訳である(原文イタリア語)。

はじめに

「全世界に行って、すべての造られたものに福音をのべ伝えなさい」(マルコ16・15)。マルコによる福音書の結びに置かれた、この復活した主イエスのことばをもって、教会の宣教の時代は開始します。教会は、福音を告げ知らせるため、つねにどこにおいてもすべての善意の人に福音を知らせるために存在します。この命令は変わることがありません。福音の受け手と、彼らが生きる社会的、文化的、宗教的状况が変わっても、イエス・キリストとその福音が「きのうも今日も、また永遠に」(ヘブライ13・8) 変わることがないのと同じです。罪と死に打ち勝った栄光の主の述べた宣教命令は、これから開催される世界代表司教会議(シノドス)第13回通常総会の活動の特徴でもあります。イエスのことばは、「新しい福音宣教の時代」というタイトルがつけられた、『討議要綱』の第2章の考察をも導きました。ご承知のとおり、シノドスは2012年10月7日から28日まで、「キリスト教信仰を伝えるための新しい福音宣教」をテーマとして開催されます。ところで、シノドスの議論の二つの側面を結びつけることが重要です。実際、このことが、新しい福音宣教の目的が、信仰の伝達であることを示します。他方で、現代、さまざまな障害に直面している信仰の伝達の過程は、新しい福音宣教という目的に向けて遂行されます。

シノドスの準備と展開は複雑で骨の折れる過程です。それは、シノドスの開催と、とくに多くのシノドス参加者との協力の上で、シノドス事務総局の多くの仕事を要求します。一般的に言えば、この過程では相互に関連する3つの側面が区別できます。(1)霊的な次元、(2)神学的・司牧的考察、そして(3)技術的な開催準備です。

一 霊的次元

シノドスの活動のすべてに伴い、これを生かすのは祈りです。いずれにせよ、キリスト信者は、主イエスの模範に従って、絶えず祈るよう招かれています（一テサロニケ5・17）。さらに、シノドスの主宰者であるローマ司教を囲んで集まった、全世界の司教団を代表する司教の集会は、祈りの雰囲気なしに進むことがありえません。シノドス準備に伴い、また2012年10月4日の教皇ベネディクト十六世のロレート巡礼で象徴される祈りは、シノドスの議論の中で第一の場を占めます。とくに教皇は4回の典礼を司式します。シノドス第13回通常総会は10月7日の荘厳な感謝の祭儀をもって開始します。このミサの中で、教皇は二人の教会博士の宣言を行います。アビラの聖ヨハネ（1499／1500-1569年）とビンゲンの聖ヒルデガルト（1098 - 1179年）です。シノドスの議論は、シノドスに参加したすべてのシノドス教父と司祭が共同司式して行われる10月28日の主日のミサで終わります。10月21日、教皇は7人の福者の列聖式を司式します。ジャック・ベルテュー（1838-1896年）、パドロー・カルングソッド（1654 - 1672年）、ジョヴァンニ・バッティスタ・ピアマルタ（1841-1913年）、マリア・デル・モンテ・カルメロ・サレス・イ・バラングエラス（1848 - 1911年）、マリアヌス・コープ（1838 - 1918年）、カトリ・テカクウィタ（1656 - 1680年）、アンナ・シェファー（1882 - 1925年）です。第二バチカン公会議開幕50周年と『カトリック教会のカテキズム』発布20周年を記念してささげられる10月11日のミサは特別に重要です。この日、教皇は「信仰年」を開始するからです。「信仰年」は2013年11月24日の王であるキリストの祭日に終わります。

シノドス教父は、シノドスの初めに聖霊に祈り求めます。聖霊こそがシノドスの会議の主役だからです。毎朝、会議は朝の祈りで始まります。午後の会議の前にも短い祈りが唱えられます。午前と午後の会議の終わりには、教会の母であり新しい福音宣教の星である聖なるおとめマリアのご保護を心から祈ります。シノドス・ホールに隣接した礼拝堂には聖体が置かれています。それは、シノドス参加者が会議の前後に師である主のみ前でしばし黙想できるためです。主は福音を告げるために弟子たちを世界中に遣わしました。福音は現代人のためのものでもあります。

二 神学的・司牧的考察

教皇ベネディクト十六世がカトリック教会の司教団への意見聴取の後にシノドスのテーマを選んだ後、シノドス事務局は、シノドスの議論を考察した文書である『提題解説』を作成しました。『提題解説』はシノドス事務局通常顧問会と専門家の助けと協力によって作成されました。『提題解説』は2011年3月4日に発表されました。シノドス事務局とかかわりのあるあらゆる教会機関は、『提題解説』の質問に対する回答を2011年11月1日までに送るよう求められました。90.5%に達した高い回答率は、部分教会と他の機関のシノドスのテーマに対する大きな関心を示すものです。回答結果は次のとおりです。13の自主権を有する東方カトリック教会のうち11が回答、ローマ教皇庁の26機関から25が回答。さらにシノドス事務局は修道会総長連合からも回答を受け取りました。114の司教協議会から93が回答。大陸別では、オセアニア100%、アメリカ95.8%、アジア88.8%、ヨーロッパ81.25%、アフリカ66.6%です。シノドス事務局通常顧問会は回答結果を分析して、『討議要綱』に要約しました。『討議要綱』は2012年6月19日に発表されました。『討議要綱』はシノドスの議題となるため、シノドス教父は皆、発表の中でこれを参照しなければなりません。こうしてシノドスはすでにまとめられたテーマを深め、教会と社会にとって重要なテーマに新たな光を当てることができるのです。

他の文書もシノドスの準備にとって重要な役割を果たしました。すなわち、第一に、教皇ベネディクト十六世のさまざまな発言における考察です。祈りに関する講話のほかに、2つの特別に重要な文書を思い起こす必要があります。すなわち、自発教令の形で書かれた2つの使徒的書簡です。一つは2010年9月21日の『ウビクムクエ・エト・センペル』です。教皇はこの書簡により教皇庁新福音化推進評議会を設立しました。第二は2011年10月11日の『信仰の門』です。教皇ベネディクト十六世はこの書簡で「信仰年」開催を告示しました。シノドスの準備に際してこの2文書がともに考慮されました。

三 技術的な開催準備

『シノドス規則』に従い、自主権を有する東方カトリック教会とローマ教

皇庁の代表者が職務上、シノドスに参加します。教皇が任命したシノドス教父に加えて、シノドス教父として、それぞれの司教協議会と、(25人以上の司教がいる)自主権を有する東方カトリック教会、そして(10名の代表を選出する権利を有する)修道会総長連合の代表者が選ばれました。シノドス事務総局は、選出されたシノドス教父の教皇による承認に協力しました。

いうまでもなく、シノドス事務総局の職員もシノドスの進行にとってたいへん重要です。

四 シノドス参加者

シノドス第13回通常総会には262名のシノドス教父が参加します。これはシノドス史上最大の数です。うちヨーロッパから103名、アメリカから63名、アフリカから50名、アジアから39名、オセアニアから7名です。シノドス教父の大半の182名は選出された代表者です。うち172名は司教協議会の、10名は修道会総長連合の代表です。自主権を有する東方カトリック教会の代表者は3名、職務上の参加者は37名、教皇による任命者は41名です。全体の内訳は、総大司教6名、枢機卿49名、首位大司教6名(うち1名は枢機卿)、大司教71名、司教120名、司祭14名です。自主権を有する東方教会の代表者は10名、司教協議会会長32名、ローマ教皇庁の責任者は26名、裁治権者211名、補佐司教11名です。

ご存じのとおり、教皇ベネディクト十六世は2011年10月22日に総書記としてワシントン(米国)大司教のドナルド・ウィリアム・ヴェール枢機卿を、特別秘書としてモンペリエ(フランス)大司教のピエール＝マリー・カレ師を任命しました。

2012年6月29日付で教皇は議長代理として、香港(中国)司教のジョン湯漢(トンホン)枢機卿、グアダハラ(メキシコ)大司教のフランシスコ・ロブレス・オルテガ枢機卿、キンシャサ(コンゴ民主共和国)大司教のローラン・モンセングオ・パシンヤ枢機卿を任命しました。

シノドス総会には45名の専門家、49名のオブザーバーも参加します。これらは多くの専門家と5大陸で福音宣教に携わる人々から選ばれた男性・女性です。

カトリック教会とまだ完全な交わりをもたない15の教会・教会共同体の

友好使節も参加します。このことに関して特記すべきなのは、カンタベリー大主教で英国教会と世界聖公会の主座主教であるローワン・ダグラス・ウィリアムズ師がシノドスの中で発表を行うことです。さらに、コンスタンチノープル大主教・世界総主教のバルトロマイー一世も10月11日のミサに参加します。二人の存在はシノドスにとって特別のエキューメニカルな貢献です。

シノドスには3名の特別招待者が参加します。テゼ（フランス）の院長のブラザー・アロイス、アメリカ聖書協会の総主事のラマール・ヴェスト師、バーゼル大学（スイス）バイオセンター微生物学教授で教皇庁科学アカデミー会長のヴェルナー・アーバー博士です。

メディア関係者への記者発表は通常5名の広報担当者が行います。5名はそれぞれシノドスの5言語を担当します。広報担当者は、10月8日（月）、18日（木）、26日（金）、27日（土）を除く毎日、記者発表を行います。これらの日にはシノドス教父も参加した記者会見が予定されています。

シノドス教父を32名のアシスタントと30名の通訳がサポートします。シノドス通常総会には総計400名以上の人間が参加します。

五 重要な行事

教皇の承認したシノドスの日程によれば、23回の全体会議、8回の分団会が予定されています。最初の会議で、シノドスの公式言語に従って分けられた12の分団会のメンバーが分団会議長と報告者を選出します。名称が示すとおり、分団会議長は議論を司会し、報告者は10月19日（金）の全体会議で分団会の議論のおもな内容を報告します。

重要な行事のうち、次のものを挙げるのが適切と思われます。

10月8日（月）：事務総長と総書記が報告を行う予定です。午後、5大陸の司教団の代表者がシノドスのテーマに関して短い発表を行います。これらの発表はシノドスのテーマがそれぞれの大陸の部分教会でどのように受け止められたかを要約します。

10月9日（火）：午後の全体会議で教皇庁福音宣教省長官のマルク・ウエレット枢機卿が2008年10月に行われた第12回通常シノドスから生まれたシノドス後の使徒的勧告『主のことば』の受容を報告。

10月10日（水）：ローワン・ダグラス・ウィリアムズ・カンタベリー大主

教・英国と世界聖公会主座主教が午後の全体会議で、新しい福音宣教とキリスト教信仰の伝達という問題に関する聖公会の見解を発表。

10月12日（金）：バーゼル大学（スイス）バイオセンター微生物学教授、教皇庁科学アカデミー会長のヴェルナー・アーバー博士が科学と信仰の関係の考察を発表。同博士は午後の全体会議でも発表。

これらの発表は毎日、午後の全体会議の終わりに予定される自由討議を活発なものとするのが期待されています。

10月11日（木）のミサの中で、世界総主教バルトロマイ一世がローマ司教ベネディクト十六世とミサ参加者全員に「信仰年」開年に際してのあいさつを行います。

会議の初めに、シノドス教父は12人から成るメッセージ委員会委員を選出します。同委員会委員長のフィレンツェ（イタリア）大司教のジュゼッペ・ベトーリ枢機卿と副委員長のマニラ（フィリピン）大司教のルイス・アントニオ・G・タグレ師は教皇によって任命されています。教皇は他の2名の委員も任命し、残りの8名の委員がシノドス教父によって選出されます。メッセージ委員会は「最終メッセージ」を起草します。同メッセージは、シノドス教父の承認を得た後、発表され、シノドスで扱われたテーマについて神の民に知らせます。

六 結び

これまでのシノドスの経験を検討した結果、教皇ベネディクト十六世が2005年に改訂したシノドスの方法は基本的に変わりません。それゆえ、シノドス教父はそれぞれ全体会議で5分間の発表を行います。午後の全体会議の6時から7時まで予定される自由討議では、シノドス教父の発言は3分以内とします。それは交わりと団体性の感覚の表現として、できるだけ多くの人の参加を促すためです。

友好使節とオブザーバーの発表は4分以内です。

シノドス教父の用意するテキストは長くてもよく、事務総長に提出されます。いずれにせよ、「シノドス便覧」の指示に従ってそれぞれのシノドス教父が用意した短い要約が発表されます。発表時間の制限は、できるだけ多くの参加者が発表し、シノドスの考察をいっそう豊かなものとするのを可能に

します。

作業を簡便にし、時間を節約するために、第13回通常総会でも、電子投票機が使用されます。しかし、提言に対する投票の重要性を考慮して、通常の投票方法も残します。したがって、投票は筆記形式と電子形式の両方で行われます。提言に対する投票は、電子投票が行われる全体会議に参加できないシノドス教父によって行われることにご留意ください。それゆえ、正式な投票数は票数を計算する特別委員会が計算します。特別委員会はしかるべきときに設立され、筆記投票の計算を行います。

シノドス第13回通常総会の活動日程は、シノドス教父が一致して参加する行事の重要性を示します。ともに熱心に祈り、耳を傾け、考察することは、司教の間の、また司教団と司教団の頭であるローマ司教との団体的な愛を深めます。さらに、神の民から選ばれた相当な数の人々のシノドスへの参加も、カトリック教会のすべての構成員の間のきずなを強めます。友好使節のシノドス出席は、シノドス総会に重要なエキュメニカルな性格を与えます。このことは世界総主教のバルトロマイ一世とカンタベリー大主教で英国と世界聖公会の主座主教のローワン・ダグラス・ウィリアムズ師の参加によってさらに強化されます。わたしたちは主イエスの祈りが早く実現することをともに祈ります。「父よ、あなたがわたしのうちにおられ、わたしがあなたのうちにいるように、すべての人を一つにしてください。彼らもわたしたちのうちにいるようにしてください。そうすれば、世は、あなたがわたしをお遣わしになったことを、信じるようになります」(ヨハネ 17・21)。現代世界で福音を告げ知らせ、新しい福音宣教を行うという途方もない仕事は、教会・教会共同体全体の一致を必要とします。わたしたちはこの歩みをともに行います。祈りと、キリスト教的生活のあかしをもって。そして、新たな力で使徒聖ペトロの264代目の後継者である教皇ベネディクト十六世との交わりのうちに次のように告白しながら。「あなたはメシア、生ける神の子です」(マタイ 16・16)。

4. 参加者・開催日程

開催期間

2012年10月7日（日）～28日（日）

会議場

バチカン、シノドス会議場（パウロ六世謁見ホールの建物内）

テーマ

「キリスト教信仰を伝えるための新しい福音宣教」

投票権をもつ参加者（シノドス教父）

議長：教皇ベネディクト十六世

事務総長：ニコラ・エテロヴィッチ大司教（シノドス事務総長）

議長代理：ジョン湯漢（トンホン）枢機卿（香港司教）

フランシスコ・ロブレス・オルテガ枢機卿

（メキシコ・グアダハラ大司教）

ローラン・モンセングオ・パシンヤ枢機卿

（コンゴ民主共和国・キンシャサ大司教）

総書記：ドナルド・ウィリアム・ヴェール枢機卿（米国・ワシントン大司教）

特別秘書：ピエール＝マリー・カレ（フランス・モンペリエ大司教）

広報委員会委員長：クラウディオ・マリア・チェッリ大司教

（教皇庁広報評議会議長）

副委員長：ヤン・バブヤク（スロバキア・プレショフ・ビザンティン
典礼カトリック教会首都大司教）

メッセージ委員会委員長：ジュゼッペ・ベトーリ枢機卿

（イタリア・フィレンツェ大司教）

副委員長：ルイス・アントニオ・G・タグレ枢機卿

（フィリピン・マニラ大司教）

訴訟委員会委員長：レイモンド・レオ・バーク枢機卿

（教皇庁最高裁判所長官、米国・セントルイス名誉大司教）

副委員長：ジョゼフ・カラランガット

（インド・パライ・シリア・マラバル典礼カトリック教会司教）

スタニスワフ・ガデキ（ポーランド・ポズナン大司教）

東方教会から：18名

各国司教協議会 アフリカから：43名
アメリカから：44名
アジアから：25名
ヨーロッパから：47名
オセアニアから：5名

修道会宣教会総長連盟代表：10名

教皇庁各省庁代表：26名

教皇による任命者：39名

その他の参加者

専門家：45名

オブザーバー：49名

シノドス事務総局：13名

アシスタント：31名

広報担当：7名

友好使節（キリスト教諸派）

12名

特別招待者（3名）

ブラザー・アロイス（フランス・テゼ院長）

ラマール・ヴェスト（アメリカ聖書協会総主事）

ヴェルナー・アーバー博士（スイス・バーゼル大学バイオセンター微生物学教授、教皇庁科学アカデミー会長）

日程（準備期間を含む）

2010.10.24 教皇ベネディクト十六世、世界代表司教会議第13回通常総会開催を発表。

2011. 2. 2 「提題解説」（Lineamenta）教皇庁シノドス事務総局より発表。

2011.10.22 教皇ベネディクト十六世、シノドス総書記、特別秘書を任命。

2011.11. 1 「提題解説」回答書提出締切。

2012. 5.27 「討議要綱」（Instrumentum Laboris）発表。

2012. 6.30 教皇ベネディクト十六世、議長代理を任命。
2012. 9.18 教皇ベネディクト十六世、シノドス参加者を任命。
- 2012.10. 7 シノドス開会、**教皇ベネディクト十六世主司式による開会ミサ** (サンピエトロ広場)。
10. 8 第1回全体会議。教皇の三時課の祈りのための講話。議長代理あいさつ、事務総長報告、総書記による基調講演 (Relatio ante disceptationem)。第2回全体会議。5大陸代表による発表。
10. 9 第3回・第4回全体会議。メッセージ委員選挙 (第1回)。使徒的勧告『主のことば』についての報告。
- 10.10 分団会 (第1回)。第5回全体会議。ローワン・ウィリアムズ・カンタベリー大主教の発表。
- 10.11 「信仰年」開年ミサ (サンピエトロ広場)。第6回全体会議。メッセージ委員選出 (第2回)。
- 10.12 第7回・第8回全体会議。W・アーバー博士の発表。
- 10.13 第9回・第10回全体会議。
- 10.15 第11回・第12回全体会議。
- 10.16 第13回・第14回全体会議。ブラザー・アロイスの発表。
- 10.17 第15回・第16回全体会議。中間報告 (Relatio post disceptationem)。
- 10.19 分団会 (第2回・第3回)。第17回全体会議。分団会報告。
- 10.20 分団会 (第4回)。第18回全体会議。最終メッセージ草案発表と討議。
- 10.21 7人の福者の列聖式ミサ (サンピエトロ広場)。
- 10.23 第19回全体会議。
- 10.24 分団会 (第5回)。
- 10.26 分団会 (第6回・第7回・第8回)。第20回全体会議。「**最終メッセージ**」投票と発表。「提言」最終発表。
- 10.27 第21回全体会議。「**提言**」投票と発表。
- 10.28 **教皇主司式による閉会ミサ** (サンピエトロ大聖堂)。「お告げの祈り」。

(太字の文書を本報告書に収録)

5. 開会ミサ説教

教皇ベネディクト十六世

10月7日（日）午前9時30分から、サンピエトロ広場で、教皇ベネディクト十六世司式の下、世界代表司教会議（シノドス）第13回通常総会開会ミサが行われた。ミサは教皇とともにシノドス教父とスペインとドイツの司教協議会司教が共同司式した。このミサの中で、教皇はアビラのヨハネとビンゲンのヒルデガルトを教会博士に宣言した。以下に訳出するのは、教皇がミサで行った説教の全文（原文イタリア語）。

この日は年間第27主日で、朗読箇所は創世記2章18 - 24節、ヘブライ人への手紙2章9 - 11節、マルコによる福音書10章2 - 16節であった。

親愛なる兄弟である司教の皆様

親愛なる兄弟姉妹の皆様

この荘厳な感謝の祭儀をもって世界代表司教会議（シノドス）第13回通常総会を開会します。シノドスのテーマは「キリスト教信仰を伝えるための新しい福音宣教」です。このテーマは、教会とそのすべての構成員、家族、共同体、団体の生活に対する今後の方向づけを反映します。この展望は、シノドスの開会と「信仰年」の開始が一致することによって強められます。「信仰年」は、第二バチカン公会議開幕50周年を記念して、10月11日（木）から始まります。シノドス総会に参加するために来られた皆様を心から歓迎申し上げます。とくに（ニコラ・エテロヴィッチ）シノドス事務総長とその協力者に感謝申し上げます。他の教会・教会共同体の友好使節と、ここにおられるすべてのかたがたにごあいさつ申し上げます。どうか日々の祈りの中で、これから3週間にわたって行われる議論に同伴してくださるようお願いいたします。

今日の主日のことばの典礼の聖書朗読は、考察すべき二つのおもな点を示してくれます。一つは結婚です。これについては後で簡単に触れたいと思い

ます。もう一つはイエス・キリストです。これについてはすぐに取り上げます。ヘブライ人への手紙の箇所について解説する時間はありません。しかし、シノドス総会の初めにあたり、「死の苦しみのゆえに、『栄光と栄誉の冠を授けられた』」（ヘブライ2・9）主イエスに目を注ぎなさいという招きを受け入れなければなりません。神のことは、十字架につけられて栄光を受けたかたのみ前にわたしたちを置きます。それは、わたしたちの全生活、とくにこのシノドスの議論が、このかたのみ前で、このかたの神秘の光に照らされてなされるためです。あらゆる時代と場所で、福音宣教の中心また目的となるのはつねに、神の子イエス・キリストです（マルコ1・1参照）。十字架につけられたかたは、福音を告げ知らせる者の優れた意味での明白なしるしです。それは愛と平和のしるしであり、回心と和解への招きです。親愛なる兄弟である司教の皆様。まずわたしたちからこのかたに目を向け、その恵みによって清めていただくようではありませんか。

ここで簡単に「新しい福音宣教」について考察したいと思います。そして、「新しい福音宣教」を、通常の福音宣教、また「諸民族への（ad gentes）」宣教と関連づけたいと思います。教会は福音宣教を行うために存在します。弟子たちは主イエス・キリストの命令に忠実に従って、全世界に行って福音を告げ知らせ、キリスト教共同体を至るところに築きました。やがてこれらのキリスト教共同体は、多くの信者によってしっかりと組織化された教会となりました。歴史のさまざまな時期に、神の摂理は教会の福音宣教活動に新たな活力を与えました。アングロサクソン人やスラヴ人への福音宣教、アメリカ大陸への福音の伝達、後のアフリカ、アジア、オセアニアの人々への宣教の時代を考えてみるだけで十分です。このような力強い背景に照らして、たった今教会博士に宣言した二人の輝かしい人物に目を向けられることをうれしく思います。すなわち、アビラの聖ヨハネとビンゲンの聖ヒルデガルトです。現代においても聖霊は教会の中で福音を告げ知らせるための新たな努力を促します。新たな霊的・司牧的な動きは、第二バチカン公会議のうちにもっとも普遍的な表現と正統な刺激を見いだしました。この新たな福音宣教への動きは、そこから発展した二つの特別な「枝」により影響を及ぼします。一つは「諸民族への」宣教、つまりイエス・キリストとその救いのメッセージをまだ知らない人への福音の告知です。もう一つは「新しい福音宣教」です。「新しい福音宣教」は、洗礼を受けながら、教会から離れ、キリスト教的

生活を送っていない人々におもに向けられます。今日から始まるシノドス総会は、この新しい福音宣教をテーマとしています。それは、これらの人々があらためて主と出会う助けとなるためです。主のみが、わたしたちの生活を深い意味と平和で満たしてくださるからです。またそれは、信仰を再発見させるためです。信仰こそが、個人と家庭と社会の生活に喜びと希望をもたらす源泉だからです。この特別な方向づけが、固有の意味での宣教事業や、わたしたちのキリスト教共同体における通常の福音宣教活動をないがしろにすべきでないことはいうまでもありません。実際、これらは唯一の福音宣教の三つの側面であり、互いに補い合い、豊かにし合うものだからです。

福音と第一朗読に見られる結婚というテーマは、この観点からとくに注目すべきです。神のことばのメッセージは、創世記に見いだされ、イエスご自身があらためて引用した次のことばに要約できます。「こういうわけで、男は父母を離れて女と結ばれ、二人は一体となる」(創世記2・24、マルコ10・7-8)。このみことばは現代のわたしたちに何をいおうとしているのでしょうか。わたしには次のように思われます。このことばは、すでに知っているながら、完全な意味では重視していないことをわたしたちがもっと自覚するよう招いています。結婚はそれ自体で福音です。現代世界にとって、とくに非キリスト教化した世界にとってのよい知らせです。男と女が結びつくこと、二人が愛のうちに、すなわち実り豊かで不解消の愛のうちに「一体となる」ことは、神について力強くかつ雄弁に語るしるしです。このことは現代、ますます雄弁に語られるようになりました。なぜなら、残念ながらさまざま理由で、まさに古くから福音宣教がなされた地域において、結婚は深刻な危機に見舞われているからです。それは偶然ではありません。結婚は信仰と結びついているからです。これはあいまいな意味でそういうものではありません。結婚は忠実で不解消の一致です。だからそれは、三位一体の神に由来する恵みを基盤とします。神はキリストにおいて、十字架に至るまでの忠実な愛をもってわたしたちを愛してくださったからです。現代のわたしたちはこのことばの真実を余すところなく理解することができます。多くの結婚が残念ながらうまくいかなかったという悲しむべき事実を知っているからです。信仰の危機と結婚の危機は明らかに対応しています。教会が長年にわたって述べ、あかししているとおり、結婚は新しい福音宣教の単なる対象ではなく、むしろその主体とならなければなりません。こうした取り組みは、共同体や

運動団体と結びついた多くの経験によってすでに示されてきました。しかし、最近開催された「世界家庭大会」が示したような形で、教区や小教区のネットワークの中でもますますこの取り組みを実現すべきです。

第二バチカン公会議が福音宣教に新たな刺激を与えた重要な考えの一つは、聖性への普遍的召命です。聖性はそれ自体としてすべてのキリスト信者にかかわるということです（『教会憲章』39 - 42参照）。聖人は、福音宣教をあらゆる表現を用いて行う、そのまことの担い手です。聖人は、特別な意味で、新しい福音宣教の開拓者また実行者でもあります。聖人は、その執り成しと生活の模範によって、聖霊の新たな望みに注意を向けながら、福音とキリストとの交わりのすばらしさを、無関心な人や、敵対的な人にさえも示します。そして、いわば生温い信者を招きます。喜びと信仰、希望と愛をもって生きなさい。神のこぼれと秘跡、とくにいのちのパンである聖体の「味わい」を再発見しなさい。聖人と聖女は、寛大な宣教者の中に多数現れます。宣教者はキリスト信者でない人々に福音を告げ知らせます。かつては宣教国で、現在ではキリスト信者でない人が暮らすあらゆる地で。聖性は、文化、社会、政治、宗教の違いを乗り越えます。愛と真理という、聖性を示す言語は、すべての善意の人に理解され、それらの人々をイエス・キリストへと近づけます。イエス・キリストこそが新しいいのちの尽きることのない源泉だからです。

ここで少しだけ、今日、教会博士の列に加えられた二人の聖人をたたえたいと思います。アピラの聖ヨハネは16世紀の人です。彼は深い聖書学者であると同時に、熱心な宣教精神をもっていました。彼はキリストが人類のためになさったあがないの神秘を独自のしかたで深く究めることができました。神の人であった聖ヨハネは、絶えざる祈りを使徒的活動と結びつけました。彼は、説教と、秘跡をしばしば授けることに献身しました。教会の実り豊かな改革のために、司祭志願者と修道者と信徒の養成の改善に集中して取り組みました。

12世紀の重要な女性であるビンゲンの聖ヒルデガルトは、当時の教会の発展に貴重な貢献を行いました。彼女は神から与えられたたまものを用い、活発な知性と深い感性と公認された霊的権威を示しました。主は彼女に預言的な霊と、時のしるしを見分ける熱烈な力を与えました。ヒルデガルトは被造物への際立った愛を深め、医学、詩、音楽に専念しました。何よりも彼女は、

キリストとその教会への深く忠実な愛をつねに保ちました。

聖性への招きとして示された、キリスト教的生活の理想に目を向けながら、わたしたちは、多くのキリスト信者の弱さ、そればかりか個人また共同体としての罪をも謙遜に認めるように促されます。これらの弱さと罪は、福音宣教の大きな妨げとなっているからです。そして、神の力を見いだすよう促されます。神の力は、信仰を通じて、人間の弱さの中で示されるからです。それゆえ、心から回心しようとする心構えなしに、新しい福音宣教について語ることはできません。新しい福音宣教の王道は、神また隣人と和解させていただくことです（二コリント5・20参照）。キリスト信者は、清められることによって初めて神の子としての身分を正当に誇ることができます。わたしたちは神の像として造られ、イエス・キリストの貴い血によってあがなわれたからです。そして、喜びを味わい、それを近くの人と遠くの人を含めたすべての人と分かち合うことができます。

親愛なる兄弟姉妹の皆様。聖人の交わりに支えられながら、シノドス総会を神にゆだねようではありませんか。とくに偉大な福音宣教者の執り成しを願ひ求めようではありませんか。わたしたちは何よりもまず、深い愛をこめて福者教皇ヨハネ・パウロ二世を思い起こしたいと思います。ヨハネ・パウロ二世の長きにわたる教皇職は、新しい福音宣教の模範でもあるからです。新しい福音宣教の星である聖なるおとめマリアのご保護に身をゆだねようではありませんか。おとめマリアとともに、聖霊が特別に注がれることを祈り願います。どうか聖霊が天からシノドス総会を照らしてくださいように。シノドスが現代の教会の歩みに豊かな実りをもたらすことができますように。アーメン。

6. 宮原良治司教の発表

シノドス8日目の10月15日（月）午前で開催された第11回全体会議で、日本からの代表者である、福岡教区の宮原良治司教の発表が行われた。以下はその発表内容全文（原文イタリア語）。

昨年、日本は激しい地震と津波、それに続く原子力発電所の事故の被害を受けた。その折、教皇ベネディクト十六世、国際カリタス、また多くの司教協議会とすべての国の善意の人々が日本国民にさまざまな支援と祈りを送り、心からの連帯を表明してくださった。それゆえこの機会に、日本司教協議会を代表して、教皇と全世界に感謝申し上げる。

この未曾有の災害からの復興という社会状況を踏まえて、第二バチカン公会議文書、とくに『現代世界憲章』を読むことは有益である。『現代世界憲章』は、社会における教会の位置と役割をはっきりと示しながら、こう述べる。「現代人の喜びと希望、悲しみと苦しみ、とりわけ、貧しい人々とすべて苦しんでいる人々のものは、キリストの弟子たちの喜びと希望、悲しみと苦しみでもある。真に人間的なことから、キリストの弟子たちの心の中に反響を呼び起こさないようなものは一つもない」（同1）。

日本の教会は社会に対する教会の本来の役割と使命を自覚している。実際、今回の災害の被害に遭った地域に赴き、苦しむ人々を支援する人は、苦しむ人々から多くのものを与えられる。たとえば、希望、励まし、慰めである。イエスは町の中に隠れておられるかもしれない。われわれは社会の中でイエスを捜さなければならない。それは、人々の声に耳を傾け、彼らが何を必要としているのか尋ねることによって、イエスと出会うためである。教会はいわば社会の動脈となることを望む。酸素と栄養を運び、老廃物を除去する動脈と静脈の働きによって人体が生かされるのと同じように、社会全体に希望と励ましと慰めをもたらす、新たな力を注ぐためである。教会が社会から遠ざかるなら、福音宣教は実を結ぶことができない。教会が福音宣教を通じて社会生活と家庭生活に新しい活力を豊かに注ぐことが不可欠である。そのため何よりも必要なのは、社会の現実に直面すること、現在の状況の中にはっきりとした「時のしるし」を見分け、福音の光を注ぐこと、社会全体を内側から刷新することである。

最後に、今回のシノドスが、信仰を真心から生き、困難な状況にあっても信仰を固く保とうと望む人々に、励ましと信頼を与える機会となることを望む。とくに宣教地においては、家族の中に一人しか信者がいない場合がまれでないどころか、むしろ多い。今回のシノドスを通じてわれわれがこれらの真面目な信者に勇気と希望と支えを与えるなら、シノドスは多くのすばらしい実を結ぶことを確信する。

7. 最終メッセージ（要約）

世界代表司教会議第13回通常総会は、10月26日（金）午前9時から始まった第20回全体会議で「最終メッセージ」を承認し、これを同日発表した。以下に訳出したのはその「要約」の全文（原文イタリア語）。

「最終メッセージ」の初めに、シノドス参加司教は、井戸のほとりに行われたイエスとサマリアの女の出会いについて語るヨハネによる福音書の箇所を思い起こします。それは空の桶をもって神を渇き求める現代人の象徴です。教会はこのような現代人のところに行き、主を現前させなければなりません。サマリアの女と同じように、イエスと出会う人は、福音の救いと希望を告知らせる証人とならずにはいられません。

シノドスは新しい福音宣教が行われる特別な状況を考察して、信仰を活性化させなければならないと呼びかけます。信仰は現代文化の中であいまいなものとなっているからです。また、洗礼を受けた多くの人の信仰が弱まっているからです。神は愛です。この神を現す主との出会いは、教会の中でのみ起こります。教会は人々を受け入れる共同体であり、交わりの体験です。さらにキリスト信者は他の場所でも証人となります。しかし教会は、福音をのべ伝えるには、まず自分が福音化されなければならないことを強調します。そこで教会は、自分自身から始めて、回心と呼びかけます。イエスの弟子の弱さは、宣教が信頼されるための重荷になっています。シノドス参加司教は、主が歴史の導き手であり、悪が最終的に勝利を収めることがないことを自覚しながら、キリスト信者を招きます。信仰をもって恐れに打ち勝ち、落ち着いた勇気をもって世に目を向けなさい。矛盾と問題に満ちていても、神は永遠に世を愛されるからです。それゆえ、悲観することはありません。グローバル化、世俗化、社会の新たな状況、移住は、たとえ困難と苦しみを伴うものであっても、福音宣教の機会とすべきです。市場の商品のように福音を広める戦略を見いだす必要はありません。むしろ人がイエスに近づく方法を再発見すべきです。

「メッセージ」は、家庭が福音宣教を行う自然な場であると考え、教会と政治と社会が家庭を支えなければならないことを再確認します。家庭におい

て女性が果たす特別な役割を強調します。そして、離婚して再婚した人々の痛ましい状況を思い起こします。秘跡を受けるための規律を再確認しながら、このような人々が主から決して見捨てられないことを強調します。教会はすべての人を受け入れる家だからです。「メッセージ」は奉献生活にも言及します。奉献生活は人生の地上を超えた意味のあかしです。小教区は福音宣教の中心です。「メッセージ」は司祭と奉献生活者の生涯養成の重要性も思い起こします。そして信徒（運動団体と新しい会）に、教会との交わりを保ちながら福音宣教を行うよう促します。新しい福音宣教は他の教会・教会共同体とも協力します。これらの教会・教会共同体も福音をのべ伝える同じ霊に導かれるからです。「メッセージ」は若者に特別な注意を向けます。若者の熱意を制限するのではなく、解放するために、彼らに耳を傾け、対話することを勧めます。

さらに「メッセージ」はさまざまな対話に目を注ぎます。すなわち、文化との対話（それは信仰と理性の協働を必要とします）、教育との対話、科学との対話（科学は、人間を唯物論に閉じ込めないかぎり、生活をより人間らしいものとするための協力者となります）、芸術との対話、経済と労働の世界との対話、病者と苦しむ人との対話、政治家との対話（政治家は、私心がなく透明な共通善への奉仕を行うことが求められます）、他の宗教との対話です。とくにシノドスは、諸宗教対話が平和に役立ち、原理主義を拒絶し、宗教者に対するあらゆる暴力を非難することを強調します。「メッセージ」は、「信仰年」、第二バチカン公会議と『カトリック教会のカテキズム』の記念が与える可能性を述べます。最後に、新しい福音宣教にとってとくに重要な、信仰生活の二つの表現を示します。すなわち、観想（沈黙は神のことばをいっそう受け入れることができるようにします）と、貧しい人への奉仕です（貧しい人の顔の上にキリストが見いだされるからです）。

「メッセージ」の最後の部分は、世界の諸地域の教会に目を向け、福音をのべ伝えるよう励まします。中東の教会には、平和と信教の自由のうちに信仰を實踐できるようになることを願います。アフリカの教会には、新旧の文化との出会いの中で福音宣教を推進することを求め、さらに、政府が紛争と暴力をやめるよう要請します。福音からかけ離れたさまざまな文化表現の中で生きている北アメリカの教会のキリスト信者は、回心して、移民と難民を広く受け入れなければなりません。ラテンアメリカには、貧困、暴力、新た

な宗教の多元化現象といった現代の問題に対して、継続的な宣教を行うよう招きます。少数者でありながら、しばしば社会から疎外され、迫害されているアジアの教会には、信仰を固く守るよう励まします。攻撃的な世俗化を特徴とし、過去の政治体制によって傷ついたヨーロッパは、人間の尊厳を定義し、共通善の構築を可能にした人文的文化を創造してきました。ヨーロッパのキリスト信者は、現在の問題にくじけることなく、それを課題として受け止めるべきです。最後にオセアニアに対して、あらためて福音をのべ伝える務めを感じるよう求めます。「メッセージ」は、新しい福音宣教の星であるマリアへの信頼をもって結ばれます。

8. 最終メッセージ

世界代表司教会議第13回通常総会は、10月26日（金）午前9時から始まった第20回全体会議で「最終メッセージ」を承認し、これを同日発表した。以下に訳出したのはその全文（原文イタリア語）。

兄弟姉妹の皆様。

「わたしたちの父である神と主イエス・キリストからの恵みと平和が、あなたがたにあるように」（ローマ1・7）。ローマ司教、教皇ベネディクト十六世の招きにより、「キリスト教信仰を伝えるための新しい福音宣教」というテーマを考察するために世界中から集まったわたしたち司教は、自分の部分教会に帰る前に、皆様にごあいさつしたいと思います。それは、今日、教会があかしをするために置かれたさまざまな状況の中で行う福音への奉仕を支え、方向づけるためです。

1 井戸のほとりのサマリアの女のように

イエスとサマリアの女の出会い（ヨハネ4・5－42参照）という福音の箇所から照らしていただきたいと思います。空の桶をもち、心の深い望み（それだけが人生に完全な意味を与えてくれるもの）を渇き求めながら、井戸のほとりにいるサマリアの女——自分が人生の中でこの女と同じような者だと思わない人はいません。現代、多くの井戸は人間の渇きにこたえようとしています。しかし、わたしたちは汚れた水を避けるために識別を必要とします。破滅をもたらしかねない失望に陥らないように、探求を正しく方向づける必要があります。

シカルの井戸のほとりのイエスと同じように、教会も現代人のそばに座らなければならないと感じています。それは、主を人々のうちに現存させ、主と出会うことができるようにするためです。主の霊だけがまことの永遠のいのちを与える水だからです。イエスだけがわたしたちの心の奥底を読み取り、わたしたちの真実をあらわにすることができます。女は町の人々に告白します。「このかたが、わたしの行ったことをすべて言い当てました」。この告知のことばは、人の心を信仰へと開く問いと結びついています。「もしかしたら、

このかたがメシアかもしれません」。このことばは、イエスとの出会いから新たないのちを得た人は、他の人に真理と希望を告げ知らせずにはいられないことを示しています。回心した罪人は、救いを知らせる者となり、町全体をイエスへと導きます。あかしを受け入れた人々は、個人的に出会いを体験するに至ります。「わたしたちが信じるのは、もうあなたが話してくれたからではない。わたしたちは自分で聞いて、このかたが本当に世の救い主であると分かったからです」。

2 新しい福音宣教

現代人をイエスへと、イエスとの出会いへと導くことは、古くから福音宣教が行われた地域も、最近それが行われた地域も含めて、世界のすべての地域にかかわる緊急課題です。実際、わたしたちは至るところで信仰を活性化しなければならないと感じます。信仰が個人のうちに根ざすこと、信仰が社会的に存在すること、信仰が明白な内容を持ち、一貫した結果をもたらすことを妨げる文化的状況の中で、信仰はあいまいなものとなる危険に瀕しているからです。求められているのは、最初からやり直すことではなく、「福音を告げ知らせないなら、わたしは不幸なのです」（一コリント9・16）とまで述べたパウロの使徒的精神をもって、福音を告げ知らせる長い道を歩むことです。福音は、初期キリスト教の時代から現代に至るまで、歴史を歩みながら、世界のあらゆる地域で信者の共同体を築いてきました。これらの共同体は、大きなものも小さなものも、宣教者と、少なからぬ殉教者と、イエスをあかししてきた人々の献身が生み出したものです。わたしたちはこれらの人々を感謝をこめて思い起こします。

社会的、文化的、経済的、政治的、宗教的に変化した状況は、ある新しいことをわたしたちに要求します。それは、ヨハネ・パウロ二世が述べたとおり、「新たな熱意と方法と表現をもって」（ヨハネ・パウロ二世「ラテンアメリカ司教会議（CELAM）第19回総会での演説（ポルトープランス、1983年3月9日）」³）福音宣教を行うことを通じて、自分の共同体の信仰体験を新しいしかたで生き、告げ知らせることです。ベネディクト十六世がいうとおり、この福音宣教は「洗礼を受けながら、教会から離れ、キリスト教的生活を送っていない人々におもに向けられます。……それは、これらの人々が

あらためて主と出会う助けとなるためです。主のみが、わたしたちの生活を深い意味と平和で満たしてくださるからです。またそれは、信仰を再発見させるためです。信仰こそが、個人と家庭と社会の生活に喜びと希望をもたらす源泉だからです」(ベネディクト十六世「世界代表司教会議第13回通常総会開会ミサ説教(2012年10月7日)」)。

3 教会におけるイエス・キリストとの個人的な出会い

新しい福音宣教がどのような形をとるかを語る前に、わたしたちは、深い確信をもって、皆様にこう語らなければならないと感じます。イエス・キリストとの間に築かれる関係の中で、すべてのことは信仰によって決まります。イエス・キリストがまず最初にわたしたちと出会いに来られるからです。新しい福音宣教を行うとは、現代人の、何よりもわたしたち自身のしばしば散漫で混乱した心に、キリストと出会うことのすばらしさと永遠の新しさを示すことです。わたしたちは皆様にお願いします。主イエス・キリストのみ顔を仰ぎ見てください。イエス・キリストのいのちの神秘に歩み入ってください。イエス・キリストのいのちは、十字架に至るまでささげられ、死からの復活によって御父によってたまものとして確証され、霊を通じてわたしたちに伝えられました。イエスというかたのうちに、全人類家族に対する父である神の愛の神秘が示されました。神は人類を偽りの自律のうちに放置せず、むしろ新しい愛の契約によってご自身へと再び結びつけたのです。

教会は、わたしたちが歴史の中でキリストと出会えるように、キリストが与えてくださった場です。キリストは教会にゆだねられました。みことばと、わたしたちを神の子とする洗礼、聖体、とくにゆるしの秘跡による罪のゆるしの恵みを。三位一体の神秘の映しである交わりの体験と、すべての人に対する愛を生み出す霊の力を。わたしたちは、疎外された人々が皆自分の居場所を見いだせるような、温かい共同体を築かなければなりません。具体的な交わりの体験を与えなければなりません。交わりの体験は、愛の熱い力をもって——「見る、彼らは互いに愛し合っている」(テルトゥリアヌス『護教論』: *Apologeticum* 39, 7 [鈴木一郎訳、『キリスト教教父著作集14』教文館、1987年、91頁参照])——現代人の幻滅したまなざしを引き寄せます。信仰のすばらしさはとくに典礼、とりわけ主日の感謝の祭儀の中で輝かなければなり

ません。実際、教会は典礼祭儀の中で神のわざの姿を示し、ことばとわざによって福音の意味を目に見えるようにするからです。

現代のわたしたちの責務は、具体的な形で人々が教会の体験に近づけるようにし、渇いた人々がイエスとの出会いへと招かれる井戸を増やし、人生の荒野の中でオアシスを提供することです。キリスト教共同体と、すべての主の弟子には、このことを行う責任があります。福音がすべての人の生活と交わることができるように、弟子の一人ひとりに、かけがえのないあかしがゆだねられています。そのためには、生活の聖性が要求されます。

4 イエスと出会い、聖書に耳を傾ける機会

これらすべてのことをどのように行えばよいかと尋ねる人がいるかもしれませんが。新しい戦略を立てる必要はありません。福音は宗教の市場に出す製品ではないからです。むしろ必要なのは、イエスが人々に近づき、人々を招いたやり方を再発見し、現代の状況の中でそれを実践することです。

たとえば次のことを思い起こしてみたいと思います。イエスがペトロ、アンデレ、ヤコブとヨハネに、それぞれの仕事の現場の中でどのように問いかけたか。ザアカイがどのように単純な好奇心から、師であるかたとの温かい会食をするに至ったか。ローマの百人隊長がどのように部下の病気をいやしてほしいと頼んだか。生まれつきの盲人が自分を疎外された状況から解放するかたとしてどのようにイエスに呼びかけたか。マルタとマリアがイエスを心から家でもてなすことによって、どのような報いを得たかを。福音書の箇所をたどり直すことにより、わたしたちは人々の人生がさまざまな状況の中でキリストの存在に開かれたしかたを見いだすことができます。初代教会の使徒たちの宣教活動についての聖書の記述によって同じことを行うことが可能です。

聖書の伝承者、正しい解釈者である教会の聖伝に照らされながら、聖書をしばしば読むことは、福音の内容である、イエスというかたを救いの歴史という文脈の中で知る上で必須であるだけではありません。それはイエスと出会う場を見いだす助けともなります。これが、家庭、仕事、友情、貧しさ、人生の試練などの、人間生活の根本的な次元に根ざした、真に福音的な方法です。

5 自分自身を福音化し、回心へと整えること

しかし、新しい福音宣教がわたしたち自身と無関係だと考えてはなりません。この数日間、司教たちは何度も、世を福音化するためには、まず教会がみことばに耳を傾けなければならないと述べました。福音宣教への招きは、回心への呼びかけとならなければなりません。

わたしたちは、まず自分自身がキリストの力に対して回心すべきだと考えます。キリストだけが万物を、何よりもまずわたしたちの貧しい存在を新たにすることができるからです。わたしたちはへりくだって次のことを認めなければなりません。イエスの弟子、とくにイエスの奉仕者の貧しさと弱さが、宣教が信頼されるための重荷になっています。わたしたちは——第一にわたしたち司教は——、主の崇高な呼びかけと、諸民族に福音を告げ知らせよという命令にふさわしくないことをはっきりと自覚しています。わたしたちは、歴史のさまざまな傷に対する自分たちの弱さを謙遜に認めなければなりません。自分の個人的な罪をもためらうことなく認めなければなりません。しかしわたしたちは確信しています。自分を造り変えていただくなら、主の霊の力が教会を刷新し、その服を輝かせてくださることを。聖人たちの生涯がこのことを示します。聖人を思い起こし、語ることは、新しい福音宣教の特別な手段です。

このような刷新を自分たち自身の力にゆだねるなら、それはきわめて疑わしいものとなります。むしろ、教会における回心も福音宣教も、その第一の担い手は貧しいわたしたち人間ではなく、主の霊ご自身です。ここにわたしたちは力と確信を見いだします。教会においても歴史においても、最後に勝利を収めるのは悪ではないからです。イエスが弟子たちにいわれたとおりです。「心を騒がせるな。おびえるな」(ヨハネ 14・27)。

新しい福音宣教は、このような落ち着いた確信に基づいて行われます。わたしたちは霊の与える靈感と力に信頼します。霊は、どのように困難なときにも、何を話し、何を行うべきかを教えてくださるからです。それゆえ、わたしたちがすべきなのは、信仰によって恐れに、希望によって失望に、愛によって無関心に打ち勝つことです。

6 現代世界の中に福音宣教の機会を見いだす

このような落ち着いた勇気が、現代世界に対する見方をも支えてくれます。わたしたちは自分たちが生きる状況におびえません。現代世界は矛盾と問題に満ちていますが、それが神に造られたものであることは変わりません。世は悪によって傷ついています。神は永遠にこの世を愛されます。世は、みことばの種が新たに蒔かれ、再び実を結ぶ土地です。

主が死に打ち勝ち、主の霊が力をもって歴史の中で働いていることを知っている者の心に、悲観主義が入り込む余地はありません。わたしたちはへりくだりつつ、しかし決然と世に近づきます。この決意は、真理がついに勝利を収めるという確信に由来します。そしてわたしたちは、世のうちに、み名の証人となるようにという復活した主の招きを見いだします。わたしたちの教会は生きています。教会は、勇気ある信仰と、多くの子らのあかしをもって、歴史がもたらす問題に立ち向かおうとします。

わたしたちは、自分たちが世にあって「支配と権威」、「悪の諸霊」（エフェソ6・12）と戦わなければならないことを知っています。わたしたちはこれらの困難な問題から目を逸らすわけではありませんが、そのために恐れることもありません。これは何よりもグローバル化の現象に当てはまります。わたしたちはグローバル化を、福音を広める機会とすべきです。移民についても同じことがいえます。移民は苦難を伴いますが、わたしたちは移民を兄弟として心から受け入れたいと望みます。かつてそうであったのと同じく、移民は今も信仰を広め、多様な人々の間の交わりを深める機会です。世俗化や、政治・国家の支配がもたらす危機は、教会が、社会に存在することを断念することなく、再考することを求めます。貧困のさまざまな新しい形態は、愛の奉仕に新しい領域を開きます。福音を告げることは、イエスと同じように、教会が貧しい人々とともに存在し、彼らの苦しみを担うことを命じます。わたしたちは、無神論と不可知論のもっとも過酷な形態のうちにも、たとえ矛盾しているとはいえ、空白ではなく、適切なこたえを待ち望む、あこがれと期待を見いだすことができると考えます。

支配的な文化が信仰と教会に疑問を投げかけるとき、わたしたちは主への信頼を新たにしつつ、このような状況の中でも、福音が光をもたらし、すべての人間の弱さをいやすことができると確信します。福音宣教を行うのはわ

たしたちではなく神です。教皇が述べるとおりです。「最初のことは、本当の働きかけ、真の活動は、神から来ます。この神の働きかけに自らを接ぎ木し、神の働きかけを願い求めることによって初めて、わたしたちも、神とともに、神に結ばれて、福音宣教者となることができるのです」(ベネディクト十六世「世界代表司教会議第13回通常総会第1回全体会議における黙想(ローマ、2012年10月8日)」)。

7 福音宣教、家庭、奉獻生活

最初に福音宣教が行われたときから、次の世代への信仰の伝達が行われる自然な場は、家庭でした。家庭において女性は特別な役割を果たしますが、それによって父親とその責任が減るわけではありません。あらゆる家庭が子どもの成長のために配慮します。このような環境の中で、幼児と若者は、信仰のさまざまなしるし、伝えられる基本的な真理、祈りの教育、愛の実りのあかしへと導き入れられます。地理的、文化的、社会的状況の違いにかかわらず、シノドス参加司教は皆、家庭が信仰の伝達において不可欠な役割を果たすことを再確認しました。家庭に福音を告げ知らせ、家庭における教育の務めを支えるという特別な責任を果たさなければ、新しい福音宣教は考えられません。

家庭は、男と女が結婚し、二人が「一体となり」(マタイ19・6)、いのちへと開かれていることによって成り立ちます。現代において、この家庭が至るところで危機にさらされていることを無視できません。家庭は、家庭を犠牲にする生活様式に取り囲まれ、社会の原細胞であるにもかかわらず、社会の政治制度からないがしろにされています。家庭のリズムは必ずしもつねに尊重されず、教会共同体において家庭が果たす役割も支えを与えられていません。しかし、まさにそこからわたしたちはこういわざるをえません。わたしたちは家庭と、社会・教会におけるその使命を特別に配慮すべきです。そのために、結婚前と結婚後に家庭に同伴する講座を推進すべきです。わたしたちはまた、自分たちのあかしによって交わりと奉仕の体験を世に示している多くの夫婦や家庭に感謝したいと思います。こうした体験は、いっそう友愛と平和に満ちた社会の種となるからです。

わたしたちの思いは、主がわたしたちにゆだねた、一致と生涯にわたる愛

という姿を反映していない、多くの家庭と同棲者にも向かいます。結婚の秘跡のきずななしに同棲している男女がいます。以前の結婚が失敗した後、非正規の状態に結婚している人々が増えています。こうした痛ましい状況は子どもの教育にも悪影響を及ぼします。これらすべての人々に対してわたしたちはいいたいと思います。主はだれをも見捨てません。教会も皆様を愛しています。教会はすべての人を受け入れます。たとえ秘跡による赦免と聖体を受けることができなくても、皆様は教会の一員であり続けます。カトリック共同体がこうした状態にある人々を受け入れ、回心と和解の道を歩む人々を支えることができますように。

家庭生活は、福音が日常生活と出会い、それが愛の展望において基本的な生活状況を造り変えうることを示す第一の場です。しかし、教会のあかしにとってさらに重要なのは、地上の生活が人間の歴史を超えた形で完成され、神との永遠の交わりに達することを示すことです。イエスはサマリアの女に対して、単にいのちを与えるだけでなく、「永遠のいのち」(ヨハネ4・14)を与える者としてご自分を示されました。信仰が現実のものとする、神のたまものは、単なるこの世の生活の改善の約束ではありません。人生の究極的な意味は、この世を超えた、わたしたちが世の終わりに待ち望む神との完全な交わりだと告知させることです。

このような人生の意味の超自然的な次元に関して教会と世界の中で特別なあかしを行うのが、主が奉獻生活へと招いた人々です。奉獻生活は、清貧、貞潔、従順を守りながら主に完全にささげられたものなので、この世のあらゆる善を相対化する、来世のしるしとなります。シノドス総会はこれらの兄弟姉妹に感謝します。彼らは主の招きに忠実にこたえ、教会の宣教に寄与してきたからです。わたしたちは、皆様が時代の変化の中で、困難な状況にあっても希望し続けるよう励まします。そして皆様にお願いします。自分の属する会からカリスマを与えられた領域で、新しい福音宣教の証人また推進者となってください。

8 教会共同体と多くの福音宣教の担い手

福音宣教を行うことは、教会の一部の人の任務ではなく、教会全体の務めです。人は教会の中でイエスと出会うための完全な手段に近づくことができ

るからです。すなわち、みことばと、秘跡と、兄弟の交わりと、愛の奉仕と宣教です。

このような観点から、何よりも小教区の役割が浮かび上がります。小教区は、人々が生活する地域における教会の現存であり、ヨハネ二十三世がしばしば用いたことばでいえば「村の泉」です。すべての人はこの泉から水を飲み、そこに福音の新鮮さを見いだすことができるのです。小教区の役割は決してなくなりません。たとえ状況の変化が、小共同体への分割や、広範囲での協力を要求するとしてもです。わたしたちは小教区を励まさなければならぬと感じます。伝統的な神の民の司牧活動に、新しい福音宣教が求める宣教の新しい形態を加えてください。新しい福音宣教は、さまざまな重要な民間信心の形を通しても行われなければなりません。

小教区において、自分の民の父であり司牧者である主任司祭の役務は決定的に重要です。シノドス参加司教は、困難な任務を果たすすべての司祭に感謝し、兄弟として寄り添います。その上で彼らに願います。教区司祭のきずなを強め、霊的生活を深め、変化に対応するための生涯学習を行ってください。

司祭とともに、助祭、カテキスタや、告知と信仰教育と典礼、愛の奉仕における奉仕者と指導者の司牧活動をも支えなければなりません。信徒のさまざまな参加と共同責任も推進すべきです。共同体のさまざまな奉仕に献身する信徒の皆様へ感謝せずにはいられません。これらのかたがたにも願います。教会における自らの存在と奉仕を、新しい福音宣教という視点で捉えてください。そのために自らの人間的・キリスト教的養成と、信仰の知識と、現代文化への感覚を深めてください。

信徒の皆様へ目を向けるなら、古くからあるものも新しいものも含めた、さまざまな会と運動団体、新しい共同体をとくに取り上げなければなりません。これらは霊が教会に与えてくださった豊かなたまもの表れです。教会の中で生き、献身するこれらのかたがたに感謝するとともに、彼らを励まします。自分のカリスマを忠実に実践し、とくに部分教会の具体的状況において教会の交わりを深めてください。

福音をあかしすることは、一部の人の特権ではありません。世のただ中で、自らの生涯をかけて福音のしるしとなっておられる多くの人に喜びをこめて感謝します。このような人々のうちには、残念ながらもまだ完全な交わりをもつ

てはいないものの、主の洗礼によってしるしづけられ、主を告げ知らせている多くのキリスト者の兄弟姉妹もいます。今回のシノドスの中で、教会・教会共同体の多くの権威ある人々の声を聞けたのは感動的な経験でした。彼らはキリストへの渇きと、福音の告知への献身をあかししてくださいました。これらの人々も世が新しい福音宣教を必要としていることを確信しています。宣教の必要性に関して一致できたことを主に感謝したいと思います。

9 若者たちがキリストと出会うために

わたしたちが特別に心にかけているのは若者です。若者は、現代の人類と教会の重要な部分であるとともに、その未来でもあるからです。シノドス参加司教たちは、若者に関してすこしも悲観していません。わたしたちは彼らのことを心配しはしても、悲観しません。彼らのことを心配するのは、現代が彼らに対してもっとも激しい攻撃を加えているからです。悲観しないのは、歴史を深いところで導くのはキリストの愛だからです。また、わたしたちは現代の若者たちのうちに、誠実、真理、自由、寛大に対する深い望みを感じるからです。わたしたちはキリストがこの望みにこたえてくださると確信しています。

わたしたちは若者の探求を支えるとともに、わたしたちの共同体を励ましたいと思います。困難な状況に置かれた若者に惜しみなく耳を傾け、対話し、彼らを力づけてください。若者の熱意にあふれた力を制限せず、むしろ解放してください。自らの力と情熱を浪費させようとする、この世の力が促す偽りや利己的な思惑と戦う彼らを助け、彼らが過去の出来事に感謝し、未来に向けて真剣に計画を立てることができるようにください。

若者の世界は、新しい福音宣教にとって困難ではあっても特別に有望な領域です。多くの経験が示すとおりです。それには、若者たちを引き寄せた WYD（ワールドユースデー）も、目立たないけれども重要な経験も含まれます。たとえば、さまざまな霊性、奉仕、宣教の体験です。若者こそが、若者の世界に対する福音宣教において第一の役割を果たすことを認識すべきです。

10 文化・人間的体験・諸宗教との対話における福音

新しい福音宣教の中心は、キリストと、人間の人格への関心です。それは、キリストとの現実の出会いを生き生きとしたものとするためです。しかし、新しい福音宣教の展望は世と同じ広がりを持ち、人間的体験に限定されません。すなわち、新しい福音宣教はとくに文化との対話に関心を向けます。いずれの文化の中にも、古代教父が述べた「福音の種子」が見いだされることを信じているからです。とくに新しい福音宣教は、信仰と理性の新たな協働を必要とします。信仰は、超越へと開かれた健全な理性が生み出すあらゆる成果を受け入れ、理性が陥りがちな限界と矛盾をいやすことができることを確信するからです。信仰は、人生と歴史における悪の存在が投げかける問いに対しても目を閉ざすことはありません。そして、キリストの超越から希望の光を引き出します。

信仰と理性の出会いは、教育と文化の領域におけるキリスト教共同体の活動にも糧を与えてくれます。学校と大学という教育・研究機関は、この分野で特別な位置を占めています。人間の知識が広がり、教育活動が行われるいかなるところでも、教会は進んで自らの経験を示し、人格の全面的な教育に貢献します。このことに関連して、カトリック学校とカトリック大学に特別な関心を向けなければなりません。カトリック学校とカトリック大学においては、あらゆる真実な文化と教育の歩みに属する超越への開きが、イエス・キリストと教会の出来事と出会う歩みのうちに満たされるべきだからです。シノドス参加司教は、ときには困難な状況にあって、教育事業に携わる人々に感謝します。

福音宣教は、マスメディアの世界に目を向けることも必要とします。とくに目を向けるべきなのは、多くの生活と問いと期待がそこで交差するニューメディアです。マスメディアは、多くの場合、そこで良心が教育され、人々が自分の時間を過ごし、生活する場です。それは人間の心に達する新たな機会です。

現代において、信仰と理性が出会う特別な領域は、科学的知識との対話です。科学はそれ自体として信仰とかけ離れたものではありません。それは神が被造物のうちに置いた霊的原理を解き明かすからです。この霊的原理によって、被造物の基盤にある合理的構造を理解することが可能となります。科学と技術が人間観・世界観を不毛な唯物論に閉じ込めないかぎり、それは生活をより人間らしいものとするための貴重な協力者となります。学問の最前

線で働く人々にも感謝したいと思います。

わたしたちは人間の才能のもう一つの表現である、新旧の様式を含めた、芸術の分野で働く人々にも感謝したいと思います。芸術作品は人間の美への傾きを造形化します。ですからわたしたちは芸術作品のうちに靈性を表現する特別な様式を見いだします。美の創造により、神のみ顔と被造物の姿の美しさを明らかにしてくれる芸術家に感謝します。美の道は新しい福音宣教の特別に効果的な方法です。

わたしたちは芸術作品に限らず、あらゆる人間の活動に目を向けます。それは労働を通して神の創造に協力する場となるからです。経済と労働の世界について、福音の光に照らしていくつかのことを思い起こします。しばしば耐えがたい重荷となった労働条件や、今日、しばしば失業によって脅かされている不確実な未来から労働を解放しなければなりません。人間の人格を経済発展の中心に据えなければなりません。経済発展は、人類が正義と一致のうちに成長するための機会とならなければなりません。人間は労働によって世界を変容させます。しかし人間は、将来の世代に対する責任のゆえにも、神が被造物に与えようと望んだ姿を守るよう招かれています。

福音は病気に苦しむ人々をも照らします。キリスト信者は、教会が病者や障害者に寄り添っていることを病者が感じられるようにすべきです。専門的技術をもって人間的に病者を世話するかたがたに感謝します。

福音が人類の歩みを照らすべきもう一つの領域は、政治です。政治は、私心がなく透明な共通善への奉仕に努めなければなりません。そのために、受精から自然死に至るまでの人間の人格と、男と女の結婚に基づく家庭、そして教育の自由を完全に尊重しなければなりません。信教の自由を促進しなければなりません。不正、格差、差別、人種差別、暴力、飢餓と戦争の原因を取り除かなければなりません。キリスト信者は、政治の実践において、愛のおきてを守ることに於いて明確なあかしを示すことを求められます。

最後に、教会は、諸宗教の信者を自然な対話の相手とみなします。福音宣教を行うのは、キリストの真理を信じるがゆえであって、敵対するからではありません。イエスの福音は平和と喜びです。イエスの弟子は、人間の宗教心が神の造った世界のうちに見だし、さまざまな宗教のうちに表現した、真実なもの、よいものをすべて認めます。

諸宗教の信者どうしの対話は、平和に役立つことを目指し、いかなる原理

主義も拒絶し、宗教者に加えられるあらゆる暴力を非難します。暴力は人権の深刻な侵害だからです。全世界の教会は、苦しむ兄弟姉妹のために心を一つにして祈り、兄弟としての愛を示します。そして政治指導者が、すべての人が信仰を自由に選び、告白し、あかしする権利を擁護するように要求します。

11 第二バチカン公会議開幕と『カトリック教会のカテキズム』公布を記念する「信仰年」にあたって

新しい福音宣教の開始にあたって、わたしたちはときとしてあたかも荒れ野におり、危険と基準の喪失のただ中にいるかのように感じます。教皇ベネディクト十六世は「信仰年」開年ミサの説教の中で、最近の数十年間進行している「霊的な砂漠化」について語りました。しかし教皇は次のように述べてわたしたちを励ましました。「わたしたちはまさにこの荒れ野から、空白から出発することによって、あらためて信じることの喜びを再発見することができます。わたしたち人間にとって信じるのが何よりも重要であることを再発見することができます。わたしたちは、荒れ野の中で生きるためになくてはならないものの価値を再発見します」(『信仰年』開年ミサ説教(ローマ、2012年10月11日))。サマリアの女と同じように、わたしたちは荒れ野で水を探します。水が飲める井戸を探します。そこでキリストと出会える人は幸いです。

わたしたちは「信仰年」を与えてくださった教皇に感謝します。「信仰年」は新しい福音宣教を歩み始めるための貴重な入口となるからです。教皇が「信仰年」を第二バチカン公会議開幕50周年と結びつけてくださったことにも感謝します。公会議の基本的な教えは、現代、『カトリック教会のカテキズム』によって輝きます。『カトリック教会のカテキズム』は20年前、信仰の確かな基準としてあらためて示されました。この重要な記念行事は、わたしたちが、公会議の教えを固く守り、それを完全な形で実施し続けようとする決意を確認することを可能にします。

12 神秘を観想し、貧しい人々に寄り添うこと

以上の展望に基づいて、わたしたちはすべての信者に信仰生活の二つの表現を示したいと思います。それは新しい福音宣教によって信仰をあかすするために特別に重要だと思われるからです。

第一は、観想のたまものと経験です。父と子と聖霊である神の神秘へのうやうやしいまなざし。母胎のように救いをもたらしみことばを受け入れる沈黙——これらのものからのみ、世が信頼できるあかしが生まれます。祈りと沈黙だけが、世のさまざまなざわめきで救いのことばがかき消されるのを防ぐことができるのです。

ここで、隠世修道院と隠遁修道院で祈りと観想に生涯をささげる人々にあらためて感謝したいと思います。しかし、観想のときが人々の日常生活とより合わされることも必要です。魂の場所だけでなく、具体的な場所も神を呼び求めます。内的な聖所と石の神殿を重ね合わせることが、経験の洪水で自分を見失わないために必要です。それは、何を、まただれを探し求めればよいのか知らない人を含めて、すべての人が受け入れられていると感じることができる場となります。

真の意味での新しい福音宣教のもう一つの象徴は、貧しい人々の姿です。人生に傷ついた人に寄り添うことは、単なる連帯のわざではなく、何よりも霊的な行為です。貧しい人々の顔に輝くのはキリストのみ顔そのものだからです。「わたしの兄弟であるこのもっとも小さい者の一人にしたのは、わたしにしてくれたことなのである」(マタイ 25・40)。

貧しい人はわたしたちの共同体の中で特別な場所を占めます。この場所は大だれをも排除しませんが、キリストがご自分を彼らに結びつけたしかたを反映します。共同体に貧しい人がいることは、不思議な力をもちます。それはことば以上に人々を変化させ、忠実さを教え、人生の脆弱さを悟らせ、祈りを要求します。要するに、それは人々をキリストへと導きます。

愛のわざには正義への取り組みが伴わなければなりません。この取り組みは、貧しい人も豊かな人も含めて、すべての人に呼びかけます。それゆえ、教会の社会教説を新しい福音宣教およびキリスト信者の教育とつなぎ合わせることは、社会生活と政治生活における人間の共生に奉仕する上で不可欠です。

13 世界の諸地域の教会に向けて

シノドスに集まった司教のまなざしは、世界中に広がる教会共同体に向かっています。このまなざしは一つです。キリストと出会うようにという呼びかけは一つだからです。しかし、多様性をないがしろにするわけではありません。

シノドス教父は、兄弟としての愛と感謝をこめて、カトリック東方教会のキリスト信者を特別に考察しました。彼らは最初の福音宣教を受け継ぐ者であり（彼らはこの経験を愛と忠実をもって守っています）、東方とヨーロッパに住んでいます。現代において、福音は新しい福音宣教によってあらためて皆様に示されます。典礼生活、信仰教育、日々の家庭の祈り、断食、家族間の連帯、信徒の共同体生活への参加、社会との対話を通して。多くの地域で皆様の教会は試練と困難のただ中にあります。これらの試練を通して皆様はキリストの十字架にあずかることをあかしします。一部の信者は移住を強いられています。移住者は、出身地の共同体への帰属を保ちながら、自分たちを迎え入れた国々で司牧活動と福音宣教活動に貢献することができます。主が皆様の忠実さを祝福し続けてくださいますように。皆様の未来が、平和と信教の自由のもとでの落ち着いた信仰の告白と実践によって特徴づけられますように。

わたしたちはアフリカ諸国のキリスト信者の皆様に目を向けます。そして、皆様がしばしば困難な生活条件の中で福音をあかししておられることを感謝します。皆様を励まします。最近行われたばかりの福音宣教を活性化してください。教会を「神の家族」として築いてください。家族の一致を強めてください。とくにキリスト教小共同体における司祭とカテキスタの活動を支えてください。さらにわたしたちは、福音と新旧の文化の出会いを発展させることの必要性を強調します。アフリカ諸国の政界、統治者に期待をこめて強く呼びかけます。すべての善意の人々と協力しながら、基本的人権を擁護し、アフリカ大陸を、今も苦しみを与え続ける暴力と紛争から解放してください。

シノドス参加司教は北アメリカのキリスト信者に呼びかけます。新しい福音宣教への招きに喜びをもってこたえてください。皆様のキリスト教共同体が早くから信仰と愛と宣教の豊かな実を实らせたことを感謝します。今必要なのは、皆様の国の現代文化の表現が福音からかけ離れているのを認めることです。人々を回心へと招かなければなりません。回心から生まれる取り組みは、皆様を自分の文化から追い出すのではなく、文化のただ中で、すべて

の人に信仰の光といのちの力を示すよう導きます。皆様はその寛大な国に新たな移民や難民を受け入れてきました。皆様の家の門を進んで信仰にも開いてください。アメリカのためのシノドス特別総会の取り組みに従って、ラテンアメリカとともに二つの大陸で継続的に福音宣教を行ってください。

シノドス総会は同じ感謝の気持ちをラテンアメリカとカリブ諸国の教会にも示します。とくに印象的なのは、皆様の国々で長年にわたって発展し、今なお多くの人の心に根づいている、さまざまな民間信心、愛の奉仕、そして文化との対話です。今、現代の多くの問題、とりわけ貧困と暴力を前にした、ラテンアメリカとカリブ諸国の教会を励まします。継続的に宣教を行ってください。希望と喜びをもって福音を告げ知らせてください。イエス・キリストを宣教するまことの弟子の共同体を形成してください。福音が公正で兄弟愛に満ちた新しい社会の源泉となりうることを自分の子どもたちに示してください。宗教の多元化が皆様の教会に問いかけています。福音をあらためて告げ知らせることが必要です。

アジアのキリスト信者の皆様にも励ましと勧めを申し上げます。世界人口の3分の2を占めるアジア大陸の少数者である皆様の存在は、霊の力にゆだねられた豊かな種です。この種は、さまざまな文化、古来の宗教、多くの貧しい人との対話によって成長します。アジアの教会は、しばしば社会から疎外され、さまざまな地域で迫害されているとはいえ、その固い信仰によって、キリストの福音の貴重な現存です。福音は正義といのちと調和を告げ知らせます。アジアのキリスト信者の皆様。世界の他の国々のキリスト信者が兄弟として寄り添っているのを感じてください。わたしたちはアジア大陸の聖地でイエスが生まれ、生き、死んで復活したことを忘れません。

シノドス参加司教はヨーロッパ大陸にも感謝と希望をもって呼びかけます。現代のヨーロッパ大陸は強力な（ときとして攻撃的な）世俗化によって特徴づけられ、一部の地域は神と人間に敵対するイデオロギーの数十年の支配によって今なお傷ついています。わたしたちは過去に感謝するだけでなく、現在にも感謝します。福音はヨーロッパで、全世界の福音宣教にとって決定的な意味をもつ、独自の信仰の認識と表現を生み出したからです。すなわち、豊かな神学思想、さまざまなカリスマの表れ、貧しい人々への愛の奉仕のさまざまな形態、深い観想体験、人格の尊厳の定義と共通善の構築に寄与した人文的文化の創造です。そこではしばしば聖性もあふれ出しました。親愛なる

ヨーロッパのキリスト信者の皆様。現在の困難にくじけないでください。むしろそれを乗り越えるべき課題、いっそう喜びをもって生き生きとキリストといのちの福音を告げ知らせるための機会として受け止めてください。

最後にシノドス参加司教はオセアニアの人々にごあいさつ申し上げます。皆様は南十字星の保護のもとにあります。皆様がイエスの福音をあかししてくださっていることを感謝します。わたしたちは皆様のために祈ります。どうか皆様が井戸のほとりのサマリアの女と同じように、新しいのちへの渇きを強く感じてくださいますように。イエスのことばに耳を傾けることができますように。「もしあなたが、神のたまものを知っていたならば」(ヨハネ 4・10)。福音を告げ知らせ、現代世界にイエスを知らせたいという務めをあらためて感じることができますように。皆様を励まします。日常生活の中でイエスと出会ってください。イエスのことばに耳を傾け、祈りと黙想を通じて、次のようにいえる恵みを見いだしてください。「わたしたちはこのかたが本当に世の救い主であると分かった」(ヨハネ 4・22)。

14 荒れ野を照らす星マリア

全世界の司教が交わり、ペトロの後継者の奉仕職に協力する体験が終わるにあたり、わたしたちはイエスが使徒たちに告げた命令が現実には鳴り響くのを耳にします。「あなたがたは行って、すべての民をわたしの弟子にきなさい。……わたしは世の終わりまで、いつもあなたがたとともにいる」(マタイ 28・19、20)。教会の宣教は、特定の地域だけでなく、現代人の心の奥底にまで向かいます。それは、彼らをイエスとの出会いへと導くためです。イエスはわたしたちの共同体に現存する、生きたかただからです。

イエスの現存はわたしたちの心を喜びで満たします。この3週間、イエスが与えてくださった恵みに感謝しながら、わたしたちは賛美の歌をささげます。「わたしの魂は主をあがめます。……力あるかたが、わたしに偉大なことをなさいましたから」(ルカ 1・46、49)。わたしたちはマリアのことばを自分のものとします。主は世々を通じて、世界のさまざまところで、ご自分の教会にまことに偉大なことをなさいました。わたしたちは主をあがめます。わたしたちは信じています。主はわたしたちの貧しさに必ず目を注ぎ、現代においてその腕で力を振るい、新しい福音宣教の道を歩むわたしたちを支え

てくださいます。

マリアの姿がわたしたちの歩みを導いてくださいます。教皇ベネディクト十六世が述べたとおり、この歩みは荒れ野の旅のように思われるかもしれませんが。わたしたちは、必要不可欠なものを携えながら、この道を進まなければならないことを知っています。すなわち、霊のたまもの、ともに歩んでくださるイエス、真理のみことば、わたしたちの糧である聖体のパン、友愛に満ちた教会の交わり、そして愛のわざです。井戸の水が荒れ野に花を咲かせます。荒れ野の夜、星がより明るく輝くのと同じように、新しい福音宣教の星であるマリアの光は、道を歩むわたしたちの上で力強く照り輝きます。わたしたちはマリアに信頼をこめて身をゆだねます。

9. 提言

世界代表司教会議（シノドス）第13回通常総会は、10月27日（土）午前に行われた第22回全体会議で、「提言」（Propositiones）の投票を行った。「提言」の公式テキスト（ラテン語）はシノドスの規則により公開されないが、第11回（2005年）と第12回（2008年）のシノドス通常総会に続いて、今回も教皇ベネディクト十六世の許可により、シノドス事務総局による暫定訳（今回は英訳）が同日公表された。以下はこの英語訳に基づく「提言」の全訳。

序文

提言1：教皇への文書の提出

教皇に提出された「キリスト教信仰を伝えるための新しい福音宣教」をテーマとする本シノドスの諸文書、すなわち、「提題解説」、「討議要綱」、「基調講演」、「中間報告」、またシノドス・ホールで述べられた発表と文書で提出されたものを含めた発表原稿、「最終メッセージ」、分団会とその討議の報告に加えて、シノドス参加司教は次の提言が重要と考える。

シノドス参加司教は、教皇がこの機会に、新しい福音宣教によるキリスト教信仰の伝達に関する文書を発布してくださることをつつしんでお願いするものである。

提言2：シノドスによる感謝の表明

シノドス教父は、これまでのシノドス総会の成果を豊かなものとした教皇の教えの遺産に感謝する。この教えは「キリスト教信仰を伝えるための新しい福音宣教」のためのシノドス会期中の議論の基盤となった。シノドスは教皇パウロ六世の『福音宣教』、福者教皇ヨハネ・パウロ二世の『要理教育』、『救い主の使命』、『新千年期の初めに』、教皇ベネディクト十六世の『愛の秘跡』、『主のことば』といった文書から考察を引き出した。こうした導きの最新の模範は、シノドスの初めに教皇が開年した「信仰年」である。このよう

な教皇の預言職に感謝する。

提言 3：カトリック東方教会

使徒から教父へと伝えられた聖伝に照らされた、自主権を有するカトリック東方教会は、キリストの教会全体の遺産である（『カトリック東方諸教会に関する教令』2、『東方教会法』第39条参照）。カトリック東方教会は、そこから福音が遠く地の果てまでもたらされた、使徒の遺産である（『中東における教会』88参照）。

カトリック東方教会は、ラテン教会の伝統を有する諸国に移住した自分たちの信者に対する司牧活動を行えるようになったことを感謝している。また、世界の部分教会の信者と聖職者が自分たちの伝統をもっと知り、尊重するようになることを願っている。

一 新しい福音宣教とは何か

提言 4：新しい福音宣教の源泉である三位一体の神

教会とその宣教使命の起源と源泉は三位一体の神である。すなわち、御父の計画と、死と栄光ある復活において頂点に達した御子のわざと、聖霊の派遣である。

福音宣教を、より広く深い神学的・教理的枠組みにおいて、ことばと秘跡のわざとして理解すべきである。秘跡は、とくに聖体を通して、わたしたちが三位一体の神のいのちにあずかることを可能にする。そこから、聖霊の恵みを通して、福音宣教を行い、熱意と勇気をもって神のことばをあかす力が生じる。

新しい福音宣教は、神の恵みが第一に優先されること、人は洗礼によってキリストと結ばれて生きようになることを認める。神の子となることを強調することにより、洗礼を受けた人を信仰生活へと導かなければならない。信仰生活は、個人の活動のあらゆる側面において自らのキリスト信者としてのあるべき姿をはっきりと示すものでなければならない。

提言 5：新しい福音宣教とインカルチュレーション

イエスは聖霊のたまものを与え、御父の愛をわたしたちに示された。新しい福音宣教は、目覚め、新たな励ましを与え、イエス・キリストが信仰と日々の生活の中心であることをあかしするときである。新しい福音宣教は教会に属するすべての人に、信仰の刷新と信仰を実際に伝える努力を呼びかける。そのためには、教会の奉仕職に影響を与える世と、さまざまな部分教会において時のしるしを見分けることも必要である。これらの時のしるしのうちでも、人々が現代の生活環境の変化をますます自覚してきたことをはっきりと認識すべきである。

さらに新しい福音宣教は教会に呼びかける。神とキリスト教共同体から離れた人に手を差し伸べ、神のことばにあらためて耳を傾けるよう招くようにと。それは新たに深いしかたで主イエスと出会うためである。

新しい福音宣教は信仰のインカルチュレーションに特別な関心を払うことを要求する。信仰のインカルチュレーションは、あらゆる文化における積極的なものを評価すると同時に、キリストにおいて現された神の計画に従った人格の完成に反する諸要素を清めることによって、福音を伝える。インカルチュレーションは、「各民族の文化に福音を根づかせる」（『カトリック教会のカテキズム』854）ことを含む。

提言 6：福音の告知

わたしたちの救い主である神は、すべての人が救われて真理を知るようになることを望んでおられる（一テモテ2・4参照）。教会は、神の救いの普遍的計画を信じているからこそ、宣教しなければならない（『福音宣教』14、『カトリック教会のカテキズム』851参照）。教会はまた「本人の側に落ち度がないままに、キリストの福音ならびにその教会を知らずにいて、なおかつ誠実な心をもって神を捜し求め、また良心の命令を通して認められる神の意志を、恩恵の働きのもとに、行動をもって実践しようと努めている人々は、永遠の救いに達することができる」（『教会憲章』16）ことを知っている。イエス・キリストの福音は、キリストの生涯とその受難、死、復活と栄光化の過越の神秘を告げ知らせることである。

しかし公会議は、すべての人の救いのために福音宣教が必要であることを思い起こさせてくれる。なぜなら「しばしば人々は、悪魔に欺かれて、自分たちの考えの中に空しく迷い、神の真理を偽りと置き換えて、創造主よりも被造物に仕えたり（ローマ1・21、25参照）、あるいは神なしにこの世に生きそして死んでゆくなど絶望のきわみにさらされている。したがって、神の栄光とこれらすべての人々の救いとを念ずる教会は、『すべての造られたものに福音をのべ伝えなさい』（マルコ16・15）との主の命令を忘れることなく、布教活動を励まし支えるよう熱心に努力する」（『教会憲章』16）からである。

提言7：教会の永遠の宣教的次元としての新しい福音宣教

すべての部分教会に福音宣教を行うよう励ますために、教会が自らの宣教の永遠の世界宣教的側面を宣言することを提言する。

福音宣教を3つの側面において理解することができる。第一に、「諸民族への（ad gentes）」福音宣教は、イエス・キリストを知らない人々に福音を告げ知らせることである。第二に、福音宣教は、教会の日常生活である、信仰の継続的成長を含む。最後に、新しい福音宣教は、とくに教会から離れた人々に向けられる。

部分教会が自らのさまざまな働き手と力を評価し統合するよう励まさなければならぬ。同時に、各部分教会は自らの性格と伝統に従って福音宣教を行う自由をもたねばならぬ。ただしその際つねに自己の司教協議会ないしカトリック東方教会の司教会議との一致を保つべきである。世界宣教は、ローマ教皇の招きにより、新しい聖霊降臨として、聖霊のわざにこたえるものである。教皇は、すべての信者がすべての家庭を訪ね、キリストのいのちを人々のあらゆる状況にもたらすよう招いている。

提言8：世俗世界におけるあかし

われわれは世俗世界に生きるキリスト信者である。世界はかつてもこれからも神の被造物であり続けるが、人間文化の領域では世俗化が進行している。われわれキリスト信者は世俗化の過程に無関心ではできない。実際われわれは初期のキリスト信者と同じような状況に置かれている。それゆえ、

このことを課題と可能性とみなすべきである。われわれは世に生きているが、世に属していない（ヨハネ 15・19、17・11、16 参照）。世は神の被造物であり、神の愛を示す。われわれはイエス・キリストを通して神の救いを与えられ、神の創造の発展を見分けることができる。イエスはわれわれのために新たな門を開かれた。そのためわれわれは、恐れることなく教会と世の傷を愛をもって包むことができる（ベネディクト十六世参照）。

かつてよりも困難な側面を示す現代にあって、われわれは「小さな群れ」（ルカ 12・32）ではあるが、福音の救いのメッセージをあかしし、新しい世の塩と光となるよう招かれている（マタイ 5・13 - 16 参照）。

提言 9：新しい福音宣教と最初の告知

最初の告知（ケリュグマ）の基盤である福音は、救いをはっきりと告げることを第一に置く。「もっとも大切なこととしてわたしがあなたがたに伝えたのは、わたしも受けたものです。すなわち、キリストが、聖書に書いてあるとおりわたしたちの罪のために死んだこと、葬られたこと、また、聖書に書いてあるとおり三日目に復活したこと、ケファに現れ、その後十二人に現れたことです」（一コリント 15・3 - 5）。「最初の告知」は、イエス・キリストの過越の神秘に関する救いのメッセージが、大きな霊的力をもって告げ知らされることである。それは罪の悔い改めと、回心と、信仰の決断をもたらす。同時に、最初の告知と信仰教育の間に連続性がなければならない。信仰教育はわれわれに、ゆだねられた信仰の遺産を教えるからである。

われわれは「最初の告知に関する司牧計画」が必要だと考える。それは、イエス・キリストとの生きた出会いを教えることである。この司牧文書は要理教育の初歩的な諸要素を示し、小教区共同体の生活にそれを根づかせることを可能にするものである。

シノドス教父は、ケリュグマの最初の告知に関する指針が作成されることを提言する。この要綱は次のものを含む。

- ・聖書とカトリック教会の聖伝におけるケリュグマに関する体系的な教え。
- ・現代の司牧問題にこたえる助けとなるような、カトリック教会の歴史における宣教者の聖人・殉教者の教えとことば。
- ・現代のカトリックの福音宣教者の養成のための基準と指針。

提言 10：福音を告げ知らせる権利と、福音を聞く権利

福音とイエスを告げ知らせることは、福音に基づくすべてのキリスト信者の義務である。「だから、あなたがたは行って、すべての民をわたしの弟子にしなさい。彼らに父と子と聖霊の名によって洗礼を授けなさい」（マタイ 28・19）。

同時に、イエス・キリストと福音を知ることができることは、宗教のあるなしを問わず、あらゆる人の不可譲の権利である。完全な形でなされる福音の告知は、決して強制的改宗の形をとることなく、各人の人格を完全に尊重しつつなされなければならない。

提言 11：新しい福音宣教と、聖書を祈りとともに読むこと

神は肉となったみことばを通してご自身を知らせてくださった。われわれが教会の典礼、とくに感謝の祭儀の中で聞き、記念する、この神のことは、信者の心を強め、日々の生活の中で真に福音をあかしすることを可能にする。シノドス教父は、神のことが「ますますあらゆる教会活動の中心に置かれる」（『主のことは』1）ことを願う。

すべての信者に聖書への門が開かれなければならない。新しい福音宣教との関連で、聖書を学ぶためのあらゆる機会が提供されるべきである。聖書が、説教、信仰教育、信仰を伝えるためのあらゆる努力に浸透しなければならない。

新しい福音宣教と信者の霊的成長にとって神のことに親しむことが必要なことを考慮して、シノドスは、教区、小教区、キリスト教小共同体が、真剣な聖書研究と霊的読書（レクチオ・ディヴィナ）すなわち聖書を祈りとともに読むこと（『神の啓示に関する教義憲章』21 - 22 参照）を継続するよう勧める。

提言 12：第二バチカン公会議公文書

シノドス教父は、新しい福音宣教との関連で、第二バチカン公会議の教え

が信仰を伝えるための生きた手段であると認める。同時にシノドス教父は、公会議文書を適切なしかたで読み、解釈すべきであると考え。それゆえシノドス教父は、教皇ベネディクト十六世の考えに対する賛同を表明する。ベネディクト十六世は、公会議文書の中に公会議の真の精神を見いだすために、連続性における改革に基づく解釈法という原理を示した。『『改革による解釈法』があります。改革とは、主がわたしたちに与えた、一つの実体としての教会の連続性の中で行われる刷新のことです。教会は時の中で成長し、発展します。けれども教会は、つねに同一のものであり続けます。それは、旅する神の民という一つの実体だからです。……わたしたちが正しい解釈法に導かれながら、公会議を解釈し、実施するなら、公会議は絶えず必要とされる教会の刷新のために、力となることができますし、またいつまでも力となることができるでしょう』（ベネディクト十六世「教皇庁に対する降誕祭のあいさつ（2005年12月22日）」）。こうして現代世界の刷新への要求にこたえながら、教会の本性と使命の同一性を忠実に保つことができるのである。

二 現代の教会の奉仕職が置かれた状況

提言 13：現代の諸問題

グローバル化と世俗化の過程を特徴とする、世界のさまざまな状況の中で福音をのべ伝えることは、教会にさまざまな課題をもたらす。公然たる宗教的迫害が行われる場合もあれば、無関心、干渉、制限、いやがらせも広く行われている。

福音の示す人生観、世界観は、強制すべきものではない。それは神の惜しみない愛と平和に関するよい知らせとして提示することしかできない。真理と美のメッセージは、人々が孤独と意味喪失から脱出する助けとなる。ポストモダン社会は人々をしばしばこうした状況に追いやっているからである。

それゆえ、信者は、キリストの神秘に基づく人間性の輝きを世に示そうと努めなければならない。民間信心は重要であるが、それだけでは不十分である。教会から離れたカトリック信者、キリストに従わない人、セクトや、さまざまなスピリチュアリティを实践する人に対して、キリスト教の希望を説明する責務を認識させる必要がある。

提言 14：新しい福音宣教と和解

戦争と暴力によって引き裂かれた世界、人間どうしを分裂させ、対立させる個人主義の広まりによって傷ついた世界の中で、教会は、静かに、しかし決然と、和解の奉仕を果たさなければならない。新しい福音宣教の精神をもった教会は、和解の務めに取り組む。教会は、イエスのメッセージ（エフェソ2・14「キリストは……敵意という隔ての壁を取り壊しました」）に忠実に従って、人類を分裂させる隔ての壁を取り壊そうと努力しなければならない。教会は、愛のメッセージを携えながら、われわれの主の救いの福音の新しさをのべ伝えなければならない。主はわれわれを罪から解放し、すべての人の一致と平和と正義を築くよう招くために来られた。

提言 15：新しい福音宣教と人権

新しい福音宣教は人間の尊厳を強調するので、シノドスは、立法家、教師、人文科学の研究者に、公共政策においても実践においても人間の人格を完全に尊重するよう促す。

同時に、地域の状況と団体において、あらゆる機会に、自然法が示す人間の人格の適切な理解に由来する権利を、理論においても実践においても、定義し、支持し、擁護しなければならない。

提言 16：信教の自由

シノドス教父は、信教の自由が基本的人権であることを再確認する。信教の自由には、良心の自由と、自らの宗教を選択する自由が含まれる。われわれは、信教の自由が認められず、迫害まで受けて苦しむ、世界のさまざまな地域の兄弟姉妹と連帯する。新しい福音宣教の手段である第二バチカン公会議に照らされ、世界中のキリスト信者の信教の自由を守ることがますます必要とされている中で、シノドス教父は、『信教の自由に関する宣言』の教えの普及にあらためて取り組むことを提言する。この新たな取り組みは、すべての人の共通善を守るために、個人、家庭、団体にとっての宗教の自由を確認

し、推進することを目指す。宗教の自由は、教義の妥協なしに、家庭や学校で子どもにキリスト教信仰を教える権利も含む。

シノドス教父は、教皇が、可能であれば世界の諸地域の教会を代表する教会指導者の委員会を設立すること、あるいは、この任務を教皇庁正義と平和評議会にゆだねることを提言する。それは、信教の自由の侵害に抗議し、信教の自由と良心の自由の基本権について世論に正確な情報を与えるためである。

提言 17：信仰の前提と、信頼できる神学

グローバル化した現代文化の状況の中で、多くの疑問や障害が、懐疑主義と、思考と生活に関する新たな枠組みを生み出している。新しい福音宣教にとって、「信仰の前提」の役割を強調することがきわめて重要である。それは、信仰が理性と対立するものでないことを示すためだけでなく、自然理性が明らかにする正しい人間観に多くの真理と事実が含まれることを強調するためである。その中でも重要なのは自然法と、それが人間社会全体にもたらす帰結である。「自然法」と「人間本性」の概念は、学問のレベルでも一般的レベルでも合理的に明らかにすることが可能である。こうした知的な発展と取り組みは、キリスト信者と善意の人々の対話を助け、創造主である神の存在とあがない主イエスのメッセージの認識へと道を開くであろう。シノドス教父は、神学者がキリスト教思想の新たな護教論を展開するよう求める。それは新しい福音宣教のために適切な、信頼できる神学となる。

シノドスは、神学者たちが、新しい福音宣教の知的挑戦を受け入れ、これにこたえて、キリストの福音を告げ知らせるという教会の使命にあずかるよう呼びかける。

提言 18：新しい福音宣教とマスメディア

マスメディアの使用は、救いのメッセージをすべての人に届けるために重要な役割を果たす。マスメディア、とくに電子メディアの世界では、信仰とキリスト教的道徳の内容を忠実に伝えられる、しっかりしたキリスト信者を養成する必要がある。彼らは、グローバルな村となった世界でコミュニケー

シヨンのために用いられる、現代の言語と手段を使いこなす能力をもたねばならない。信仰を伝達するためのもっとも効果的な手段は、依然として、生活のあかしを分かち合うことである。これなしにいかなる「メディア」も福音を効果的に伝えることができない。マスメディアの賢明で建設的な使用方法に関する教育は、新しい福音宣教が用いる重要な手段である。

提言 19：新しい福音宣教と人間性の発展

教皇の社会教説に関する教導職は、福音宣教と、個人また社会の自由の発展の間の、神学的・人間的・教育的なつながりを示してきた。現代、人格を抑圧するあらゆるもの（すなわち罪とその結果）からの解放を告げ知らせることなしに新しい福音宣教を考えることは不可能である。いのちと正義の問題に真剣に取り組むこと、貧困と疎外を生み出す状況を変えることなしに（『真の開発とは——人間不在の開発から人間尊重の発展へ』36参照）、発展はありえない。このことはとくにグローバル化の問題にいえる。

提言 20：新しい福音宣教と美の道

新しい福音宣教において、美の道に特別な注意を向けなければならない。「よい羊飼い」(ヨハネ 10・11 参照)であるキリストは、人となった真理であり、しるしで現された美の啓示であり、限りなくご自身を注ぎ出される。イエスに従う若者に、キリストのいつくしみと真理だけでなく、その完全な美もあかしすることが重要である。アウグスティヌス (354 - 430 年) が述べたとおり、「われわれの愛するのは美しいものにほかならないではないか」(『告白』: *Confessiones* IV, 13, 20 [山田晶訳、『世界の名著 14 アウグスティヌス』中央公論社、1968 年、148 頁])。美はわれわれを愛へと引き寄せる。神は愛を通してご自分のみ顔を示し、われわれはこのみ顔を信じるのである。ここから芸術家は、自らが新しい福音宣教の特別な伝達者であるよう呼びかけられていることが分かる。

神学生の教育において、美に関する教育や教会芸術に関する教育をないがしろにしてはならない。第二バチカン公会議が教えるとおりでである（『典礼憲章』129 参照）。美はつねに新しい福音宣教の特別な次元となるべきである。

教会は、典礼祭儀に用いる聖なる場所にふさわしい芸術の質を配慮し、高めなければならない。その際、美しさと表現の真実さを保つべきである。

新しい福音宣教にとって、教会が芸術の分野に現存することが重要である。自らの霊性と司牧によって、芸術家が創造性を発揮するのを支え、作品の中に現在化される生き生きとして真実な救いの霊的体験を深めるためである。

提言 21：移住者

多くの国が他国から来た人々によって大きな恩恵をこうむったのと同じように、教会も、宣教使命を果たす多くの人のあかしと福音宣教活動によって大いに成長してきた。「全世界に行って、すべての造られたものに福音をのべ伝えなさい」(マルコ 16・15)。移住者の信仰は危険と脅威にさらされているので、教会が司牧計画をもって援助することが重要である。司牧計画は移住者とその家族を対象とし、彼らが社会の生きた細胞また家庭教会として果たす重要な役割を知らせなければならない。小教区は、移住者が社会とキリスト教共同体に溶け込む助けとならなければならない。移住者に対する教会の司牧計画は、移住者を受け入れるだけでなく、彼らの人間の尊厳を推進しなければならない。しかし何よりも彼らの典礼伝統を尊重しつつ、彼らが教会生活になじむ助けとならなければならない。司牧計画は、彼らがカトリック教会から疎外されることのないよう助けとならなければならない。

移住者は、単に受け入れられるだけでなく、現代世界で福音を告げ知らせる当事者でもある。

移住の動きが活発な今、人格の中心的意味と尊厳を強調することが重要である。とくに、恥ずべき人身売買、とくに子どもの人身売買と、臓器売買と関連する新たな奴隷制度という深刻な現象が存在するためである。難民、避難民、船員、移動生活者、非定住者とかかわる際、こうした意識を高めるべきである。

提言 22：回心

古くから存在する、善と悪、信仰と恐れが戦うドラマを、キリストへの回心への招きの不可欠な背景、構成要素として示さねばならない。この戦いは、

自然のレベルでも超自然的レベルでも続く。「いのちに通じる門はなんと狭く、その道も細いことか。それを見いだす者は少ない」(マタイ7・14)。多くの司教が、新しい福音宣教の真に効果的な担い手となるには、自らの生活において聖性を刷新しなければならないと述べた。

新しい福音宣教は個人と共同体の回心と、福音宣教の新しい方法と、司牧構造の刷新を要求する。現状維持のための司牧戦略から、宣教的な司牧姿勢へと転換するためである。新しい福音宣教はわれわれを真の司牧的回心へと導く。この回心が、もはや現代の福音的課題にこたえられなくなった司牧構造の見直しと動的転換を行うための態度と取り組みへとわれわれを導いてくれる。

提言 23：聖性と新しい福音宣教者

聖性への普遍的召命は新しい福音宣教の不可欠の要素である。新しい福音宣教は、聖人こそが、召命にこたえるさまざまなしかたの力強い模範であると考えられる。聖性のさまざまな歩みに共通するのは、愛を実践する信仰生活の中でキリストへの信従を表すことである。愛の実践は、特別な意味で福音宣教となる。

われわれはマリアこそが聖性の模範と考える。その聖性は自分を完全に与えることも含む、愛のわざに示されている。

聖性は、福音宣教を行う者にとっても、福音宣教の受け手にとっても、あらゆる福音宣教活動の重要な部分である。

提言 24：教会の社会教説

社会の中で新しい福音宣教を推進するために、教会の社会教説にますます目を向けなければならない。教会の社会教説は、信仰を告げ知らせ、あかしすることであり、信仰教育のかけがえのない手段だからである(『真理に根ざした愛』15参照)。教会の社会教説は、信仰教育の内容、キリスト教教育、神学生と修道者の養成、司教と司祭の継続教育、とくに信徒の教育に浸透しなければならない。『教会の社会教説綱要』は継続教育を行う上での貴重な教材である。

提言 25：都市における新しい福音宣教

教会は、都市とその文化、都市で起きている変化が、新しい福音宣教の特別な場であると認める。教会は、神の救いの計画に奉仕するものなので、「聖なる都、新しいエルサレム」(黙示録 21・2 - 4 参照)がある意味で人間の現実の中に存在するのを見いだす。教会は、都市の司牧計画を実践するにあたり、都市社会に典型的に見られる経験、言語、生活様式を見極めようと望む。教会は、自らの典礼、共同生活の体験、愛の実践を、都市の状況に合わせることを目指す。それは、福音をすべての市民の生活の中に受肉させるためである。教会は、多くの都市で神の存在が認められず、人間の尊厳がしばしば攻撃されていることも知っている。たとえば、薬物売買と関連する暴力、さまざまな汚職、多くの犯罪である。われわれは、福音を告知知らせることが、都市の状況の中で人間のいのちの尊厳を回復させるための基盤となりうると信じる。イエスの福音が「来たのは、羊がいのちを受けるため、しかも豊かに受けるためである」(ヨハネ 10・10)。

三 現代の状況に対する司牧的応答

提言 26：小教区と運動団体

シノドスに集まった司教は、小教区が、地域社会における教会の第一の現存、キリスト教的生活の場また手段であり続けることを確認した。小教区は、人々が対話し、神のことばを告げ、また聞き、有機的に信仰教育を行い、愛の実践を準備し、祈り、礼拝と喜びをもって感謝の祭儀をささげる機会を与えることができるからである。さらにシノドス教父は、小教区が、福音宣教にもっと重点を置いたものとなるための方法を見いだすよう促したい。この福音宣教は、小教区宣教、小教区の刷新プログラム、小教区黙想会を含む。キリスト信者の会、運動団体、その他の教会団体の宣教活動は、司牧的回心を行うための有益な刺激となる。小教区も、伝統的なものと新しいものを含めた運動団体も、ともに司教に結ばれた部分教会の交わりを目に見えるものとするよう招かれている。

新しい福音宣教が求めるとおり、すべての民にイエスの福音を伝えるために、すべての小教区と小共同体は、個人また共同体としてキリストと出会い、典礼の豊かさを体験し、入門的また継続的なキリスト教教育を行い、すべての信者を兄弟愛と貧しい人への愛のわざを行うように導くための、生きた細胞となり、場とならなければならない。

提言 27：教育

「だから、あなたがたは行って、すべての民をわたしの弟子にきなさい。彼らに父と子と聖霊の名によって洗礼を授け、あなたがたに命じておいたことをすべて守るように教えなさい」（マタイ 28・19 - 20）。教育は福音宣教の不可欠の構成要素である。復活したイエス・キリストを告げ知らせることは、すべての人の個人の歴史、成長、霊的召命に同伴することである。同時に教育は、人間の人格に見いだされるすべての真実なもの、よいもの、美しいものを高め、精神と感情が現実を評価できるよう教育することを必要とする。

子どもも 10 代の少年少女も若者も、福音を告げ知らされ、教育を受ける権利をもつ。学校とカトリック大学は、この要求にこたえる。公的機関もこの権利を認め、支えなければならない。

学校は、家庭が子どもに信仰のすばらしさを伝える助けとならなければならない。学校は信仰を伝え、少なくとも知らせる優れた機会を提供する。シノドス教父は、世界のカトリック教育機関で多くの教員が行っている教育活動に感謝する。

教師には特別な役割があるので、自らの責務を果たすための継続教育を受けることが重要である。

学校は教育の自由を与えられなければならない。この自由は不可侵の権利である。

そのため、カトリック教育機関が、単なる福音宣教の成果ではなく、福音宣教の担い手となるために、シノドスは

- ・カトリック教育機関が教会機関としてのアイデンティティを維持するためにできるかぎりのことを行うよう励ます。
- ・すべての教師が、洗礼を受けたイエスの弟子としてのリーダーシップを発

揮し、教育者としての召命を通してあかしを行うよう招く。そして、

- ・部分教会、修道家族、教育機関のすべての責任者に、信徒の共同責任を促進し、そのための適切な教育と同伴を行うよう促す。

提言 28：成人の信仰教育

成人の信仰教育が存在しないか、中途半端であるか、なおざりにされているなら、新しい福音宣教について語ることはできない。こうした欠如が存在する場合、司牧は深刻な問題に直面することになる。

教会の洗礼志願期の段階とレベルは、聖書的、信仰教育的、霊的、典礼的な意味で、人間の歴史と信仰の歩みを神との関係を通じての召命と考えることができることを示す（『福音宣教』18、『討議要綱』92参照）。

洗礼志願者が行う信仰の決断の公的性格（それは共同体と教区の中で少しずつ成長してきた）は、すべての信者に積極的な影響を及ぼす。

提言 29：信仰教育、カテキスタ、カテキズム

適切な信仰教育は新しい福音宣教にとって不可欠である。シノドスは、カテキスタが教会共同体に対して行うかけがえない奉仕に目を向け、彼らの献身に深い感謝を表す。すべてのカテキスタは（彼らは同時に福音宣教者でもあるため）、適切な養成を必要とする。地域の状況の許す範囲内で、できるかぎりカテキスタに、しっかりした（霊的、聖書的、教理的、教育学的な）教会的養成を施さなければならない。『カトリック教会のカテキズム』と『カトリック教会のカテキズム要約』は、カテキスタが信仰を教え、教会の成人を支えることを通して、自らの福音宣教と信仰教育の使命を果たす上での第一の教材である。

教皇パウロ六世の使徒的書簡『ミニステリア・クエダム』に従い、司教協議会は聖座にカテキスタの奉仕職の養成を願い出ることができる。

提言 30：神学

信仰の学としての神学は新しい福音宣教にとって重要である。司祭、教師、

カテキスタは高等教育機関で養成を受けなければならない。教会は神学研究と神学教育を評価し、推進する。学問的神学は大学の中で固有の位置を占める。神学は大学の中で信仰と他の諸学と世俗世界との対話を行う。神学者は教会の救いの使命の一環としてその奉仕を行うよう招かれている。神学者が教会とともに考える（sentire cum Ecclesia）ことが必要である。シノドスは、新しい福音宣教があらゆる神学部の使命の不可欠の部分と考えられること、カトリック大学の中に「〈新しい福音宣教〉研究科」が設立されることを提言する。

提言 31：新しい福音宣教と貧しい人の優先的選択

教皇ベネディクト十六世はこう述べる。「イエスは、困っている人は自分のことだといいます。困っている人とは、飢えている人、のどが渴いている人、旅人、裸の人、病気の人、牢に入れられた人のことです。『わたしの兄弟であるこのもっとも小さい者の一人にしたのは、わたしにしてくれたことなのである』（マタイ 25・40）。神への愛と隣人愛は一つになります。わたしたちは、もっとも小さな兄弟の中にイエス自身を見いだし、イエスの中に神を見いだすからです」（『神は愛』15）。

現代、新たな貧しい人、貧しい人の新しい姿が見いだされる。飢餓にあえぐ人、ホームレス、病者と見捨てられた人、薬物中毒患者、移住者と疎外された人、政治難民と環境難民、原住民である。最近の経済危機は貧しい人に深刻な打撃を与えた。現代社会のもっとも貧しい人は、無罪の人間のいのちの不可侵の尊厳に対する尊敬を欠いた態度の犠牲者である。

貧しい人の優先的選択は、貧しい人のところに行き、彼らのために働き、彼らが教会を自分の家と感じられるようにするように、われわれを導く。貧しい人は新しい福音宣教の対象であると同時に担い手でもある。

提言 32：病者

新しい福音宣教はイエス・キリストの死と復活の超越の神秘をますます自覚する。この神秘は苦しむ人々に光を当てる。苦しむ人々はキリストの十字架のうちに、苦しみの神秘を理解し、受け入れることができる。これが彼ら

に来世への希望を与える。

病者、苦しむ人、障害者、特別な助けを必要とする人の中で、キリストの苦しみが現存し、宣教の力をもつ。キリスト信者にとっては、苦しむ人と病者のための場所がつけなければならぬ。彼らはわれわれの配慮を必要としているが、われわれは彼らの信仰からより以上のものを与えられる。

キリストは病者を通してご自分の教会を照らす。それは、病者に触れた人がキリストの光の反映を見いだすためである。だから病者は新しい福音宣教の重要な参加者なのである。

病者に触れた人は皆、自らの使命に気づく。新しい病院を建設する際、慰めと支えの場と、祈りの場を設けることを忘れてはならない。

提言 33：ゆるしの秘跡と新しい福音宣教

ゆるしの秘跡は、神のあわれみとゆるしを受けるための特別な場である。それは個人的また共同体的ないやしの場合である。ゆるしの秘跡により、洗礼を受けたすべての人は新たに個人としてイエス・キリストと出会い、また教会とも新たに出会う。罪のゆるしを通じて完全な和解が与えられるからである。このとき、悔い改めた人はイエスと出会うと同時に、深い自己受容を体験する。シノドス教父はゆるしの秘跡をあらためて教会の司牧活動の中心に置くことを求める。

あらゆる教区で、少なくとも一つの場所をゆるしの秘跡のために特別なしかたで恒久的に用いるべきである。そこでは司祭が常駐し、すべての信者が神のあわれみを体験できる。とくに巡礼所や特別に奉献された教会堂では、毎日でも、ゆるしの秘跡が受けられるようにすべきである。ゆるしの秘跡の授与を規定する特別な規則を忠実に守らなければならない。すべての司祭はゆるしの秘跡を自らの役務と新しい福音宣教の本質的な部分と考え、あらゆる小教区で、告白を聞く適切な時間をとらなければならない。

提言 34：主日と祝日

聖体は新しい福音宣教の源泉と頂点である。シノドス教父はすべてのキリスト信者に、感謝の祭儀への理解と愛を新たにしよう勧める。感謝の祭儀

の中で、信者の生活は造り変えられ、キリストが全世界の救いのために父である神の栄光にご自分のいのちをささげるわざにあずかる。

キリスト教の主日と世俗的な日曜日の間には緊張関係があるが、福者ヨハネ・パウロ二世の『主の日——日曜日の重要性』の教えに従い、新しい福音宣教のために主日を再発見しなければならない。主日のミサとともに聖なる特別な性格をもった主日は、カトリック信者の生活の中心となるべきである。全共同体の完全な、積極的で、意識的な典礼参加が目的である。新しい福音宣教の真の計画は、典礼暦と祝日、とくに降誕祭と復活祭に従うべきである。

提言 35：典礼

神が与えてくださったもっとも貴いたまものである典礼をふさわしく祝うことは、キリストに結ばれた生活の最高の表現また源泉である（『典礼憲章』10 参照）。それゆえ典礼は、新しい福音宣教の第一のもっとも強力な表現である。神は典礼を通して、ご自分の限りなく絶えざる愛の比類のないすばらしさを示すことを望まれる。われわれは神の恵みにこたえて、典礼の中でもっとも美しいものを用いたいと望む。天が地上に降るといふ、典礼の驚くべき交換により、救いがもたらされ、悔い改めと回心が呼びかけられる（マタイ 4・17、マルコ 1・15 参照）。

教会の福音宣教は、人の心を神へと高める典礼を必要とする。典礼は単なる人間の行為ではなく、神との出会いである。それは人を観想と神との深い友愛へと導く。この意味で、教会の典礼は最高の信仰の学びやである。

提言 36：新しい福音宣教の靈的側面

福音宣教の主要な担い手は聖霊である。聖霊が人の心を開き、神へと向けるからである。主イエスと出会う体験は、人を三位一体のいのちへと導く聖霊によって可能になる。こうして人は礼拝と祈願と賛美の心でこのいのちを受け入れる。こうした体験が新しい福音宣教のあらゆる側面の基盤とならなければならない。

この新しい福音宣教の「観想的な側面」は、典礼、とくに教会生活の源泉と頂点である感謝の祭儀を初めとした、祈りによって絶えず深められる。

それゆえわれわれは、幼児のときから祈ることを勧め、教えることを提言する。生活の中で神の現存を見だし、神を賛美し、神の与えてくださったたまものに感謝し、聖霊の導きを願えるように、家庭と学校で子どもと若者を教育しなければならない。

提言 37：新しい福音宣教における堅信の秘跡

すべてのキリスト信者は、洗礼と堅信の秘跡により、福音宣教の使命をゆだねられる。この秘跡の中で、信者は聖霊の塗油によって証印を押され、聖霊降臨の神秘にあずかるよう招かれる。堅信により、洗礼を受けたすべての人は、聖霊とそのたまものと、福音を公に勇気をもってあかしする力を豊かに受ける。

洗礼によって子とされる恵みに、秘義教育が伴うことが重要である。その際、聖霊のたまもの重要性を強調しなければならない。人は聖霊によって、教会の聖体に生かされたあかしと、そのあらゆる生活と人間活動の領域に影響を及ぼす力に完全にあずかることができるからである。

それゆえ、洗礼と堅信の秘跡を受ける前に、適切で体系的な信仰教育を行うことがきわめて重要である。

提言 38：キリスト教入信の過程と新しい福音宣教

シノドスは、キリスト教入信の過程は、新しい福音宣教のきわめて重要な要素であり、母である教会が子どもを産み、よみがえらせる手段であるといいたい。それゆえわれわれは、伝統的なキリスト教入信の過程（それはしばしば単なる秘跡の準備にすぎないものとなっている）が、どこにおいても求道者の観点から考察され、継続的な秘義教育を重視することにより、秘跡を通したキリスト教的な生活への導入となることを提言する（『カテケージス一般指針』91 参照）。このことに関連して、今日、キリスト教入信の3つの秘跡は、たとえ神学的に一体とみなされているとはいえ、司牧的には多様なしかたで行われている。教会共同体におけるこの違いは、教理的な性格のものというより、司牧的な判断に基づくものである。しかし、シノドスは教皇が『愛の秘跡』18 で述べたことが、キリスト教入信の過程を教区と司教協議会が見

直す刺激となることを求める。「具体的には、どのようにすれば、信者が入信の過程全体の目的として、聖体の秘跡を中心に置くことができるかを考える必要があります」（『愛の秘跡』18）。

提言 39：民間信心と新しい福音宣教

民間信心はキリストと出会うためのまことの場であり、聖なるおとめマリアと諸聖人に対するキリスト信者の民の信仰をも表す。新しい福音宣教はこうした信仰表現の価値を認め、それがキリスト教的徳を成長させる方法となるよう促す。

巡礼所への巡礼は新しい福音宣教の重要な要素である。それは、多くの人が巡礼を続けているためだけでなく、巡礼という形での民間信心が、回心と信仰の成長を促す特別に有望な機会となるためである。それゆえ、巡礼者を適切なしかたで迎え入れ、巡礼者の深い望みにこたえて、巡礼が真の恵みのときとなる機会を与えるよう、司牧計画を立てることが重要である。

提言 40：教皇庁新福音化推進評議会

シノドスは、教皇が教皇庁新福音化推進評議会を、部分教会に奉仕する手段として設置してくださったことを感謝する。そして、同評議会がシノドスの議論をさらに検討し、新しい福音宣教を展開・推進してくれることを願う。

シノドスはまた各司教協議会に、新しい福音宣教をめぐるテーマに関連する教導職の教えを研究し、広めるための委員会の設置を検討するよう求める。こうして部分教会の協力が強化され、新しい福音宣教の実施をいっそう効果的なものとすることができる。

四 新しい福音宣教の担い手と参加者

提言 41：新しい福音宣教と部分教会

司祭と助祭の助けを得、奉献生活者と信徒の協力のもとに、司教に導かれた部分教会が、新しい福音宣教の主体である。なぜなら、部分教会はそれぞれ

れの地域におけるキリストの教会の具体的な現れであり、それ自体として、新しい福音宣教を行うための司牧活動を計画し、組織し、実施するからである。

教会の中で、洗礼を受けたすべての人に向けられた聖性への招きが響き渡る。この招きは、キリストに従い、愛と善意をもってすべての人に向かい、人々の中での聖霊の働きを見分けるように促す。「わたしがあなたがたを愛したように、あなたがたも互いに愛し合いなさい。互いに愛し合うならば、それによってあなたがたがわたしの弟子であることを、皆が知るようになる」(ヨハネ 13・34 - 35)。初期キリスト教共同体にとって、交わりは信仰生活の構成要素であり、福音宣教に必要なものであった。彼らは心も思いも一つにしていた。教会は交わりである。すなわち、教会は神の家族である。

教会は、教会に属する一人ひとりの人が、生地の中のパン種のようなになるという責任を自覚することを可能にする。こうして「愛の実践を伴う信仰」(ガラテヤ 5・6) は、世のあらゆる側面に対してあかしとなって広まる。そして、すべての人に、キリストと出会い、福音宣教者となる可能性を与える。それぞれの部分教会が、どのような困難があっても、他の部分教会と協力しながら、信者の宣教意識を高めることが望ましい。

提言 42：司牧活動の統合

それぞれの部分教会は、教会の宣教の第一の共同体である。部分教会は、さまざまなカリスマと奉仕職と生活の身分と資源を統合できるように、司牧活動の刷新を促し、導かなければならない。これらすべてのものが、有機的な宣教計画の中で組み合わされなければならない。キリスト教的生活を、すべての人に、とくに教会の配慮から遠ざかっていると感じている人に豊かに伝えられるためである。こうした取り組みは教区を構成するさまざまな要素の対話と協力から生まれなければならない。すなわち、小教区、キリスト教小共同体、教育機関、奉献生活の会、キリスト信者の会、運動団体、個々の信徒である。あらゆる司牧計画は、福音の新しさを伝え、イエスとの個人的で生きた出会いを中心としなければならない。すべての人から、寛大な信仰と、あかしへの招きを進んで受け入れる態度を引き出すことを目指さなければならない。

提言 43：位階制度とカリスマのたまもの

聖霊は「位階制度とカリスマとの種々のたまものをもって」（『教会憲章』4）教会の宣教を導く。実際、教区は「司祭団の協力のもとに牧するよう司教に委託された神の民の一部である」（『教会における司教の司牧任務に関する教令』11）。そこではさまざまなカリスマが、司教の權威を、教会の使命に奉仕するために行う自らの活動に不可欠なものとして認める。司教は、教会生活と宣教の真の源泉として、「たまもの真正性と順当な行使についての判断」（『教会憲章』12）を行う責務をもつ。ともに一つの神の霊から流れ出る、位階制度のたまものとカリスマのたまものは、競合するのではなく、教会生活とその宣教活動が効果的なものとなるためにともに不可欠である（ヨハネ・パウロ二世「運動団体世界大会参加者へのメッセージ（1998年5月27日）」）。奉獻生活は教会のカリスマ的側面の中で特別な位置を占める（教皇庁奉獻・使徒的生活会省『教会における司教と修道者の関係についての指針』34、『キリストからの再出発——第三の千年期における奉獻生活の刷新』32参照）。教会の交わりに完全に接ぎ木された奉獻生活は、自らの固有のたまものによって福音宣教に貢献する。教区レベルにおいても、教区間レベルにおいても、カリスマ的たまものと位階的たまものが教会の司牧計画と靈的生活においてどのように協力できるかを検討すべきである。

第二バチカン公会議以来、新しい福音宣教は新しい運動団体や新しい共同体から大きな恩恵を得てきた。その聖性と一致の理想は、多くの召命と目覚ましい宣教事業の源泉となってきた。シノドスはこれらの新しい組織を承認するとともに、これらの組織が、教区と小教区共同体と密接に協力しながら、おのおののたまものを用いるよう勧める。教区や小教区共同体も、彼らの宣教精神から恩恵を得るであろう。

提言 44：小教区における新しい福音宣教

小教区とその活動は、小教区の構成員が新しい福音宣教の担い手となり、ことばと生活を通じてあかしを行うよう導かなければならない。そのため、小教区が小教区信者の靈的生活の通常の間であり続けることを思い起こすこ

とが重要である。それゆえシノドスは、小教区の家庭訪問を小教区の刷新の手段とするよう促す。ときとして、小教区が単なる行事の場ないし観光センターとみなされる場合もある。

病院、青少年センター、工場、刑務所などの「司牧担当者」は、新しい福音宣教がそれぞれの場に根ざすことを目指さなければならない。実際、教会はそれらの場所に現存する。キリストはそれらの場所にいる人々を優先されたからである。それゆえ、すべての教会が、どこにおいても、可能なかぎり、こうした宣教に開かれたものとなることを勧める。

提言 45：新しい福音宣教における信徒の役割

信徒に固有の召命と使命は、世界の構造を変革し、あらゆる人間の行為と活動を福音に基づいて形づくることである。だからキリスト信者の信徒がキリストを深く知るよう導くことが重要である。それは、キリストに結ばれた生活を通じて彼らの道徳的良心を形成するためである。第二バチカン公会議は、洗礼を受けた者の使命の4つのおもな側面を指摘する。生活のあかし、愛とあわれみのわざ、地上の秩序の刷新、直接的な福音宣教である（『教会憲章』、『信徒使徒職に関する教令』参照）。こうして信徒は、個人としても共同体としても、キリスト教信仰と真に一致した生活のあかしを行うことができるようになる。

信徒は、教会の福音宣教の働きに協力し、証人であると同時に生きた道具として、教会のもつ救いの使命に参加する（『教会の宣教活動に関する教令』41参照）。それゆえ教会は、聖霊がキリストのからだを築かせるためにすべての洗礼を受けた者に与えるたまものを評価し、信仰を伝える使徒的熱意を燃え立たせるための適切な励ましと教育を与えなければならない。

提言 46：教会における男女の協力

教会は、社会と教会における女と男の平等の尊厳を認める。男と女はともに神の像として造られ、教会は、洗礼を受けてキリストに結ばれた男女の共通の召命に基づくからである。

教会の司牧者は女性の特別な能力を認めてきた。すなわち、他者への気配

り、とくに母親としての召命において人を養育し共感する能力である。

女は男とともに、家庭におけるいのちの伝達の努力を通じて、いのちの福音をあかしする。男女はともに福音を生き生きと保つのを助ける。シノドスは、今日、(信徒と奉獻生活者の)女性が男性とともにあらゆる次元で神学的考察に貢献し、新たなしかたで司牧的責任を担い、信仰を伝えるための新しい福音宣教を推進していることを認める。

提言 47：福音宣教者の養成

シノドスは、新しい福音宣教のための養成センターの設立が必要であると考える。そこで信徒が、現代に合った説得力のあるしかたで、特定の人々（若者、不可知論者、高齢者など）にキリストについて語る方法を学ぶためである。

三位一体的キリスト論（『カテケジス一般指針』98 - 100参照）は、福音宣教の3つの領域で福音のメッセージを示すために不可欠かつ基本的である。それは最初の告知、信仰教育、生涯教育のいずれにもいえる（同60 - 72参照）。教育と教材は皆、この観点から評価すべきである。

提言 48：キリスト信者の家庭

結婚の秘跡によって築かれた、家庭教会としてのキリスト信者の家庭は、いのちと愛を与え、信仰を伝え、福音の価値観に従って人間を教育するための場であり第一の担い手である。全教会はキリストに倣って、家庭が子どもと若者の信仰教育を行うための支えとなろうと努めなければならない。多くの場合、祖父母もきわめて重要な役割を果たす。

同時に、新しい福音宣教は、結婚をめぐる重要な司牧的問題にこたえようと努めなければならない。すなわち、結婚して再婚した夫婦と、その子どもたちの置かれた状況、見捨てられた配偶者、結婚せずに同棲する男女、結婚を再定義しようとする社会思潮である。教会は母としての気遣いと福音の精神をもって、これらの状況に適切にこたえようと努めなければならない。これも新しい福音宣教の重要な側面だからである。

あらゆる福音宣教のための司牧計画は、单身者を、教会という家族の中で

神を体験できるよう招くことも含まなければならない。

結婚の前にも、結婚後においても、キリスト教的人間観に従う人間の性の生き方を人々に教えることが必要である。

シノドスは他の国や文化の中でキリストのため福音宣教者となるべく、故国を離れる家族に感謝する。

提言 49：叙階された奉仕職の司牧的側面

シノドス教父は、司教と司祭が、自らの奉仕する人々をいっそう個人的に知るよう勧める。人々は司教と司祭のうちに、信仰と新しい福音宣教を実践し、その模範となるような、信頼のできる真のあかしを求めている。司教は、模範をもって指導し、洗礼を受けたすべての人と福音宣教へと招かれた恵みを分かち合う、福音宣教者である。

教区と小教区において、新しい福音宣教と宣教の新しい方法に関する継続教育を司祭に行うことが必要である。それは、信徒を新しい福音宣教を行うために動員する、効果的な手段を学ぶためである。われわれは、教会の司牧活動全体のおもな責任者である司教に対し、直接的かつ個人的なしかたで司祭の司牧活動を導き、これに同伴する計画を立てるよう勧める。司祭の司牧活動は、新しい福音宣教を決定的なしかたで導く中心だからである。

われわれは司祭の生活と役務が与えるつまずきをきわめて残念に思う。しかしわれわれは、多くの司祭の忠実な奉仕に感謝し、彼らを励ますべきであると提言する。また、司祭の司牧計画に関して部分教会に司牧指針が示されるべきであると提言する。この指針は、体系的かつ有機的で、司祭の生活と役務の真の刷新の支えとなるものでなければならない。司祭は新しい福音宣教の第一の担い手だからである（『現代の司祭養成』2参照）。

それゆえシノドスは、司祭が新しい福音宣教のために適切に養成されるために、養成において、深い靈性、堅固な教理、信仰教育における伝達能力、現代の文化現象に関する意識に留意することを望む。

神学校は新しい福音宣教に重点を置くべきである。そのために、「祭儀の法」(ars celebrandi)、説教、ゆるしの秘跡に関する人間的、靈的、知的養成課程で、新しい福音宣教が統一的テーマとしてしばしば示されるべきである。これらは皆、新しい福音宣教の重要な部分だからである。

シノドスは助祭の働きに感謝し、彼らを励ます。助祭の奉仕は教会に対する大きな奉仕となっているからである。教区における助祭のための継続教育も行うべきである。

提言 50：奉獻生活

男女の奉獻生活は、歴史を通じて教会の福音宣教活動にきわめて重要な貢献を行ってきた。新しい福音宣教の時代にあたって、シノドスは奉獻生活者と在俗会の会員に、奉獻された者としての身分を徹底的に、かつ喜びをもって生きるよう願う。生活のあかしは、神の国の力強い宣教となる。それは、神が第一に優先されるべきことを示し、共同生活を通して福音のもつ人々を人間らしくする力を表すからである。

奉獻生活は、完全に福音的かつ福音宣教的であり、教会の司牧者と深く交わり、信徒と共同責任を担い、それぞれのカリスマに忠実であるとき、新しい福音宣教に大きな貢献を果たす。

シノドスは修道会に対して、福音宣教の地理的、社会的、文化的前線に進んで赴いてくれることを願う。シノドスは修道者に対して、宣教の新たな「アレオバゴス」に向かうよう願う。

新しい福音宣教は本質的に霊的なものなので、シノドスは福音を伝えるための観想生活の重要性も強調する。

祈りと労働を安定した共同体生活を通して行う、歴史の古い奉獻された観想生活の伝統は、教会生活と宣教の力強い恵みの源泉であり続ける。シノドスは新しい福音宣教が、多くの信者にこの生活形態を始めるよう促すことを希望する。

提言 51：若者と新しい福音宣教

新しい福音宣教において若者は、教会における未来であるばかりか、現在のたまものでもある。若者は福音宣教の対象であると同時に、同世代の若者に対する福音宣教の担い手でもある。若者は真理と人生の意味を探求している。真理であり、友であるイエスこそが、これらのものを示してくださる。

模範的なキリスト信者の成人、聖人、とくに若い聖人と、献身的な青年司

牧者を通して、教会は若者にとって目に見える、信頼の置けるものとなる。家庭、学校、キリスト教共同体のいずれにおいても、福音宣教者が若者と会い、彼らと時間をともにすることが必要である。若者にイエスに従う生き方を示し、それに同伴し、人生と教会における召命を見いだすよう彼らを導かなければならない。

メディアが若者の身体的、感情的、精神的、霊的健康に大きな影響を与えている。それゆえ教会は、信仰教育と青年司牧を通して、善悪を識別し、この世の価値よりも福音的価値観を選び取り、堅固な信仰を築ける力を若者に与えようと努める。

WYD(ワールドユースデー)と『YOUCAT』は新しい福音宣教の特別な手段である。

提言 52：エキュメニカル対話

新しい福音宣教のエキュメニカルな側面を強調しなければならない。これは主イエスの「すべての人を一つにしてください」(ヨハネ 17・23) という祈りにこたえる。福音への奉仕がいっそう信頼の置けるものになるには、分裂を克服しなければならない。新しい福音宣教は、カトリック教会の本質と交わりを保ちながら、エキュメニカルな協力を推進する。エキュメニカルな協力は、洗礼によって与えられた信仰がわれわれを一致させることを示すからである。

シノドス教父は第二バチカン公会議以来のエキュメニカル対話の進展に感謝する。過去の困難にもかかわらず、この対話は、シノドスの中で、バルトロマイー世世界総主教とローワン・ウィリアムズ・カンタベリー大主教、そして友好使節の参加によって特別な形で示された。シノドス教父は教会がこの一致と愛の道を歩み続けることを望む。

提言 53：諸宗教対話

すべての宗教者との対話は新しい福音宣教の一部である。とくに教会は、キリスト信者が『キリスト教以外の諸宗教に対する教会の態度についての宣言』に従い、イスラームの人々との関係を保ち、強めるよう招く。さまざま

な困難があっても、この対話を継続しなければならない。諸宗教対話はつねに、対話者が適切な養成を受け、キリスト信者としての真正な教会的基盤をもち、人々の良心とすべての人の信教の自由を尊重する態度をもっていることを前提する。教会は、第二バチカン公会議の教えに忠実に従い、他の宗教とその信者を尊重し、すべての人の不可侵の尊厳の擁護と推進のために彼らと進んで協力する。

提言 54：科学と信仰の対話

科学と信仰の対話は新しい福音宣教の重大な領域である。一方でこの対話は、理性を超える神秘に対する理性の開かれた態度と、科学的知識の根本的な限界の自覚を要求する。他方でこの対話は、信仰が理性と科学研究の成果に開かれていることを要求する。

提言 55：異邦人の中庭

教会共同体は一種の「異邦人の中庭」を開設する。それは、信仰者と非信仰者が根本的なテーマをめぐって対話するためである。すなわち、倫理の偉大な価値、芸術と科学、超越の探求である。この対話はとくに「宗教と疎遠になった人々、神を知らないにもかかわらず、神なしの状態であることも望まず、むしろ知られざる神としてであれ、神に近づこうと望む人々」(ベネディクト十六世「ローマ教皇庁へのあいさつ(2009年12月21日)」)に向けられる。カトリック教育機関は特別な意味でこのような対話を推進することができる。このような対話を「最初の告知」と切り離してはならない。

提言 56：被造物の管理

被造物の管理も多くのしかたで福音宣教に役立つ。それは神のいつくしみ深い創造のわざに関する信仰のあかしだからである。被造物の管理は、被造物の善に生活と生計を頼っているすべての人との連帯感を示す。それは来るべき世代との世代間の連帯も示す。そして、われわれの共通の家である地球の富の責任ある公平な使用をもはっきりとあかしする。

結び

提言 57：キリスト教信仰の伝達

「あなたがたはわたしの証人となる」(使徒言行録1・8)。教会は最初から、福音を伝える責務を自覚していた。使徒伝承に従う、新しい福音宣教の使命は、信仰の伝達である。第二バチカン公会議は、この使命が、すべてのキリスト信者の信仰と生活にかかわる複雑な過程であることを思い起こさせてくれる。

生活が福音に基づいて形づくられていなかったり、福音に基づく意味と真理と未来を見いだしていなければ、生活の中で信仰を伝えることができない。

そのため、キリスト教信仰を伝えるための新しい福音宣教は、すべての信者が、信仰と教会におけるイエスとの個人的な出会いを新たにし、信仰の真理の理解を深め、喜びをもってそれを伝えることを求める。

提言 58：新しい福音宣教の星マリア

第二バチカン公会議は、キリストと教会の神秘との関連でマリアを示す(『教会憲章』52 - 68 参照)。教皇パウロ六世は、マリアは「福音宣教の星」であると宣言した。それゆえマリアは、信仰と希望と愛の模範である。マリアは師であるかたに弟子たちを導いた、最初の助け手である(ヨハネ2章参照)。上の部屋で、マリアは信じる者の母である(使徒言行録1・14 参照)。

あがない主の母であるマリアは、神の愛の証人となる。マリアは神のみ心を進んで果たす。マリアは、ヨハネとともに十字架のもとにとどまる力強い女性である。マリアはつねにわれわれのために執り成し、主の十字架に至るまで信者とともに道を歩む。

母であり元后であるマリアは、苦しむ人、困っている人の希望のしるしである。

現代において、マリアは「宣教者」として、現代の困難のうちにあるわれわれを助け、そばにいて人々の心を信仰へと開く。

われわれはマリアに目を注ぐ。マリアは、すべての人に救いの知らせを告

げ知らせるわれわれを助けてくださる。こうして彼らも福音宣教の担い手となる。マリアは教会の母である。マリアがともにいてくださることにより、教会が多くの人の家となり、すべての民の母となることができますように。

10. 閉会ミサ説教

教皇ベネディクト十六世

年間第30主日の2012年10月28日（日）午前9時30分から、サンピエトロ大聖堂で、教皇ベネディクト十六世司式の下、世界代表司教会議（シノドス）第13回通常総会閉会ミサが行われた。以下に訳出するのは、教皇がミサで行った説教の全文（原文イタリア語）。

親愛なる兄弟である司教の皆様

ミサ参加者の皆様

親愛なる兄弟姉妹の皆様

盲人バルティマイのいやしの奇跡は、聖マルコによる福音書の構成の中で重要な位置を占めます。実際、この奇跡は、「エルサレムへの旅」と呼ばれる部分の最後に位置づけられます。「エルサレムへの旅」とは、イエスが過越祭のために聖なる町に向けて行った最後の巡礼です。イエスはこの過越祭の中で、ご自分の受難と死と復活が待ち受けているをご存じでした。ヨルダン溪谷からエルサレムに上るために、イエスはエリコを通ります。そしてバルティマイと出会ったのは、エリコの町を出るとき、すなわち、福音書記者が述べるとおり、「イエスが弟子たちや大勢の群衆と一緒に、エリコを出て行こうとされたとき」（マルコ10・46）のことでした。この群衆は、すぐ後、イエスがエルサレムに入城する際、彼をメシアとして歓呼のうちに迎えることとなります。バルティマイは道端に座って物乞いをしていました。福音書記者がいうとおり、バルティマイという名前は「ティマイの子」という意味です。マルコによる福音書全体は信仰の旅路です。この信仰の旅路は、イエスの学びやの中で少しずつ進行します。弟子たちはこの発見の歩みにおいて第一の役割を果たします。しかし、別の人々も重要な位置を占めています。バルティマイもその一人です。バルティマイのいやしは、イエスが受難の前に行った最後の奇跡のないいやしです。ところで、それが盲人、すなわち失明した人のいやしだったのは偶然ではありません。わたしたちは他のテキストからも、目が見えない状態が福音書の中で深い意味をもっていることを知っています。盲人は、神の光、すなわち信仰の光を必要とする人を代表します。

それは、本当の意味で現実を知り、いのちの道を歩むためです。自分が目が見えず、光を必要としているのを知ることは不可欠です。そうでなければ、いつまでも目が見えないままにとどまるからです（ヨハネ 9・39 - 41 参照）。

それゆえ、このマルコの物語の重要な部分において、バルティマイは模範として示されます。バルティマイは生まれつきの盲人ではなく、中途失明者です。彼は失明し、そのことを自覚していますが、希望を失いませんでした。彼はイエスと出会う機会を捕らえることを知っており、いやしてもらうためにイエスに身をゆだねます。実際、師であるかたが道を通られると聞いて、彼は叫びます。「ダビデの子イエスよ、わたしをあわれんでください」（マルコ 10・47）。そして彼はますます叫び続けます（48 節）。イエスがバルティマイを呼び、何をしてほしいのかと尋ねると、彼はこたえます。「先生、目が見えるようになりたいのです」（51 節）。バルティマイは、自分の苦しみを認め、いやしてもらえると信じて主に叫ぶ人の代表です。バルティマイの単純で切実な祈願は模範的です。それは「神様、罪人のわたしをあわれんでください」（ルカ 18・13）という神殿における徴税人の願いと似ています。そして、実際にそれはキリスト教の祈りの伝統に受け入れられました。イエスとの出会いを信仰によって体験することにより、バルティマイは失っていた光を取り戻し、さらに光とともに自分の完全な尊厳を取り戻しました。彼は立ち上がって、再び歩み始めます。このときから、彼を導くのはイエスであり、彼の道はイエスが歩む道となります。福音書記者はバルティマイについてそれ以上何も述べませんが、バルティマイのうちに弟子とはいかなる者であるかを示してくれます。弟子とは、信仰の光をもって、「道を進まれる」（52 節）イエスに従う人のことです。

聖アウグスティヌスはある著作の中で、バルティマイという人について注目すべき考察を行っています。この考察は現代のわたしたちにとっても興味深く重要なものに思われます。ヒッポの聖なる司教アウグスティヌスは、この箇所でもマルコが、いやされた人の名前だけでなく、その父親の名前も記していることを考察して、次の結論に達します。「ティマイの子バルティマイは裕福な身分から転落し、そのみじめな状態はすべての人に知られた周知の事実となっていた。彼は目が見えないだけでなく、道端に座って物乞いをしていたからである。だからマルコはこの男だけを思い起こそうとしたのである。奇跡によって目が見えるようになった評判は、失明して失っ

た名声よりも大きかったからである」(『福音書記者の調和』: *De consensu evangelistarum* 2, 65, 125, PL 34, 1138)。聖アウグスティヌスはこう述べています。

バルティマイが「裕福な」身分から転落した人だというこの解釈は、わたしたちに考えさせます。この解釈は次のことをわたしたちに顧みさせます。わたしたちの人生は貴重な富をもっていますが、わたしたちはそれを失う可能性があります。ここでわたしがいうのは物質的な富のことではありません。ここからわたしたちは、バルティマイとは、古くから福音宣教が行われながら、信仰の光が弱まり、神から遠ざかり、神が人生にとって大切だと考えなくなった地域に住む人々を指すと考えることができます。それゆえ彼らは、豊かな富を失い、自分の高い地位から「転落」してしまいました。この高い地位とは、経済的な地位や地上の権力のことでなく、キリスト教的な身分のことです。彼らは人生の確実かつ堅固な方向づけを失い、しばしば無意識のうちに、人生の意味を求める物乞いとなりました。彼らの多くは、新しい福音宣教を必要としています。神の子イエス・キリスト(マルコ1・1参照)との新たな出会いを必要としています。イエス・キリストこそが、彼らの目を新たに開き、道を教えてくださるからです。新しい福音宣教をテーマとするシノドス総会を閉会するにあたり、典礼がバルティマイに関する福音を示してくれたのは意義深いことです。この神のことはわたしたちに特別な意味をもつことを述べています。わたしたちはこの数日間、キリストをあらためて告げ知らせる緊急の必要性に直面してきたからです。それも、信仰の光が弱まったところ、神の炎が、あらためてかき起こさなければならない残り火のようになってしまったところで。それは、この火が、すべての家を照らし温める、生きた炎となるためです。

新しい福音宣教は教会の全生活にかかわります。それはまず、通常の司牧活動にかかわります。司牧活動は、霊の火によっていっそう導かれる必要があります。それは、定期的に共同体に参加し、主の日に集まって、みことばと永遠のいのちのパンで養われる信者の心を燃え立たせるためです。わたしはシノドスで示された3つの司牧的テーマを強調したいと思います。第一はキリスト教入信の秘跡です。洗礼、堅信、聖体を準備する際、適切な信仰教育が伴うべきことが再確認されました。神のあわれみの秘跡である、ゆるしの秘跡の重要性もあらためて強調されました。わたしたちは、この秘跡の歩

みを通して、主がすべてのキリスト信者に呼びかける聖性への召命にこたえます。実際、新しい福音宣教の真の担い手は聖人であると、何度も繰り返して述べられました。聖人たちは、生活の模範と愛のわざにより、だれにでも分かることばで語るからです。

第二に、新しい福音宣教は本質的に「諸民族への宣教」(missio ad gentes)と結びついています。教会の務めは、福音宣教です。イエス・キリストをまだ知らない人々に救いの知らせを告げることです。シノドスの考察の中で、アジア、アフリカ、オセアニアの多くの地域で、ときには完全に意識されないままに、人々が福音の最初の告知を深く待ち望んでいることが強調されました。それゆえ、聖霊が教会の中に新たな宣教の力を呼び覚ましてくださるよう祈らなければなりません。宣教の担い手は、とくに司牧者と信徒です。グローバル化は著しい人々の移動を引き起こしました。それゆえ、古くから福音宣教が行われた国々でも最初の告知が必要です。すべての人にはイエス・キリストとその福音を知る権利があります。そしてこの権利に対応して、司祭も修道者も信徒も含めたすべてのキリスト信者には、福音を告げ知らせる責務があります。

第三は、洗礼を受けながら洗礼の要求することを実行していない人々にかかわります。シノドスの議論の中で、こうした人があらゆる地域にいること、とくに世俗化した国々にいることが明らかにされました。教会は、こうした人々がイエス・キリストにあらためて出会い、信仰の喜びを再発見し、信者の共同体の中で宗教的実践を再開できるよう特別に気遣います。教会は、伝統的で永遠に有効な司牧的方法以外の新しい方法を採用することも追求します。そのため、世界の異なる文化に合った新しい言語にも配慮し、愛である神に根ざした、対話と友愛の態度をもってキリストの真理を示します。教会はすでに世界の諸地域で、教会から離れた人、あるいは人生の意味、幸福、つまるところ神を求めている人に近づくための、こうした創造的な司牧活動を開始しています。たとえば、ある種の重要な都市宣教、「異邦人の中庭」、ヨーロッパ大陸宣教などです。よい羊飼いである主が、キリストとその福音から流れ出るこうした努力を豊かに祝福してくださることは間違いありません。

親愛なる兄弟姉妹の皆様。イエスによって視力を回復したバルティマイは、弟子の群れに加わります。弟子の群れが、バルティマイと同じように、師で

あるかたにいやされた他の人々も加えなければならないのはいうまでもないことです。新しい福音宣教とは次のようなことです。それは、イエス・キリストを通じて神のいやしを体験した人々です。このような人の特徴は、詩編作者とともに次のように叫ぶ、心の喜びです。「主はわたしたちに大いなるわざを行われた。わたしたちは喜んだ」（詩編 126・3〔フランシスコ会聖書研究所訳〕）。現代のわたしたちも、「人間のあがない主」（Redemptor hominis）であり、「諸民族の光」（Lumen gentium）である主イエスに向かって、喜びと感謝のうちに、アレクサンドレイアの聖クレメンス（150 頃 – 215 年以前）の祈りを自分のものとしたいと思います。「今までわたしは神を見いだしたいと望みながらさまよってきました。しかし、主よ。あなたがわたしを照らしてくださいだったので、わたしはあなたを通して神を見いだします。そしてあなたから御父を受け入れます。わたしはあなたの共同の相続人となります。あなたがわたしを兄弟とすることを恥とされなかったからです。それゆえ、真理の忘却を、無知を取り消そうではないか。目の前の霧のように視界をさえぎる暗闇を追い払おうではないか。まことの神を仰ぎ見ようではないか。……暗闇に埋もれ、死の闇に捕らわれていたわたしたちを天の光が照らしたのだ。太陽よりも明るく、地上の生よりも甘美な光が」（『ギリシア人への勧告』：Protrepticus 113, 2-114, 1）。アーメン。

11. 10月28日の「お告げの祈り」のことば

教皇ベネディクト十六世

教皇ベネディクト十六世は、年間第30主日の10月28日（日）午前9時30分からサンピエトロ大聖堂で世界代表司教会議第13回通常総会閉会ミサを司式した後、正午に、教皇公邸書斎の窓から、サンピエトロ広場に集まった信者とともに「お告げの祈り」を行った。以下は、祈りの前に教皇が述べたことばの全文の翻訳（原文イタリア語）。

親愛なる兄弟姉妹の皆様。

今朝、サンピエトロ大聖堂でささげたミサにより、世界代表司教会議（シノドス）第13回通常総会が閉会しました。わたしたちは3週間にわたり、キリスト教信仰を伝えるための新しい福音宣教というテーマを考察しました。全教会の代表者が議論に加わりました。ですから、主の恵みによって、この議論が実を結ばないはずはありません。ところで、シノドスは何よりもまず、つねに教会の強い交わりのときです。それゆえ、皆様とともに神に感謝したいと思います。神はわたしたちにあらためて教会であることのすばらしさを体験させてくださったからです。それも現代において、人類の労苦と希望のただ中で、ありのままの姿で教会であることのすばらしさを。

今回のシノドス総会が第二バチカン公会議開幕50周年と、それゆえ、「信仰年」開年と一致したのはたいへん意義深いことです。福者ヨハネ二十三世と、神のしもべパウロ六世と、公会議の会期を思い起こすのは有意義です。それは、新しい福音宣教がわたしたちの発明ではなく、とくに1950年代から教会の中で発展した動きであることを認識させてくれるからです。当時、古来のキリスト教的伝統をもつ国々さえもいわば「宣教地」となったのは明らかだと思われました。そこから、世俗化した社会の中で福音をあらためて告げ知らせる緊急の必要性が生じました。その前提となったのは次の二つの確信です。すなわち、第一に、現代人の期待にこたえるのは、真の意味で新しいかたであるイエス・キリストだけだということ。第二に、イエス・キリストのメッセージを変化した社会的・文化的状況に合わせた形で伝えなければならぬということです。

この充実した議論の日々の終わりに、わたしたちは何をいうことができるでしょうか。わたしも多くの考察と提案に耳を傾け、それを受け止めました。これらの考察と提案は、シノドス事務総局とわたしの協力者の助けのもとに、まとめられ、文章化されます。それは、全教会に向けて有機的な総括と一貫した教えを示すためです。今からわたしたちはこういうことができます。今回のシノドスから、教会の霊的刷新のための力強い取り組みが生まれます。それは、世俗化した世界を霊的に刷新するためです。そして、この刷新はイエス・キリストの再発見から生まれます。イエス・キリストの真理と恵みから、その人間的でありながら神的な「み顔」から生まれます。この「み顔」の上にすべてを超える神の神秘が輝くからです。

終わったばかりのシノドス総会の議論の実りをおとめマリアにゆだねたいと思います。新しい福音宣教の星であるマリアが、勇気と喜びをもってすべての人にキリストを伝えられるよう、わたしたちを教え、助けてくださいますように。

資料1

世界代表司教会議第13回通常総会

提題解説 (Lineamenta)

キリスト教信仰を伝えるための新しい福音宣教

目次

序文	87
序論	91
新しい福音宣教の緊急の必要性	91
福音宣教の務め	91
福音宣教と識別	94
諸問題から出発する、現代世界における福音宣教	95
質問	96
第1章 「新しい福音宣教」の時代	98
「新しい福音宣教」——その意味	98
新しい福音宣教を必要としている領域	102
新たな状況に直面するキリスト者	105
「新しい福音宣教」と霊性	106
「教会であること」の新しいあり方	107
最初の宣教と司牧的配慮と新しい福音宣教	108
質問	110
第2章 イエス・キリストの福音をのべ伝える	112
キリストとの個人的出会いと交わりが、信仰を伝える目的である	112
教会は自らが生きる信仰を伝える	113
神のことばと信仰の伝達	115
信仰の教育学	116

信仰の伝達の担い手である地域教会	118
宣教の方法としての弁明	119
信仰の伝達が生み出す実り	121
質問	122
第3章 キリスト教的体験への導入	125
キリスト教入信の過程、福音化の過程	125
最初の告知と、神について語る新しい形式の必要性	127
信仰に導き入れること、真理を教えること	128
「人間の人格に基づく環境保護」	131
証人としての福音宣教者と教育者	132
質問	134
結論	138
「新しい福音宣教」の基盤である聖霊降臨	138
「新しい福音宣教」——今日と明日の教会の展望	139
福音宣教の喜び	140
注	142

序 文

「だから、あなたがたは行って、すべての民をわたしの弟子にしてください。彼らに父と子と聖霊の名によって洗礼を授け、あなたがたに命じておいたことをすべて守るように教えなさい。わたしは世の終わりまで、いつもあなたがたとともにいる」(マタイ 28・19 - 20)。イエス・キリストは、天に昇って父である神の右の座に着かれる前に(エフェソ 1・20 参照)、このことばによって、全世界に福音を告げ知らせるようにと弟子たちを遣わしました。弟子たちは、ナザレのイエスと、その地上での生涯、教え、死、何よりも復活の証人となるよう招かれた小さなグループでした(使徒言行録 1・22 参照)。この大きな課題は不可能なように思われましたが、主イエスは弁護者である聖霊を与えることを約束して、彼らを力づけました。聖霊は父からイエスの名によって遣わされます(ヨハネ 14・26 参照)。そして、「(彼らを)導いて真理をことごとく悟らせ」(ヨハネ 16・13)ます。さらに主は彼らとともにいてくださることを約束しました。「わたしは世の終わりまで、いつもあなたがたとともにいる」(マタイ 28・20)。

聖霊降臨のとき、「婦人たちやイエスの母マリア、またイエスの兄弟たちと心を合わせて熱心に祈っていた」(使徒言行録 1・14)使徒たちの上に神の愛の火がとどまりました(使徒言行録 2・3)。その後、主イエスの命令が実現し始めました。イエス・キリストによって豊かに注がれた聖霊のたまものは(ヨハネ 3・34 参照)、教会の始まりでした。教会は本来、宣教的です。実際、聖霊によって油注がれた直後に、使徒聖ペトロは「立って、声を張り上げ」(使徒言行録 2・14)、イエスのみ名による救いを告げ知らせました。神はイエスを「主とし、またメシアとなさったのです」(使徒言行録 2・36)。聖霊のたまものによって造り変えられた弟子たちは、「神の子イエス・キリストの福音」(マルコ 1・1)を広めるために、当時知られていた世界に出かけて行きました。彼らの告知は地中海地域、ヨーロッパ、アフリカ、アジアにまで達しました。父と子の与える聖霊に導かれながら、使徒の後継者たちは宣教を続けました。宣教は世の終わりまで活発に行われます。教会は、世に存在するかぎり、神の国の到来についての福音と、師であり主であるかたの教えと、何よりもイエス・キリストという存在を告げ知らせなければなりません。

「福音」(τὸ εὐαγγέλιον) ということばはすでに教会の初期の時代から用いられました。聖パウロはしばしばこのことばを用いて、新しい救いの計画の全体(一テサロニケ1・5以下、ガラテヤ1・6-9以下参照)、そして、神から自分にゆだねられた福音を(一テサロニケ2・4参照)、「激しい苦闘の中で」(一テサロニケ2・2参照)告知知らせることを表します。「福音」ということばは、聖マルコに見いだされる引用のほか(マルコ1・14、15、8・35、10・29、13・10、14・9、16・15参照)、しばしば聖マタイ福音書記者によって「み国の福音」(マタイ9・35、24・14、26・13参照)を表すために用いられます。聖パウロも「福音を告知知らせる」(εὐαγγελίσασθαι、二コリント10・16参照)という表現を用います。このことばは使徒言行録にも見いだされ(使徒言行録8・4、12、25、35、40参照)、教会史を通じて発展させられました。

最近、「福音宣教」(evangelization) ということばは、教会活動のあらゆる側面を表すようになっていきます。1975年12月8日に発布された使徒的勸告『福音宣教』(*Evangelii nuntiandi*)は、福音宣教が説教、信仰教育、典礼、秘跡生活、民間信心、そしてキリスト教的生活のあかしを含むと述べます(『福音宣教』17、21、48以下参照)。この『福音宣教』の中で、神のしもべ教皇パウロ六世は、現代世界における福音宣教をテーマとして1974年9月27日から10月26日まで開催された世界代表司教会議(シノドス)第3回通常総会の結果をまとめました。その後数十年間、この文書は教会の宣教活動への大きな刺激となりました。宣教活動には人間性の推進が伴いました(『福音宣教』29、38、70参照)。

福音宣教の広い文脈の中で、これまでイエス・キリストの福音を知らずにいた人間と国民に福音を告知知らせることに特別な関心が向けられます。この「諸民族への宣教」(*missio ad gentes*)は、教会の絶えざる活動によって特徴づけられます。この活動には、教会史の特別な出来事、たとえば、アメリカ大陸に始まり、アフリカ、アジア、オセアニアで行われた宣教事業が含まれます。第二バチカン公会議は『教会の宣教活動に関する教令』(*Ad gentes*)の中で、全教会の宣教的性格を強調しました。教会の創立者であるイエス・キリストの命命に従って、キリスト者は宣教者(すなわち非キリスト者に福音を告知知らせる人々)を祈りと物資で支えなければならないだけでなく、おのおのの召命と手段に従って、自ら神の国を世に広めようと努めなければ

なりません。この務めはグローバル化した現代においてとくに緊急性を帯びています。さまざまな理由で、イエス・キリストをまだ知らない多くの人が古くからキリスト教的伝統をもつ国々に移住し、キリスト者と出会うからです。ですからキリスト者は、とくにみことばと秘跡によってつねに教会に現存しておられる復活した主の証人とならなければなりません。

45年以上前の設立以来、シノドスは総会の中で何度も「諸民族への宣教」というテーマを取り上げてきました。司教たちは全教会の宣教的性格と、第二バチカン公会議の教えを考察しました。第二バチカン公会議は『教会の宣教活動に関する教令』の中でシノドスにはっきりと宣教的性格を与えました。「他の至るところに福音を告げるべく配慮することはとくに司教団の任務であるから、世界代表司教会議すなわち『全教会のための永続的な司教たちの協議会』は、一般的な重要任務の中でも、教会のもっとも重大で聖なる任務である宣教活動をとくに重視しなければならない」（『教会の宣教活動に関する教令』29）。

最近の数十年間、新しい福音宣教の緊急の必要性について多くのことが語られてきました。福音宣教は教会の通常の活動の特徴であり、「諸民族への」福音宣教は、宣教が行われたばかりの宣教国における地域共同体・部分教会の養成を必要とします。これに対して、新しい福音宣教は、伝統的なキリスト教国で教会から離れた人々を第一の対象としています。残念ながら、こうした教会離れの現象は、最近の数世紀の間に福音宣教が行われた一部の国にも、程度の差はあれ、存在します。これらの国々は、現代、個人・家庭・社会をキリスト教的に変容させるほどには福音を十分受け入れていないのです。こうした状況は、2000年の大聖年の準備のために開催された大陸別シノドス特別総会で議論されましたが、依然として全教会にとって大きな問題であり続けています。そのため教皇ベネディクト十六世は、司教職にある兄弟たちの意見を求めた後、2012年10月7日から28日まで、「キリスト教信仰を伝えるための新しい福音宣教」をテーマとしてシノドス第13回通常総会を招集することを決めたのです。これまでこのテーマに関して行われてきた考察を継承しつつこれから行われるシノドスの目的は、部分教会の現状を分析し、ローマ司教・普遍教会の牧者である教皇ベネディクト十六世との交わりのうちに、新たな熱意をもって現代世界の人々に福音を伝えるための新しい手段と方法を探ることです。聖人たちはこのような熱意をもって、「かつておられ、

今おられ、やがて来られるかた」(黙示録4・8)である主イエス・キリストを喜んであかししたのです。シノドスは、聖伝の貴重な宝から新しいものと古いものを取り出すことのできた、天の国のことを学んだ学者と同じようにこの課題に取り組みます(マタイ13・52参照)。

シノドス事務局通常顧問会の助けによって作成されたこの『提題解説』(Lineamenta)は、シノドス総会を準備する重要なステップです。各章の終わりにいくつかの質問が掲げられています。質問は教会のあらゆるレベルで議論を喚起することを目的としています。そのため、本『提題解説』は、シノドス事務局と公的関係をもつ、自主権を有する東方カトリック教会、司教協議会、ローマ教皇庁各省・評議会、修道会総長連合に送付されます。これらの諸機関は、それぞれの権限を有する領域(教区、裁治権を有する司牧区域、小教区、修道会、キリスト信者の会、運動団体など)で本文書についての議論が行われるように努めてください。その後、司教協議会とシノドスと上記の諸機関は、考察を要約し、2011年11月1日の諸聖人の祭日までにシノドス事務局に報告を提出してください。その後、シノドス通常顧問会の助けを得ながら、回答は注意深く検討され、シノドス総会の作業文書である『討議要綱』(Instrumentum Laboris)にまとめられます。

さまざまなたまものと関心と司牧的配慮の貴重な交換である、皆様のご協力に前もって感謝しながら、シノドス第13回通常総会のすべてを、新しい福音宣教の星である聖なるおとめマリアの母としてのご保護にゆだねます。マリアの執り成しを通じて、教会が聖霊によって刷新される恵みを与えられ、新たな熱意をもって、復活した主の命令を現代において果たすことができますように。「全世界に行って、すべての造られたものに福音をのべ伝えなさい」(マルコ16・15)。

バチカンにて、2011年2月2日 主の奉獻の祝日

シノドス事務総長

チバレ名義大司教 ニコラ・エテロヴィッチ

序 論

「わたしは、わたしを探さなかった者たちに見いだされ、わたしを尋ねなかった者たちに自分を現した」(ローマ10・20)。

新しい福音宣教の緊急の必要性

1 中東特別シノドスの終わりに、教皇ベネディクト十六世ははっきりと、新しい福音宣教を教会の最重要課題として位置づけました。「シノドスの議論の中で、しばしば強調されたのは、福音をまだよく知らない人、あるいは教会から離れた人に福音をあらためて示さなければならないということです。中東にも新しい福音宣教を行わなければならないということもしばしば主張されました。とくに古くからキリスト教に根ざした国々においてこのテーマは広く論じられてきました。最近、教皇庁新福音化推進評議会を設立したことも、このような深い必要性にこたえたものです。そのため、全世界の司教の意見を求め、シノドス通常顧問会の意見も聞いた後、わたしは次回の通常総会を2012年に『キリスト教信仰を伝えるための新しい福音宣教』をテーマとして開催することに決めました」(1)。

教皇は、新しい福音宣教を次回シノドスのテーマとした決定は、最近ローマ教皇庁内に特別な機関を設置したこと(2)と、シノドス後の使徒的勧告『主のことば』(3)の発布を含む、統一的な計画の一部であると述べます。この計画は教会の宣教活動の刷新への取り組みから生じました。宣教活動は、教皇パウロ六世にとっても、ヨハネ・パウロ二世にとっても、その教導職と使徒的奉仕職の主要な特徴をなすものでした。第二バチカン公会議以来、新しい福音宣教は、急速に変化する世界の問題にこたえるための適切で時宜を得た手段であり、聖霊に呼び集められた恵みにこたえるための道であることがますます明らかになっています。こうしてわたしたちは、わたしたち皆の父である神を体験し、すべての人にイエス・キリストの福音をあかしし、告知らせるのです。

福音宣教の務め

2 教会は、信仰を告知らせ、伝える上で、神に倣います。神は御子を人類に与えることを通じてご自身を知らせます。三位一体の交わりの中で生き

ておられます。人類と対話するために聖霊を注ぎます。福音宣教がこうした神の自己伝達を映し出すものとなるために、教会は聖霊に教えられ、十字架につけられたキリストに似せて形づくられなければなりません。キリストは世に愛と交わりである神の姿を示すからです。こうして教会は「母なる教会」(Ecclesia mater)としての使命を再発見します。教会は、信仰を伝え、愛を教えることによって、主に対して子どもを産み出します。そして、愛は教会の子らを生み、育てます。

告知する内容の中心はイエス・キリストです。人はイエス・キリストを信じ、あかしします。信仰を伝えるとは、本質的に、聖書、それもおもに福音を伝えることです。福音は主イエスを知る機会を与えるからです。

教皇パウロ六世は信者にとって福音宣教を行うことが第一の優先課題であることをあらためて強調して、次のように述べます。「もしすべてのキリスト教徒と福音宣教者が祈りのうちに次の考察を深めてみるならば、よい結果が得られるでしょう。たとえわたしたちが福音をのべ伝えなくても、人間は神のあわれみによって、何らかの方法で救われる可能性があります。しかし、もしわたしたちが、怠りや恐れ、また恥——聖パウロが「福音を恥じる」というときの——あるいは間違った説などによって、福音をのべたことを怠るならば、果たしてわたしたちは救われるのでしょうか」(4)。『福音宣教』の結びのこの問いかけは、初めに引用した聖パウロのことばの解釈に役立ちます。そこからわたしたちはまた、問題の中心に直接かかわることが可能になります。すなわち、現代の教会にとって福音宣教の務めが何よりも中心的なものだということです。単に実践的次元にとどまらずに、福音宣教に関する自分の経験と態度を再検討するなら、宣教の実践と方法を改善することができます。もっと深い次元において、この検討は、信仰の質、すなわち、キリスト信者またイエス・キリストの弟子としての感覚とあり方を問うことを可能にします。キリスト信者は世にイエス・キリストをのべ伝え、聖霊に満たされた証人となるよう命じられ(ルカ 24・48 以下、使徒言行録 1・8 参照)、すべての国民を弟子とするよう招かれているからです(マタイ 28・19 以下参照)。

エマオへの道を歩む弟子たちのことば(ルカ 24・13 - 35 参照)は、キリストをのべ伝えることが失敗する可能性があることを示します。彼らのことばはいのちを伝えることができませんでした。自分たちの挫折と失望を語りながら、二人の弟子は死んだ人についてのべ伝えます(ルカ 24・21 - 24 参

照)。宣教は、いのちをもたらすのではなく、宣教する人と宣教を受ける人とともに告知されたキリストの死に閉じ込める可能性があることを、この弟子たちのことばはあらゆる時代の教会に語ります。信仰の伝達は個人が一人で行うものではなく、共同的・教会的な行為です。伝達の効果の研究に基づいて反応を考慮すべきでも、聴衆、たとえば若者の分析に終始すべきでもありません。むしろ、宣教という霊的活動に招かれた人に関することがらにこたえるべきです。宣教は、教会が本来なすべきものとならなければなりません。こうして問題を外的なしかたによってではなく、正しく、つまり、教会の存在と生活全体の中に位置づけることができます。そこから、宣教と信仰教育が成果を上げないという問題を、教会の問題として考えることができるようになります。問題は、多かれ少なかれ、教会が真の意味での共同体となり、機械的な団体ないし企業のようなものではなく、真の友愛に基づく生きたからだになることができないことにあるのです。

「旅する教会は、その本性上、宣教することを使命とする」⁽⁵⁾。第二バチカン公会議のこのことばは、教会の聖伝を単純かつ完全なしかたで要約します。教会は宣教的です。なぜなら、教会の起源は、父である神のご計画に基づく、イエス・キリストの派遣と、聖霊の派遣にあるからです⁽⁶⁾。さらに、教会が宣教的なのは、教会は神の啓示を告げ、あかしし、散らされた神の民を集めることによってこの起源に回帰するからです。こうして教会は、教父が教会についていわれたものと解釈したイザヤの預言を実現できます。「あなたの天幕に場所を広く取り、あなたの住まいの幕を広げ、惜しまず綱を伸ばし、杭を堅く打て。あなたは右に左に増え広がり、あなたの子孫は諸国の民の土地を継ぎ、荒れ果てた町々には再び人が住む」(イザヤ 54・2 - 3)⁽⁷⁾。

「もっとも、わたしが福音を告げ知らせても、それはわたしの誇りにはなりません。そうせずにはいられないことだからです。福音を告げ知らせないなら、わたしは不幸なのです」(一コリント 9・16)。この使徒聖パウロのことばは、教会全体にも当てはめることができます。教皇パウロ六世はいいます。「すべての人々に福音をのべ伝えることが教会の第一かつ本来の使命です。それは、今日、著しく変化しつつある社会では、命令かつ使命です。福音を伝えることは、実に教会自身の本性に深く根ざしたもっとも特有の恵みであり、召命です。教会はまさに福音をのべ伝えるために存在しています」⁽⁸⁾。

宣教し、福音をのべ伝えるというこの二つの活動において、教会は告知者

としての積極的な役割を果たすだけでなく、耳を傾ける弟子としての反省的な役割も果たします。福音宣教者である教会は、自らを福音化することから始まります(9)。教会は自らがこの絶えざる福音宣教活動によって目に見える形で生み出されたものであることを知っています。聖霊はこの福音宣教を歴史を通じて導きます。こうして救われた者は、イエス・キリストに関する神的で生きた記念の証人となります。現代のわたしたちはこのことをますます確信できます。なぜなら、教会の歴史は、勇気と献身と大胆さと洞察と理性の特別な模範を示しているからです。さまざまな文書、祈り、教育の模範と方法、霊的な手引き、信仰入門の方法、教育活動と教育機関が存在するからです。

福音宣教と識別

3 教会にとって、神の驚くべきわざ(Mirabilia Dei)を感謝をもって仰ぎ見るだけでなく、福音宣教活動には耳を傾け、弟子として従うという次元があるのを見いだすことも重要です。教会は、福音宣教を行う者であるだけでなく、自らの福音宣教活動によって生み出されるものでもあります。なぜなら教会は、福音宣教活動全体が、自分の力によるのではなく、神のみ手によることを知っているからです。神の霊が教会を歴史の中で導くのです。聖パウロがこの序論の冒頭に引用したテキストの中でいおうとしたのはこのことです。教会は知っています。聖霊が教会の宣教活動を導き、福音を告げ知らせるための時と場所と手段を示してくださることを。初代教会の困難な時代の中で、聖パウロは福音宣教において神が第一の役割を果たすことをよくわきまえていました。それは、理屈の上だけでなく、計画し、実行する実践についてもいえることです。パウロは、聖書、とくに預言書に基づいて、このことの原因を示すことができました。

使徒聖パウロは、初代教会の特別に充実した意味深い時代の中で、聖霊が第一の役割を果たすことを認めます。実際、一部の信者は別の道を進むべきだと考えました。初期キリスト者の中には、いくつかの基本的な決定を下す上で躊躇する者もいました。福音宣教の過程は識別の過程となりました。宣教はまず、耳を傾け、理解し、解釈することを求めます。

現代は多くの意味で聖パウロが生きた時代と似通っています。わたしたちキリスト信者も大きな歴史的・文化的変化の時代の中に置かれています。こ

の変化についてわたしたちは後に詳しく考察します。福音宣教活動は、かつてと同じような、時代に即した識別活動を要求します。すでに40年前に第二バチカン公会議はこう述べます。「今日、人類史の新しい時代が始まっており、深刻急激な変革が次第に世界に広まりつつある」⁽¹⁰⁾。公会議以来、この変革はますます大規模なものとなり、当時と異なり、ユートピアの夢と希望だけでなく、恐れと懐疑をももたらしています。21世紀の最初の10年はさまざまな変革を目の当たりにしています。それらの変革は人類史にしるされ、多くの形で深い影響を与えています。

わたしたちは特別に深刻な、変化し、緊張に満ち、バランスと基準の失われた時代を生きています。時代はますますわたしたちが現在の瞬間を生きるように強いています。そのため、耳を傾け、人類の記憶を伝達し、将来の世代を築くための価値を共有することがますます困難になっています。このような状況の中で、キリスト信者の存在と教会の諸機関の活動は当然のものとして受け入れられず、場合によって疑いの目で見られることもあります。過去数十年間、教会、キリスト信者、そしてわたしたちがのべ伝える神について繰り返し批判が投げかけられました。したがって、福音宣教は新たな問題に直面しています。従来の実践は疑問視され、堅固な習慣でなくなっています。一言でいえば、状況は、教会がまったく新たなしかたで、信仰をのべ伝え、伝える方法を考察することを求めています。にもかかわらず、教会は何の準備もなしにこれらの問題に取り組むわけではありません。教会はとくに信仰の宣言と伝達をテーマとしてすでに行われたシノドス総会の成果を用いることができます。使徒的勧告『福音宣教』と『要理教育』が示すとおりです。これら2つのシノドス総会において、教会は自己評価と、福音宣教の命令の活性化を経験しました。

諸問題から出発する、現代世界における福音宣教

4 この序論の冒頭に引用した聖パウロのことばは、わたしたちが準備している、これから行われるシノドス通常総会の目的と意味を理解する助けとなってくれます。さまざまな変革と革命的な出来事によって特徴づけられる長い期間の後、教会は耳を傾け、議論を行うことから益を得ました。そこから、わたしたち教会が行うよう招かれている福音宣教活動に必要な、高い質の識別を行えるようになりました。福音宣教と要理教育についてのシノドス総会

の時代から、文化と社会全体は大きな、場合によって前例のない変革を経験しました。わたしたちはその影響を（財政・経済危機の場合のように）いまだに見ることができ、それぞれの地域の状況の中ではっきりと感じます。変革から直接影響を受けた教会は、問題を考察し、現象を理解し、実践に対応し、現実の状況に向けて希望の福音を新たなしかたで伝えなければなりません。現代の状況は、次回シノドスに向かうようわたしたちを自然に促します。注意深く耳を傾け、情報を交換することにより、わたしたちは豊かにされ、神が聖霊によって始められたわざを行う準備ができるようになります。神はご自身を現し、人類が神を見いだすことを可能にしてくださいました。預言者イザヤのことばが述べるとおりです（イザヤ 40・3、57・14、62・10 参照）。

識別は、注意し、耳を傾け、ともに議論すべき問題とテーマを見分けることを要求します。教会の宣教活動を支え、必要な変革を行うために、わたしたちの識別は教会の務めの本質的な側面を考察の中心に置かなければなりません。それは次のものです。（一）教会における「新しい福音宣教」の始まりと成長と発展。（二）現代の教会が信仰を伝える責務と使命を果たす方法。（三）現代世界の中で教会が信仰を生み出し（キリスト教入信の過程、教育）、現代の諸問題に立ち向かうために用いる実際の方法です。これらの側面が本文書の枠組みとなります。本文書の目的は、耳を傾け、理解し、教会の中ですでに行われている識別の視野を広げることです。こうして識別はいっそう響き合い、「カトリック的」で「普遍的」なものとなります。

質問

識別は本来、つねに歴史と意図によって限定されます。いいかえると、識別の過程は具体的な現実から出発し、特定の状況に応答するものとして形成されます。一般的に、地域教会は、同じカトリック文化を共有しながらも、最近の数十年間に、識別の過程においてさまざまな出来事と段階を経験してきました。それらの出来事と段階は、独自で、状況と歴史によって規定されています。

1 どのような経験を他の地域教会と分かち合うべきだと感じますか。

- 2 歴史の出来事を識別する過程で、どのようなことを普遍教会と分かち合うべきでしょうか。目的は、これらの出来事に互いに耳を傾け合うことを通して、普遍教会が、聖霊が福音宣教活動を導く方向を見分けることです。
- 3 今では「新しい福音宣教」というテーマは地域教会でもよく知られています。このテーマはどのように理解され、説明されてきましたか。それはどのような形をとりましたか。
- 4 「新しい福音宣教」を行うことから恩恵を得た司牧活動にはどのようなものがありますか。司牧計画の変更ないし、活動の重要な刷新がありましたか。このことに関連して、障害や緊張が生じたことがありますか。

第1章 「新しい福音宣教」の時代

「聞いたことのないかたを、どうして信じられよう。また、のべ伝える人がなければ、どうして聞くことができよう」（ローマ10・14）。

「新しい福音宣教」——その意味

5 「新しい福音宣教」は、よく知られ、十分に受け入れられてはいるものの、依然として教会と司牧において新しいことば・概念です。したがって、その意味は必ずしも明確ではありません。教皇ヨハネ・パウロ二世はポーランド司牧訪問のときに初めてこのことばを用いました⁽¹¹⁾。そこでは特別な強調も、将来それが担う役割も示されていませんでした。しかし、「新しい福音宣教」は教皇のラテンアメリカ教会に対する教えの中で繰り返し用いられ、新たないのちを吹き込まれました。教皇ヨハネ・パウロ二世は、ラテンアメリカにおける新たな宣教と福音化を促し、刷新するために、このことばを用いました。このことに関連して、教皇はラテンアメリカの司教たちに述べます。「宣教500周年は、皆様司教が司祭と信者とともに自分の使命を受け入れるときに、完全な意味をもちます。この使命とは、再宣教ではなく、むしろ、新たな熱意と方法と表現をもって、新しい福音宣教を行うことです」⁽¹²⁾。したがって、新しい福音宣教は、不適切なしかたで行ったこと、あるいは目的を達成できなかったことをやり直すことではありません（新たな活動が最初の福音宣教の失敗に関する暗黙の価値判断を含むかのように）。新しい福音宣教は、最初の宣教をもう一度行うことでも、過去を繰り返すことでもありません。むしろそれは、変化する状況にこたえるために勇気をもって新たな道を歩むことです。現代の教会は、この状況の中で福音をのべ伝え、生きるよう招かれているからです。かつてラテンアメリカは新たな問題に直面していました（共産主義イデオロギーの広まり、セクトの登場）。新しい福音宣教は、ラテンアメリカの教会が、状況全体を考察し、判断するために識別を行った結果です。

この意味で、教皇ヨハネ・パウロ二世は、教導職の中でこのことばをあらためて用いて、普遍教会に示しました。「今日、教会は他の挑戦に立ち向かい、新しい地域へ向かって前進していかなければなりません。それは諸国の民へ

の最初の宣教についてばかりでなく、すでにキリストが告げ知らされている人々への新しい福音宣教についてもいえることです。今日、すべてのキリスト者は、部分教会においても普遍教会においても、かつての宣教者を駆り立てたのと同じ勇氣、そして靈の声に聞き従ったのと同じ心構えをもつよう呼びかけられています」⁽¹³⁾。新しい福音宣教は第一に靈的活動です。それは現代において最初のキリスト者と宣教者の勇氣と力を回復することを可能にします。したがって、まず、キリスト教の活力を見極め、実現したと直面している困難を再検討する過程が必要です。その後、教皇ヨハネ・パウロ二世は新しい福音宣教の概念を明確化しました。「教会は、今日、福音をのべ伝えるにあたって、一歩大きく前進し、その活発な宣教活動の新しい歴史的段階に踏みこまなければなりません。距離感がなくなり、それだけ狭くなった世界にあって、教会共同体は互いに一致団結し、それぞれの活力と手段を分かち合い、また福音を告げ知らせ実践する唯一の、そして共通の使命をグループとして実行しなければなりません。『いわゆる若い教会は、旧来の教会の底力を必要としています。他方、旧来の教会は若い教会のあかしと刺激を必要としているのです。こうして一つひとつの教会は、他の教会の豊かさを受け取るのです』」⁽¹⁴⁾。

今、「新しい福音宣教」の力は再評価されています。そこで、現代の社会と文化が、深刻な変化の結果、キリスト教信仰とその宣教とあかしに与えるさまざまな問題に立ち向かうための、教会の新たな努力を意味するものとしてこのことばは用いられます。これらの問題に直面する教会は、あきらめることも退くこともありません。むしろ、自らを活気づけるための計画を実施します。教会はイエス・キリストの人格と、イエス・キリストとの個人的な出会いを中心に考えます。イエス・キリストがご自身の靈を与え、現代文化に語りかけうる新たなしかたで福音を告げ知らせる力をくださると知っているからです。

このような意味で用いられた「新しい福音宣教」ということばは、2000年の大聖年を準備するために開催された大陸別シノドスにおいて再び取り上げられ、示されました。当時、このことばは地域教会の司牧・教会を考える上で当然のことばとなっていました。「新しい福音宣教」は、地域教会の信仰生活に新たな息吹を吹き込むことと同義語でした。それは、さまざまな文化・社会状況における問題を識別し、信仰の記憶を読み直し、新たな責任を担い、

イエス・キリストの福音を喜びと確信をもって告知らせるための新たな力を生み出すことでした⁽¹⁵⁾。このことに関連して、教皇ヨハネ・パウロ二世のヨーロッパの教会へのことばはとくに明確です。「〈新しい福音宣教〉が緊急に必要とされています。次のことが自覚されているからです。『現代のヨーロッパは過去のキリスト教的遺産にさかのぼるだけではいけません。ヨーロッパは、イエス・キリストの人格とメッセージに従って、自らの将来を決めることができるようにならなければならないからです』」⁽¹⁶⁾。

新しい福音宣教ということばは教会の中で広く知られています。しかし、それが教会と文化界での議論において十分に受け入れられているとはいえません。ある人はこのことばを用いることをためらいます。教会の過去を消極的に評価し、地域教会の最近の歴史の一部を取り去ろうとしていると考えるためです。とくに他のキリスト教派のある人々は、「新しい福音宣教」が教会の人々を改宗させようとする意図を偽装しているのではないかと疑っています⁽¹⁷⁾。またある人々は、このことばが教会の非信仰者に対する態度の変更をもたらしてはしないかと考えます。非信仰者を議論の参加者に変え、存在の真理を探求する同じ人類の仲間とみなす対話の相手でなくしてしまうというのです。最後に挙げた懸念について、教皇ベネディクト十六世はチェコ共和国への司牧訪問の際に次のように述べます。「わたしはここで自然にイエスが預言者イザヤから引用したことばを思い起こします。すなわち、神殿はすべての国の人の祈りの家とならなければならないということばです（イザヤ 56・7、マルコ 11・17 参照）。イエスはいわゆる『異邦人の中庭』のことを述べています。イエスはそこから外的なことがらを取り去り、そこで異邦人が唯一の神に祈りをささげられる自由な空間とします。たとえ異邦人が、神殿の内陣でのみ礼拝される神秘にあずかることができなくても。すべての国の人のための祈りの場ということばで、イエスは、いわば遠くから神を知るにすぎない人々のことを考えています。彼らは自分たちの神々と儀礼と神話に満足できません。彼らは純粋で偉大なかたを望みます。たとえ神は彼らにとって『知られざる神』（徒言行録 17・23 参照）にとどまるにしてもです。彼らは知られざる神に祈るほかありません。しかし、このようにして彼らはある意味で、たとえどれほどあいまいな形であっても、まことの神に触れたのです。わたしは、現代においても教会が一種の『異邦人の中庭』を設けなければならないと思います。そこでは人々がある意味で神とかわるかわる

できます。この神を知らず、教会が内的生活によって礼拝するその神秘に近づくことができなくても。現代において、諸宗教対話だけでなく、宗教と疎遠となり、神を知らないにもかかわらず、単なる神々では満足できず、たとえ知られざるかたであっても、神に近づきたいと望む人々と対話しなければなりません」(18)。

信仰者であるわたしたちは、自らを不可知論者または無神論者と呼ぶ人々にも関心を示すべきです。彼らはわたしたちが「新しい福音宣教」というのを聞くと、恐れを抱くかもしれません。自分たちが教会の宣教活動の主要な対象となると考えるからです。しかし、不可知論者や無神論者も神への問いについて考えるべきです。神の探求は西方修道制と西洋文化の中で生まれました。福音宣教の第一段階は、神の探求を生き生きと保ち、対話を行い続けることです。それも、宗教を告白する人だけでなく、宗教が生活の中で重要でないと考える人々とも対話することです。

「異邦人の中庭」というイメージは、「新しい福音宣教」を考える上でのもう一つの要素として役立ちます。それは、キリスト者が福音をのべ伝え、対話のための道を開くために、大胆な感覚を失ってならないことを示すためです。対話の中では、人々の深い望みと神への渇きが論じられます。こうした大胆さから、神を探求した個人的な経験を分かち合い、イエス・キリストの神との個人的な出会いが無償で与えられることを述べることを通じて、神への問いを話の中に位置づけることが可能になります。そのためには、まず自己評価と清めが必要です。そこから、文化的要因から生じる、恐れ、倦怠、混乱、引きこもりを示す兆候を認めることができるようになります。この段階の次にすぐに続くべきなのは、聖霊の恵みにより頼みながら、父である神を新たに体験しようとする努力と取り組みです。この体験は、キリストとの個人的な出会いの力のおかげで、他の人にも伝えることができます。キリスト教的生活のさまざまな霊的様式と同様、今述べた段階は時間を追って生じるものではありません。使徒聖パウロもこのことについて述べます。信仰体験は、「闇の力」から救い出され、「御子の支配下に移される」ことです。「この御子によって、あがない、すなわち罪のゆるしを得ているのです」(コロサイ1・13、14。ローマ12・1、2参照)。同時に、大胆さはキリスト教においてまったく新しいものでも、前例のないものでもありません。それはすでに教父の著作にも示されているからです(19)。

新しい福音宣教を必要としている領域

6 それゆえ、新しい福音宣教は大胆な行動様式です。それはキリスト教が人類史の新たな状況を読み取り、解釈する力です。この数十年の間、こうした状況が福音を告げ知らせる場となったからです。さまざまな機会に強調されたとおり⁽²⁰⁾、この領域は、社会、文化、経済、市民生活、そして宗教とかわります。

新しい福音宣教を必要としている第一の領域は文化です。現代、わたしたちは深刻な世俗化の時代を生きています。世俗化は、生きた、いのちをもたらすメッセージとして福音を聞き、理解する力を失わせています。これはとくに西洋世界にいえます。そこでは歴史とアイデンティティが社会と思考様式の変化によって大きな影響を受けています。現代文化において、多くの人は世俗化の傾向を、過去からの解放、または世界と人類と超越に関する思想との分離として、積極的な意味でとらえています。現代においても、キリスト教、宗教、聖職者に反対する主張がときとして行われますが、最近の世俗主義は、直接、神、宗教、またはキリスト教を否定する形態をとりません。むしろ、世俗化運動は文化においてより微妙な形をとって、日常生活に浸透し、神を完全にまたは部分的に人々の生活と意識から排除する考え方を促しています。こうして世俗主義はキリスト教的な生活と教会共同体の中に入り込み、信者にとって単なる外的脅威ではなく、生活の中で日々直面しなければならないものとなりました⁽²¹⁾。すなわち、いわゆる相対主義の文化です。さらに、この傾向は人間に関する考え方に深刻な影響を与え、人間の基本的な経験、たとえば男性と女性の関係や、出産と死の意味そのものも問題にします。

生活に関する世俗的なものの見方は、多くのキリスト信者の日常生活にも見られます。キリスト信者も表象文化と反対勢力によって、完全に規定されはしないまでも、影響されることが多いのです。支配的な快楽主義的・消費主義的な精神から生じる、軽薄で自己中心的な傾向への誘惑に打ち勝つことは容易ではありません。多くの知識人が数十年前に唱えた「神の死」は、何も生み出すことのない個人信仰に変わりました。信仰を説明する基本的な要素が失われる可能性があります。そこから生じるのは、霊的な退化と精神の空疎化だけでなく、極端な形での、代替宗教や、スピリチュアルなものに関

するあいまいな感覚です。こうした状況の中で、新しい福音宣教は、疲弊した共同体がキリスト教的経験の喜びを再発見し、失われた「初めのころの愛」（黙示録2・4）を取り戻し、真理を探究する自由のまことの意味を強調する助けとなる、必要な刺激だと思われます。

同時に、世界の一部の地域は、希望に満ちた宗教的覚醒の兆候を示しています。しかし、諸宗教における神と聖なるものの再発見から生まれるこうした期待に、原理主義の現象が影を落とします。原理主義はしばしば暴力とテロを正当化するために宗教を深刻なしかたで濫用します。「神の名によって暴力を用いてはなりません」⁽²²⁾。さらに、セクトの拡大は絶えざる問題となっています。

文化の領域を簡単に考察したので、次に、社会の領域に目を向けます。ここでは大規模な移住の現象が、出身地を離れて都会に向かうよう人々を促しています。そこから、都市、国家、大陸の民族分布が変化しています。したがって、現代社会にはかつて前例のないような文化の混合と、そこから生じる汚職、生命の基本的基盤の喪失、価値観の低下、人間的きずなの希薄化が生まれています。こうした過程の中で、文化はきわめて流動化し、伝統をますます隅に追いやります。この伝統には、宗教と、その歴史感覚と個人のアイデンティティを保つ客観的な役割が含まれます。社会の領域とかかわるのが、いわゆるグローバル化の現象です。グローバル化を理解するのは容易ではありません。キリスト信者にはいっそうの識別が要求されます。グローバル化は、経済的・生産的側面だけを考察するなら、よくない現象です。しかし、グローバル化を積極的な意味で成長の機会と考えることもできます。グローバル化により、人類は新たな形の連帯をはぐくみ、すべての人にとって善となるように、発展を共有する新たな形を築くことができるからです⁽²³⁾。こうした状況の中で、新しい福音宣教は、教会の宣教を南北ないし東西の枠組みによってではなく、過去の宣教活動の地理的範囲を超える活動としてとらえることを可能にします。現代では、五大陸のすべてが宣教地です。わたしたちは皆、信仰が存在しない領域を、信仰離れとしてではなく、信仰と出会っていないこととして理解しようと努めるべきです。かつての宣教活動の範囲を超えるとは、社会構造の混合・再構築（それはほとんどすべての地域に見られる現象です）から生じる出会いのあらゆる瞬間に、神への問いを示すことができるということなのです。

諸文化の混合の進展を背景としているのが、第3の大きな領域であるマスメディアです。マスメディアは個人生活と集団意識にますます影響を与えています。マスメディアは現代の教会に大きな可能性を与えると同時に、最大の課題ともなっています。マスメディアの使用は当初、産業社会に限られていましたが、今では発展途上国の大部分にも影響を及ぼしています。今日、マスメディアとデジタル文化の影響を受けない地域はありません。マスメディアは急速なしかたで公共生活と社会的交流の「広場」となりました。マスメディア文化の広まりが利益をもたらすことは間違いありません。この利益には、情報収集の可能性、知識・意見交換・連帯の新たな形の機会の形成、「世界文化」を構築する力があります。「世界文化」は、価値の共通の遺産と、思想と表現の発展をもたらします。しかし、こうした可能性には、危険もあります。メディア文化が極端な形をとる場合にそれが現れます。個人の利己的欲求へのこだわり、人間関係と社会関係の感情的要素の強調、経験と考察の客観的価値の喪失（経験と考察は多くの場合、個人の感情の確認に格下げされます）、生活の道徳的・社会的次元の軽視（他者は自己の鏡ないし観客となります）、最後に、はかない流行と現在の瞬間と見てくれを中心とした文化の形成です。こうした社会は過去の記憶と未来への感覚をもてなくなります。この領域において、新しい福音宣教は次のことを意味します。わたしたちは、日々生活する「新しいアレオパゴス」で大胆に行動しなければなりません。そして、キリスト教の遺産が、教育と知識において、キリスト教的伝統に守られながら、ポストモダンの領域において役割を果たせるようにするための手段を見いださなければなりません⁽²⁴⁾。

教会の宣教活動を必要とする第4の領域は、経済です。多くの教皇の教導職は、多くの機会に、南北世界の間に存在する資源の獲得と配分の不均衡と、被造物の破壊を非難してきました。現代の経済危機は、諸国家間の公正な関係を築くためにグローバル市場における規則を作る際、物理的な力を用いることの問題を示しています⁽²⁵⁾。貧困をはじめとした問題をマスメディアはあまり報道しませんが、教会はこの問題をいっそう自覚し、解決のための具体的な対応を行わなければなりません。

第5の領域は科学・技術研究です。科学・技術研究は絶えず驚異的なしかたで発展しています。わたしたちは皆、日常生活においてそこから利益を得、またこの利益にますます依存しています。その結果、科学技術は現代の新た

な偶像となる恐れがあります。デジタル化し、グローバル化した世界の中で、科学が新たな宗教とみなされる可能性があります。わたしたちは、たとえ答えが部分的で完全に満足できるものでないと分かっているにもかかわらず、真理と意味に関する問いは科学から得られると考えるのです。技術自体が哲学となることによって、新しい「グノーシス（知識）」が生まれます。そこでは生活の非現実的な構造から知識と意味が引き出されるからです。ますます増大するこうした新しい宗教は、結局のところ、宗教的実践を、幸福とすぐに満足を得るための治療に変えます。

最後に第6の領域は、市民生活と政治生活です。第二バチカン公会議以来生じた問題は巨大なものだといえます。西洋世界を2つのブロックに分裂させた共産主義の終焉は、信教の自由を促進し、古来の教会を再建する機会を与えました。アジアやイスラーム世界から、国際政治における新しい経済・政治・宗教勢力が生まれています。そこから、前例のない未知の状況がもたらされました。この状況は豊かな可能性をもつとともに、さまざまな危険と、支配・権力への誘惑をはらんでいます。この領域において、福音を次の取り組みをもって伝えなければなりません。(一) 平和への務め。(二) 諸国民の発展と解放。(三) 国際的・国内的統治形態の改善。(四) 諸文化・諸宗教による、傾聴、共生、対話、協力の構築。(四) 人権、国民全員、とくに少数者の保護。(五) 社会の弱者への支援。(六) 被造物の管理と地球の未来のための取り組み。

新たな状況に直面するキリスト者

7 こうした状況に対して、はじめは混乱と恐れを抱きがちです。移行期は、わたしたちのアイデンティティと信仰の基盤を揺るがすからです。しかし、教皇ベネディクト十六世がしばしば述べる、次の呼びかけに従うべきです。状況を批判的に識別し、キリスト者に与えられた希望の光で状況を見直さない⁽²⁶⁾。キリスト者は、希望の意味を学び直すことにより、自分たちが出会い、経験し、対話する人々に何を与えることができ、何を分かち合うことができ、堅忍をもたらす希望をどのように示せばよいかを見いだします。わたしたちを対話へと招く新たな領域は、自分の生き方、考え方、価値観、伝達手段を批判的に見直すことを求めます。同時にそれは現代のキリスト教の自己評価にも役立ちます。キリスト教は、起源から始めて、絶えず自らを理

解することを学ばなければならないからです。

新しい福音宣教の特徴と力を見いだしたいなら、以上述べた生活の領域を考察し、そこで何が起きているかを見つめ、初めに感じた恐れに打ち勝つにはどうすればよいかを知らなければなりません。それゆえ、「新しい福音宣教」は、地域教会において、希望の福音を実際に伝えるために、以上の領域を評価する計画を立てることです。こうして教会は、これらの問題を受け止め、ますます愛の文明を築く者となることによって、自らを築き上げるのです。

「新しい福音宣教」はこれらの諸問題との関連で、神への問いを勇気をもって示すことでもあります。こうして教会の宣教の特別な性格を実現し、キリスト教の世界観が歴史の中の大きな問題にこれまでにないしかたで光を当てることを示すのです。新しい福音宣教はわたしたちを招きます。これらの領域と対話しなさい。自分の共同体や組織に閉じこもるのではなく、問題を受け止めて、現象に参加し、内側からこれらの領域で語り、あかししなさい。これが現代世界におけるキリスト者の「あかし」(martyria)です。それは、人間生活から神を排除しようとする、現代の戦闘的な無神論や極端な世俗主義とも対話することを含みます。

このことと関連して、「新しい福音宣教」のために、教会は、すべてのキリスト者と一致して、福音のメッセージの預言的・変革的力を世に共通にあかしする努力を説得力のあるしかたで行わなければなりません。正義、平和、共生、被造物の管理は、この数十年間のエキュメニズムの特徴となってきました。キリスト者はともに、これらのことがらが、人々の生活における神への問いにこたえるための場であることを世に示すことができます。実際、これらの場は、御子イエス・キリストのうちにわたしたちに語られた愛のことばの光に基づいて、初めて真の意味をもつのです。

「新しい福音宣教」と靈性

8 現代人の問題との関連で神への問いを示す努力は、宗教と靈性への欲求というテーマへとわたしたちを導きます。こうした欲求は、若者から始めて、ますます強まっています。これまで考察した領域の諸問題は、当然、人々が宗教について語り、宗教を実践する方法に影響を及ぼします。カトリック教会もこの現象の影響を受けています。それは福音宣教の手段と機会ともなります。若者の国際的な集会、巡礼所への巡礼、運動団体の隆盛は、宗教的感

覚の継続を示すしるしです。このことと関連して、「新しい福音宣教」のために、教会は聖霊の働きのしるしを見分け、人々を導いて聖霊の示すことを教えなければなりません。そのために「キリストの満ちあふれる豊かさになるまで」(エフェソ4・13) 信仰において成熟しなければなりません⁽²⁷⁾。聖霊が生み出した最近のグループに加えて、伝統的なものも新しいものも含めた奉獻生活も新しい福音宣教において大きな役割を果たします。キリスト教の二千年の歴史の中で、偉大な宣教運動は、福音の徹底した性格から生まれる生活形態と結びついてきたからです。

このことと関連するのは、偉大な宗教伝統、とくに東洋の宗教伝統との対話です。教会はこの対話を数十年前に始め、深めてきました。諸宗教対話は、他の宗教において宗教的な問いがどのように考えられているかを学び、比較するためのよい機会です。それは、カトリック教会が、キリスト教信仰が人間の宗教的感覚に耳を傾け、こたえる方法に関する理解を深めることを可能にします。

「教会であること」の新しいあり方

9 教会の宣教の新たな状況は、次のことを理解させてくれます。つきつめていえば、「新しい福音宣教」とは、現代の絶えず変化する社会・文化状況の中で「教会である」ために、福音宣教の新たな方法を見いださなければならないということです。世界を「キリスト教国」と「宣教地」に二分する伝統的な考え方は、明確ではありますが、今や限界があり、単純すぎ、現代の状況に当てはまらず、したがって現代のキリスト教共同体を築く上での基準として使えないと考えられています。むしろ、キリスト教的な生活と実践が、「教会であること」の新たなモデルを作るための考察を導く必要があります。この新しいモデルは、党派主義や「市民宗教」となる危険を避け、イデオロギー闘争後の現代世界の中で、教会が自らの宣教的性格を保ち続けることを可能にします。いいかえると、さまざまなモデルの中でも、教会を「家庭教会」そして「神の民」と考え続ける必要があります。少数者であり、差別されているところでも、教会は人々と日常生活に近づき、いのちをもたらす福音のメッセージを伝える力を失ってはなりません。教皇ヨハネ・パウロ二世がいうとおり、「新しい福音宣教」は、人間社会のキリスト教的構造と、キリスト教共同体の構造そのものを造り直すことです⁽²⁸⁾。それはまた、教会が「社

会のただ中に生き」⁽²⁹⁾ 続け、人々の生活を来るべき神の国へと導く助けとなります。

識別を行う上で、東方カトリック教会と、今なお潜伏、迫害、排斥、民族的・イデオロギー的・宗教的不寛容のもとで過ごしているキリスト教共同体は大いに助けとなります。彼らの信仰と堅忍と勇気と揺るがぬ希望のあかしと、一部の司牧的実践の洞察は、過去の栄光をもちながら、今は試練と困難を経験しているキリスト教共同体が分かち合うべきたまものです。少数者として信仰を生きることになじみのない教会にとって、ここで述べたキリスト教共同体の体験に耳を傾けることは、必ずためになります。新しい福音宣教に必要な信頼をくみとることができるからです。

西洋で新しい福音宣教を行うべき時が来ています。洗礼を受けた多くの人が非キリスト教的生活を送り、信仰とかかわりをもち続けてはいても、信仰についてあまり知らない人が増えているからです。信仰を諷刺したり、ある種の文化が、信仰を敵視しないまでも、無視することがしばしばです。「かつて宗教とキリスト教的生活が盛んで、生き生きとした活発な信仰共同体を生み出すことのできたすべての国や国民は、現在、広がる一方の宗教的無関心、世俗主義、無神論によって厳しい試練を受け、ときとして根本的に変えられています。とくに、第一世界と呼ばれているこれらの国や国民は、たとえ恐ろしい状態の貧しさや悲惨と共存していても、経済的充足と消費主義の中で、『まるで神が存在しないかのように』暮らす生活を促し、広めています」⁽³⁰⁾。

キリスト教共同体は、文化的・社会的変化のために教会が必要とする刷新を責任と勇気をもって行う方法を知らなければなりません。福音をのべ伝えなさいという命令を基準としながら、新しいモデルを作成し、実施する方法も知らなければなりません。

最初の宣教と司牧的配慮と新しい福音宣教

10 福音書の終わりに述べられた宣教命令（マルコ 16・15 以下、マタイ 28・19 以下、ルカ 24・48 以下、使徒言行録 1・8）は、完全に実行されたとはとてもいえません。それは始まったばかりです。教皇ヨハネ・パウロ二世はいます。「信者に対する司牧的活動や新しい福音宣教と、特別な宣教活動との境界線を明確に定義づけることはできませんし、またそれらの間に壁を作ったり、それぞれを水ももらさぬような個室の中に閉じ込めるといようなこ

とも考えられません。……たとえば、新しい福音宣教という困難な仕事に取り組んでいる伝統的なキリスト教国の教会は、自国のキリスト者ではない人々についての深い関心をもたなければ、他の国々や他の大陸のキリスト者でない人々に対して宣教者となることはできないということを、以前よりも明確に理解するようになっていきます。ですから、内に向かう宣教活動は確かなしるしであり、外に向かう宣教活動への刺激となります。これは、その逆に対しても同じことがいえるのです」⁽³¹⁾。キリスト者であること、「教会であること」は、宣教的であることです。人は宣教的であるか、宣教的でないかのいずれかです。自分の信仰を愛するとは、その信仰をあかしすることです。信仰を人々に伝え、人々が信仰にあずかるのを可能にすることです。宣教の熱意がないというのは、信仰への熱意がないということです。反対に、信仰は、それを伝えることによって強められます。教皇の新しい福音宣教についてのことばを、直接的な問いにいいかえることができます。「わたしたちは信仰を伝え、キリスト者でない人を信仰に導くことに興味があるだろうか」。「わたしたちは本当に宣教的な心をもっているだろうか」。

新しい福音宣教は、教会の根本的使命、アイデンティティ、存在理由をあらためて実践しようとする教会の計画につけられた呼び名です。したがって、それは明確に画定された地域に限られたことではなく、現代において、現代のために、使徒の遺産を説明し、実践する方法なのです。新しい福音宣教の計画の中で、教会は現代世界に自らの独自のメッセージをもたらそうと望みます。すなわち、イエス・キリストにおいて始まった神の国をのべ伝えます。いかなる教会もこの計画から除外されません。古代からあるキリスト教教会は、信仰を実践しなくなった多くの人の問題に取り組まなければなりません。若い教会は、インカルチュレーションの過程を通して、福音を日常生活にもたらす取り組みを行い続けなければなりません。インカルチュレーションは、文化を清め、高めるだけでなく、何よりも文化を福音の新しさへと開くことです。総じていえば、すべてのキリスト教共同体は司牧計画にあらためて取り組まなければなりません。司牧はますますむずかしくなり、惰性に陥り、本来の目的を伝えられなくなる危険があると思われるからです。

新しい福音宣教は宣教と同義です。それは、新しく出発し、限界を超え、地平を広げることを求めます。新しい福音宣教は、自己満足や、自己退却や、現状維持の精神や、司牧計画はただこれまでしたことを行うことだけだとい

う考え方の反対です。すでに刷新を始めている一部の地域教会は、はっきりといます。今こそ、教会がすべてのキリスト教共同体に呼びかける時です。計画と活動の宣教的性格に基づいて、自らの司牧活動を評価せよと (32)。

質問

現代のキリスト教共同体は教会と社会の大きな変化を経験しています。

- 1 わたしたちの地域教会におけるこうした変化の主要な特徴は何ですか。
- 2 教会は、「社会のただ中に生きる」人々の生活に参加するという宣教的使命をどのように果たしていますか。
- 3 新しい福音宣教は、すでに行われた最初の宣教や司牧計画をどのように活性化してきましたか。新しい福音宣教は、どのようなしかたで地域教会の生活の中で生じた疲労に打ち勝つ助けとなりましたか。
- 4 新しい福音宣教という観点から、地域教会の現状を評価して、どのようなことを見いだしましたか。

世界は大きな変化を遂げつつあり、それはキリスト教にも新たな状況と問題をもたらしています。第1章では、この変化の影響を受けた6つの領域を考察しました。(一)文化(世俗化)、(二)社会(諸民族の融合)、(三)マスメディア、(四)経済、(五)科学技術、(六)社会生活と市民生活です。ここではあえて一般的な考察を行いました。

- 5 地域教会の中でこうした変化によって与えられた特別な影響は何ですか。
- 6 これらの領域は、地域教会の生活とどのようにかかわっていますか。どのような影響を与えていますか。
- 7 これらの領域はどのような問題を生じましたか。これに対してどのようにこたえましたか。
- 8 現代、人々との対話の中で神への問いを示す際の、主要な障害、取り組むべき問題は何ですか。そこからどのような結果が生まれましたか。

宗教の領域には特別な関心が向けられます。

- 9 人々の宗教体験の中で、どのような変化が起きていますか。
- 10 霊性（スピリチュアリティ）、宗教的欲求において、どのような側面が見られますか。新しい宗教的伝統が生まれていますか。
- 11 キリスト教共同体は宗教の領域の変化から影響を受けていますか。おもな影響は何ですか。それが宣教の新たな機会となっていますか。

新しい福音宣教において、教会は、新たな領域で宣教使命を果たし続けるために、考え方を転換する必要があります。

- 12 地域教会の中で新しい福音宣教を行った方法について述べてください。
- 13 新しい福音宣教の特徴である大胆さを示しましたか。教会生活と司牧生活の中でこうした大胆さが促したことはありますか。
- 14 教会生活と教会活動のどのような側面がこうした大胆さを必要としていますか。
- 15 地域教会は、教皇ヨハネ・パウロ二世の「新たな熱意と方法と表現をもって、新しい福音宣教を行う」という呼びかけをどのように受け止め、実施しましたか。
- 16 大陸別シノドスは、新しい福音宣教のための計画を作成する助けとなりましたか。

第2章 イエス・キリストの福音をのべ伝える

「全世界に行って、すべての造られたものに福音をのべ伝えなさい」(マルコ 16・15)。

キリストとの個人的出会いと交わりが、信仰を伝える目的である

11 弟子たちが主から受けた宣教命令(マルコ 16・15 参照)は、福音をのべ伝え、教えるようにとはっきりと述べます(マタイ 28・20「あなたがたに命じておいたことをすべて守るように教えなさい」)。使徒聖パウロは自分を「神の福音のために選び出された使徒」(ローマ 1・1、一コリント 1・17)と呼びます。それゆえ、教会の務めは、「福音をのべ伝えること」(Traditio Evangelii)です。「福音は、ユダヤ人をはじめ、……信じる者すべてに救いをもたらす神の力だからです」(ローマ 1・16)。福音は究極的には、イエス・キリストと同じです(一コリント 1・24 参照)⁽³³⁾。わたしたちは福音というとき、単に福音書ないし一連の教えのことを述べるではありません。福音はそれ以上のものです。福音は、生きた、力のあることばです。それは自らが述べることを果たします。福音は信仰簡条や道徳的なおきての体系でもなければ、政治的計画でもありません。それはイエス・キリストというかたです。人となられた、決定的な神のことばです⁽³⁴⁾。福音とは、イエス・キリストの福音です。しかし、福音はイエス・キリストを内容としているだけではありません。そればかりか、聖霊を通して、イエス・キリストが福音の宣教と伝達の推進者また中心ともなられます。したがって、信仰の伝達の目的は、聖霊のうちに、イエス・キリストと個人的に出会うことであり、そこから、イエス・キリストの父であり、わたしたちの父であるかたを経験させることです⁽³⁵⁾。

信仰を伝えるとは、あらゆる場所と時間において、一人ひとりの人がイエス・キリストと個人的に出会うための条件を作ることです。イエス・キリストというかたとの信仰における出会いは、このかたとかかわり、(聖体のうちに)「このかたを思い起こし」、聖霊の恵みによって、イエス・キリストの思いを抱くことです。教皇ベネディクト十六世がいうとおり、「人をキリスト信者とするのは、倫理的な選択や高邁な思想ではなく、ある出来事との出会い、

ある人格との出会いです。この出会いが、人生に新しい展望と決定的な方向づけを与えるからです。……神がまずわたしたちを愛しました(一ヨハネ4・10参照)。ですから、今や愛はもはや単なる『おきて』ではありません。神は、愛のたまものをもってわたしたちを引き寄せてくださいました。愛とは、この愛のたまものにこたえることなのです」⁽³⁶⁾。教会は、福音をのべ伝え、キリスト教信仰を伝えるという務めを果たすことによって、自らを実現します。

一人ひとりの人は、こうした個人的出会いによって、御子と御父の関係にあずかり、聖霊の力を体験することが可能になります。信仰を伝えること、福音宣教を行うことの目的は、「このキリストによってわたしたち両方の者が一つの霊に結ばれて、御父に近づくこと」(エフェソ2・18)です⁽³⁷⁾。これがキリスト教の神の新しい要素です。このように考えるなら、信仰を伝えるとは、信仰を思い、祝い、生き、祈るための条件を作り出すことです。簡単にいえば、それは教会生活に参加することです⁽³⁸⁾。このような信仰の伝え方は、教会の聖伝に基づきます。このことは『カトリック教会のカテキズム』と『カトリック教会のカテキズム要約』に述べられます。ともに新しい福音宣教というテーマを取り上げて、それを励まし、説明し、あらためて示します⁽³⁹⁾。

教会は自らが生きる信仰を伝える

12 信仰の伝達は、複雑かつダイナミックな過程です。この過程はキリスト者の信仰と教会生活全体とかがわかります。自らが信じても生きてもないことを伝えることはできません。しっかりとした成熟した信仰を示すしは、それを他の人に自然に伝えられることです。キリストが「これと思う人々を呼び寄せられると、彼らはそばに集まって来た。そこで、十二人を任命し、使徒と名づけられた。彼らを自分のそばに置くため、また、派遣して宣教させ……るためであった」(マルコ3・13、14)。福音をのべ伝えることを初めて可能にするのは、イエスとともに「いて」、イエスとともに聖霊のうちに御父を体験することです。よいこと、すばらしいこととして生きたことをのべ伝え、分かち合いたいという促しを「感じる」ことです。

宣教の責務を果たすのは、一人の人でも選ばれた少数の人でもありません。それは確信をもって信仰の招きにこたえるすべての人に与えられたたまもの

です。信仰の伝達は、グループや特別に任命された人に命じられた特別な活動ではありません。それはすべてのキリスト者、全教会の体験です。教会は宣教活動を通じて自らのあるべき姿を再発見します。教会とは、聖霊によって一つに呼び集められた民です。聖霊はわたしたちを数えきれない身分から呼び集め、キリストがわたしたちの間におられることを体験させ、父である神を見いださせます。「信徒は今日、キリストの預言職に参加することによって、教会のこの働きに全面的にかかわっています。とくに生活が各人と社会全体に課す問題と期待に対して、信仰がどのように有効なこたえであるかをあかしすること——すべての人が多少の意識をもって予想し、求めている——は信徒の責任です。このことが可能となるのは、信徒が自分自身のうちに見いだされる福音と生活の間の遊離をどのように乗り越え、家庭や職場や社会といった日常の活動の中で、福音の影響と力によってもたらされる生活への総合的な取り組みをどのように始めるかによります」(40)。

信仰を伝えるという、教会の基本的な活動は、キリスト教共同体の模範と活動の基礎となります(41)。福音をのべ伝え、広めるには、教会が、キリスト教共同体が信仰生活の基礎的要素を深く示せるようにできるかぎりのことをすることが必要です。信仰生活の基礎的要素とは、愛のわざ、あかし、宣教、祭儀、傾聴すること、そして分かち合いです。福音宣教を次のような過程と考えなければなりません。教会は聖霊に促されて、全世界に福音をのべ伝え、広めます。その際、教導職の教えに従います。教導職の教えは次のように要約されます。「愛に促されて、福音宣教はこの世のあらゆる秩序に浸透し、それを変革する。諸文化を受け入れ、刷新する。人々の間で、キリスト者のあるべき姿の基礎となる、新しい生き方をあかしする。福音宣教は福音を公にのべ伝える。初めは人を回心へと招く告知によって。次いで、信仰教育とキリスト教入信の秘跡を通じて、キリストへと回心した者だけでなく、キリストに従う道に立ち帰った者を、信仰とキリスト教的な生活へと導き入れ、彼らとともにキリスト教共同体に組み入れる。同様に、福音宣教は、継続的信仰教育(説教やその他のカテケージス)、秘跡、愛のわざを通じて、信者の交わりのたまものを深める。そして、彼らをつねに教会の宣教のわざへと導く。教会はすべてのキリストの弟子を、ことばと行いを通じて全世界に福音を告げ知らせるよう遣わすからである」(42)。

神のことばと信仰の伝達

13 第二バチカン公会議の開催以来、カトリック教会は次のことを再発見しました。信仰の伝達はキリストとの個人的出会いです。この出会いは、聖霊の導きのもとで、聖書と教会の生きた聖伝という手段によって行われます⁽⁴³⁾。こうして教会は聖霊によって絶えず生み出され続けます。同様に、新しい世代の人は、それぞれがキリストと個人的に出会うたびごとにキリストのからだによって糧を与えられます。だからこの出会いは感謝の祭儀のうちに完全に表されるのです。信仰を伝えるというわざが中心的であることは、最近開催された2回のシノドスでも再評価され、強調されました。すなわち、聖体についてのシノドスと、教会生活と宣教における神のことばについてのシノドスです。この2つのシノドスにおいて、教会は、自らのアイデンティティを支える深くダイナミックな過程を考察し、十分自覚するよう問いかけました。教会は、自らが生き、祝い、告白し、あかしする信仰を伝えるのです⁽⁴⁴⁾。

こうした自覚は、教会が信仰を伝える際に現実の責務と問題に直面しなければならないことも含みます。神の民である教会は、自らに属する者のうちに、神のことばの役割と、それが神の人類に対するみ心と救いの計画を示す力をいっそう自覚させなければなりません⁽⁴⁵⁾。典礼において神のことばを告げることについていっそうの配慮を行い、説教の務めをますます自覚し、重視しなければなりません⁽⁴⁶⁾。教会の宣教において神のことばが果たす役割を考える際にも、いっそうの注意と自覚と信頼をもつことが必要です。それは、実際に救いのメッセージを告げる時にも、諸文化に耳を傾け、対話を行う反省的な時にもいえます⁽⁴⁷⁾。

シノドス教父は、将来の世代に神のことばを告げることについて特別な関心を注ぎました。「わたしたちはしばしば若者のうちに、神のことばを進んで聞こうとする開かれた姿勢と、イエスを知ろうとする心からの望みを見いだします。……若者の世界に関心を向けるには、はっきりとしたメッセージを伝える勇気を必要とします。若者が聖書を信頼し、聖書に親しめるよう、助けを与えなければなりません。それは、聖書が歩むべき道を示す羅針盤となりうるためです。若者は証人と教師を必要とします。これらの人々は、若者とともに歩みます。そして、福音を愛し、福音をとくに同世代の若者に分かち合う、真正な信頼の置ける伝達者となるよう教えます」⁽⁴⁸⁾。同様に、シノドス教父

はキリスト教共同体に呼びかけました。「さらに、キリスト教入信の過程を開かれたものとする必要がある。人々は、神のことばを聞くことや、感謝の祭儀、また共同体の中で経験する兄弟愛を通じて、いっそう成人としての信仰をもつことができるようになる。人の移動と移住の現象から生じる新たな問題を考察すべきである。この現象は福音宣教の新たな展望を開くものである。なぜなら、移住者は福音宣教を受けることを必要とするだけでなく、自ら福音宣教を行う者となることができるからである」(49)。

シノドス総会はキリスト教共同体をはっきりと招きました。神のことばをのべ伝えることがいかに信仰を伝えることの基盤であるかを考えるようにと。「それゆえ、わたしたちは神の国の到来のために、みことばを告知知らせることの緊急の必要性とすばらしさをつねに再発見しなければなりません。キリストご自身が神の国をのべ伝えたのです。……わたしたちは皆、キリストの光を人間のいるあらゆるところで輝かせなければならないことを知っています。家庭から学校、文化、職場、余暇、その他、社会生活のさまざまな分野に至るまでです。慰めのことばを告げなければならないのではありません。むしろ、突き崩し、回心を呼びかけ、新しい人類の繁栄をもたらすかたと出会うための道を開くことばを告げることが必要です」(50)。

信仰の教育学

14 信仰の伝達はことばだけで行われることではありません。それは神との祈りの関係を、行いを伴う信仰を必要とします。典礼と、その適切な教育的要素は、こうした祈りの関係を教える上で決定的な役割を果たします。なぜなら、教えるのは神ご自身であり、祈り方を教える真の教師は聖霊だからです。

信仰教育をテーマとしたシノドス第4回通常総会は、カテキスタの増加と献身に加えて、カテケージスが聖霊のたまものであること、教会は人々をキリストとの個人的出会いへと導く信仰伝達の方法を編み出してきたことを認めました(51)。こうした方法はさまざまなしかたで、個人の能力、社会的グループとの関係、態度、問いかけ、探究とかかわります。こうした方法はインカルチュレーションの適切な手段です(52)。方法の増加と多方面への発展による混乱を避けるため、教皇ヨハネ・パウロ二世はシノドス教父の考察を取り上げ、原則を示しました。カテケージスの方法の多様性は、活力とそれらが

互いに相補い合うことを表すしるしです。そのために、それらの方法は基本法則を内面化してそれに従うことができなければなりません。基本法則とは、同じ愛の感情をもって、神に対して守るべき誠実と人間に対して守るべき誠実の法です⁽⁵³⁾。

同時に、要理教育についてのシノドスは、体系的、総合的、有機的、位階的に信仰を伝えることを目指した過去のよいものを失わないことに留意しました⁽⁵⁴⁾。したがって、シノドスは信仰を伝える二つの基本的な手段をあらためて示しました。カテケージスとキリスト教入信の過程です。こうして教会は、洗礼志願者と入門者の心に信仰の種をまいて、彼らが特別に実り豊かな体験を行えるようにすることによって、積極的に信仰を伝えます。カテケージスを通じて芽生え、成長して、教会によって受け入れられた信仰告白(traditio)は、さまざまな文化の価値によって豊かにされた後、再び与えられます(redditio)。こうしてキリスト教入信の過程は本質的にカトリック性の成長の中心となり、教会刷新の苗床となります⁽⁵⁵⁾。

二つの手段(カテケージスとキリスト教入信の過程)をあらためて強調するなら、「信仰の教育学」⁽⁵⁶⁾と呼ばれるものに形を与えなければなりません。「信仰の教育学」の目的は、信仰の伝達を含むまでに、カテケージスの概念を拡大することです。要理教育に関するシノドス以来、カテケージスは、キリスト教共同体が信仰を受け入れ、理解し、祝い、生き、伝えるのと同じしかたで福音を伝える過程となりました⁽⁵⁷⁾。「キリスト教入信の過程に含まれる、包括的かつ体系的なカテケージスは、キリスト教入信の過程という時期と場合にのみ限定されてはならない。なぜなら、実際に、このカテケージスはキリスト教的生活のための教育だからである。このカテケージスは指導の要素を含むとはいえ、本質的にキリスト者であることの『基礎的要素』を考慮しているので、指導の要素を超える。一方それは、テーマを議論したり、神学研究となることを避ける。最後に、キリスト教入信の過程の一部であるために、このカテケージスは、信仰を生き、祝い、あかしする共同体への加入へと導く。こうしてカテケージスは、同時に入信と教育と指導を行うことになる。洗礼を受けていない成人のキリスト教入信の過程に含まれた豊かな要素は、他の形のカテケージスに靈感を与えるために役立つであろう」⁽⁵⁸⁾。

したがって、キリスト教入信の過程は、最近教会が信仰の伝達に形を与えるために採用したモデルとなりました。キリスト教入信の過程が第二バチカ

ン公会議であらためて強調されたために⁽⁵⁹⁾、それは福音宣教のためのカテケーゼの多くの計画の再編と刷新のために用いられました。『カテケーゼ一般指針』は、こうしたカテケーゼに含まれる重要な要素を要約しながら、多くの地域教会がこのモデルを用いて信仰の告知を再編した理由を示します。実際、これらの地域教会は、「洗礼後の信仰教育」⁽⁶⁰⁾と呼ばれる新しいモデルを生み出しました。「洗礼後の信仰教育」は、全教会に、キリスト教入信の過程と、キリスト教共同体全体の責任を絶えず思い起こさせてくれます。その結果、この新しいモデルはキリストの過越の神秘を教会の全計画の中心に置きます。それはインカルチュレーションを教育の第一段階とします。そこからそれが真に適切な養成過程であることを示します⁽⁶¹⁾。

信仰の伝達の担い手である地域教会

15 信仰の伝達の担い手は全教会です。全教会は地域教会のうちに示されます。地域教会では、福音の告知、伝達、生きた経験が行われます。さらに地域教会は、このような務めを果たすだけでなく、福音の告知と信仰の伝達が生み出すものでもあります。最初のキリスト教共同体の経験に見られるとおりです（使徒言行録2・42 - 47参照）。聖霊は信じる者を集めて、信仰を熱心に生きる共同体とします。この信仰は、使徒の教えを聞くこと、感謝の祭儀を行うこと、神の国をのべ伝えるために惜しみなく奉仕する共同体生活によって深められます。第二バチカン公会議は同じことばを、すべてのキリスト教共同体の根本的なあり方を示す際に用いました。「キリストのこの教会は信者の正当なすべての地方的集まりの中に真実に存在するのであって、その牧者たちに一致しているこれらの集まりそのものも、新約の中で教会と呼ばれている。これらの集まりは聖霊のうちに大きな確信をもって、自分の場所において神から召された新しい民である（一テサロニケ1・5参照）。これらの教会の中で、キリストの福音の宣教によって信者が集められ、『主の食物と血によって、兄弟たちの集まり全体が一つのからだとして堅く結ばれる』ために主の晩餐の秘義の祭儀が行われる」⁽⁶²⁾。

わたしたちの教会生活は、信仰の伝達、総じて宣教を、この公会議の文言の具体的表現また理想的実現として考えることによって、恩恵を得ることができます。最近の数十年間、多くのキリスト信者が自然かつ自由に宣教と信仰の伝達の務めを引き受けました。この経験は聖霊が地域教会のキリスト教

共同体に与えたまことのたまものです。司牧活動が信仰の伝達を伴うことによって、教会はさまざまな地域の社会的状況に参加し、教会の日々の生活を生かしている自らの役割と奉仕の豊かさを示すことができます。司教を囲んで、司祭、両親、奉献生活者、カテキスタ、そして全共同体は、おのおのの使命と権限に従って役割を果たします⁽⁶³⁾。

しかし、こうしたたまものと積極的な期待とともに、新たな状況とさまざまな事態の推移から生じた問題に地域教会が直面していることにも注目しなければなりません。司祭の不足は、望みどおり効果的に活動を行うことができなくしています。多くの家庭に一般的に見られる疲弊した状態は、両親の役割を限定しています。福音宣教活動に共同で参加しないことは、キリスト教共同体の影響を限られたものとするだけでなく、この重要で根本的な活動を行う責任の大半をカテキスタにだけ負わせる危険があります。カテキスタはすでにゆだねられた課題の負担と、それを一人で行う孤独を感じているのです。

初めに述べたとおり、文化的状況と地域教会の多くのキリスト教共同体の一般的に疲弊した状態は、信仰の告知と伝達と指導を危険にさらしています。使徒聖パウロの問いかけ——「のべ伝える人がなければ……どうして信じられよう」(ローマ10・14)——が現代にも本当に当てはまります。しかし、このような状況の中でも、聖霊の恵みを目にすることができます。さまざまなグループや運動団体が信仰を伝える務めに新たな要素と活力を与えているからです。同時に、こうした人々も、実りをさらに広め、最初の熱意を失ったかのように思われるカテケージスと信仰伝達の方法にエネルギーを吹き込むよう求められます。

宣教の方法としての弁明

16 それゆえ、現在の状況から考えて、地域教会はあらためて聖霊に信頼するよう招かれています。聖霊は地域教会を導いて、喜びと力をもって、イエスが弟子たちにゆだねた根本的な使命を再び果たすことができるようにしてくださいからです。その使命とは、福音をのべ伝えること(マルコ16・15参照)、そして、神の国を宣教することです(マルコ3・15参照)。キリスト信者全体はイエスの命令に従う責務を心から意識しなければなりません。そして、おのおのの召命に従って呼びかけにこたえるために聖霊に導いていた

だかなければなりません。信仰を選び、キリストに従うことが困難になり、(公然と問題にされたり、反対されはしないまでも) 人々からあまり理解されない時代にあって、共同体と一人ひとりのキリスト信者はいっそう力強く使命を果たさなければなりません。使命とは、イエス・キリストの模範に従って福音の証人また使者となることです。

使徒聖ペトロもこのような行動様式を勧めています。聖ペトロはわたしたちを招きます。「あなたがたの抱いている希望について」(一ペトロ3・15) 説明し、弁明しなさい。聖霊は、わたしたちキリスト教共同体が、信仰の理由(logos)を要求する人に、信仰をあかしし、新たな応答(apo-logia)を行うための道を示してください。個人の刷新は世におけるわたしたちのあり方をいっそう明確にします。わたしたちはこの世にあってイエス・キリストが与えてくださった希望と救いを生きるからです。キリスト者であるわたしたちは、「穏やかに、敬意をもって、正しい良心で」(一ペトロ3・15、16) こたえるしかたをあらためて学ばなければなりません。すなわち、キリストとの一致からもたらされる穏やかな力と、わたしたちの目指すのは米国で父である神と個人的に出会うことだという確信をもたなければなりません

(64)。

こうした行動様式は包括的なものでなければなりません。それは、思考と行動、個人の振る舞いと公のあかし、教育への関心と貧しい人への奉仕、すべてのキリスト信者が実生活と職場で行われる対話に参加し、この状況にキリストの与える希望をもたらすことを含みます。この行動様式は、熱意と信頼と自由をもって語る大胆さ(parresia)を反映すべきです。使徒たちの宣教(使徒言行録4・32、9・27、28参照)や、聖パウロのことばを聞いたアグリッパ王の姿に見られるようにです。「短い時間でわたしを説き伏せて、キリスト信者にしてしまうつもりか」(使徒言行録26・28)。

多くの人が「神が見いだせないことによる荒れ野、自分の尊厳や人生の目標が感じられない、心の空しさからくる荒れ野」で生きています。このような時代にあって、ベネディクト十六世はいます。「全教会とその牧者たちは、キリストのように、民を荒れ野から連れ出し、いのちの地、神の子との友愛、わたしたちにいのちを与える唯一のかた、あふれるいのちへと導くように努めなければなりません」(65)。

信仰の論理に従うなら、世は教会とキリスト教共同体のうちにこのように

行動する権利を見いだします⁽⁶⁶⁾。この行動様式は共同体として、また個人間で行われます。共同体全体と洗礼を受けた一人ひとりの個人による自己評価も必要です。教皇パウロ六世が述べるとおりです。「福音の、一般的かつ公共的な報知のほかに、一方の人からほかの人へと達する、別の福音の伝達様式がいつも是認されるべきですし、重要であり続けます。……よい知らせを人々の群れに告げることを迫られても、この宣言の様式が忘れられることがあってはなりません。人間人格の良心は、実際に他者から受けるユニークなことばそのものによって不思議にも動かされ、福音に触れるようになるのです」⁽⁶⁷⁾。

信仰の伝達が生み出す実り

17 信仰の伝達が目指すのは、教会を福音をあかす共同体とすることです。教皇パウロ六世は述べます。「信じる者の集まりであり、希望に生き、希望を伝える兄弟的愛の共同体である教会は、信ずべきこと、希望すべきこと、愛の新しいおきてについて絶えず傾聴しなければなりません。教会は世俗社会のただ中に住む神の民であり、しばしば偶像の誘惑に遭います。主に立ち帰らせる『神の偉大なわざ』の宣言をつねに聞き、主によって新たに呼ばれ、一つに集められる必要があります。簡潔に言えば、福音をのべるにあたって、教会が新鮮さと熱意と力を保つためには、教会自身がつねに福音化される必要があるということです」⁽⁶⁸⁾。

いのちをもたらす福音の力のしるしとして教会の中で生み出される、この継続的な福音宣教の計画は、現代の諸問題にこたえることによって具体化されます。家庭は、いのちへと開かれ、希望する力をもって、まことの愛と分かち合いのしるしとならなければなりません。エキュメニカルな精神をもち、諸宗教と対話できる共同体を力強く築かなければなりません。貧しい人を教会の関心の中心に置く、社会正義と連帯への取り組みを勇気をもって支えなければなりません。ますますはっきりとした喜びをもって、司祭職と奉獻生活への召命へと自分の人生をささげなければなりません。信仰を伝える教会、「新しい福音宣教」を行う教会は、どんな状況においても、聖霊が教会を導き、教会、一人ひとりのキリスト信者、諸国民と文化の歴史を造り変えてくださることを示すことができます。

信仰の伝達をもたらすもう一つのことは、宣教活動にうんだことのしるし、

また結果として教会共同体の中に生じた不忠実とつまずきを非難する勇気です。そのほかにも次のような実りがあります。過ちを認め、受け入れる勇気。自分たちが絶えず救われなければならないことを自覚しながらも、イエス・キリストをあかしし続ける力。使徒聖パウロが教えるとおりに、わたしたちは自分の弱さのうちに、わたしたちを救ってくださるキリストの力を認めることができるからです（二コリント12・9、ローマ7・14以下参照）。悔い改めのわざ、清めへの努力、過ちの結果をつぐなおうとする意志。そして、「わたしたちを欺くことがない」希望への揺るがぬ信頼です。「わたしたちに与えられた聖霊によって、神の愛がわたしたちの心に注がれているからです」（ローマ5・5）。これらの実りはすべて、信仰を伝え、福音をのべ伝えることから生まれます。宣教は、世にイエス・キリストの福音をもたらすことによって、まず、キリスト信者と共同体に刷新をもたらすのです。

質問

近くにいる人、遠くにいる人も含めたすべての人に福音を伝え、分かち合うことの目的は、他の人にキリストを体験させることです。この目的が宣教の原動力でもあります。

- 1 わたしたちキリスト教共同体は、人々に霊的体験を行わせる場をどのように与えていますか。
- 2 わたしたちの信仰教育プログラムは、どの程度、単にキリスト教の真理を知的に理解することだけでなく、キリストの神秘と個人的に出会い、それと交わり、それを生きる体験をもたらすことを目指していますか。
- 3 現代の若者が望む霊的体験を与えることに関して、個々の教会はどのような対応を行っていますか。

神のことばと聖体は、人々にキリスト教信仰を体験させるための主要な方法また特別な手段です。

- 4 これまでの2回のシノドス通常総会（2005年、2008年）は、キリスト教共同体が教会の中で神のことばにいつそう深く耳を傾けるための助

けとなりましたか。感謝の祭儀の質を高める助けとなりましたか。

- 5 シノドスの実りとして、もっともよく受け入れられた要素は何ですか。シノドスがなお取り上げるべき考察と提案としてどのようなものがありますか。
- 6 神のことばを聞き、グループで話し合うことは、共同体のキリスト教的生活の共通の手段となっていますか。共同体は聖体（感謝の祭儀と聖体礼拝）の中心的重要性を意識し、聖体に基づいて生活と活動を行っていますか。

数十年間にわたって信仰教育（要理教育、カテケージス）が行われてきましたが、今や、とくにこの分野の教会活動を計画し実施する担当者の中に疲れが認められます。

- 7 わたしたちの教会におけるカテケージスの現状はどうなっていますか。
- 8 キリスト教共同体の中で行われるカテケージスを健全なものとするためにどのような努力を行っていますか。両親、祖父母、キリスト教共同体に、信仰を伝える責務を具体的にはっきりと自覚させるためにどのような努力を行っていますか。
- 9 文化は家庭が信仰を伝える役割をますます認めなくなっています。このような中で、信仰を伝える務めを果たすように両親を支え、励ます取り組みを行っていますか。

第二バチカン公会議にこたえて、多くの司教協議会はこの数十年、カテケージスの計画とテキストを改訂してきました。

- 10 この領域に関する現状はどのようになっていますか。
- 11 信仰の伝達に何かプラスになったことがありますか。もたらされた成果、また障害となったことは何ですか。
- 12 『カトリック教会のカテキズム』はカテケージスの再構築にどのような役割を果たしていますか。
- 13 個々のキリスト教共同体（小教区）、グループ、運動団体は、カテケージスができるかぎり教會的で、教会の他の人々と協力して行われるため

の努力をしていますか。

- 14 文化が大きく変化する中で、教会の要理教育において、信仰教育の機会が欠けていますか。あるいは信仰教育の機会をもっと増やすべきですか。
- 15 キリスト教共同体はキリスト教入信の過程を信仰教育プログラムまた信仰の伝達の基盤として用いていますか。

現代は教会が福音宣教の方法を刷新し、わたしたちの信仰と希望を進んで弁明することを求めています。

- 16 地域教会はキリスト教共同体にこの新たな課題を伝えることができたでしょうか。成果はありますか。必要な活動、また障害はどのようなものですか。
- 17 新たな宣教の緊急の必要性は共同体の司牧活動の恒常的な要素となっていますか。あるいは、この宣教を地域のキリスト教共同体と日常生活の中で行わなければならないという確信がもてなくなっていますか。
- 18 共同体全体だけでなく、個人も福音をのべ伝え、社会にいのちのたまものをもたらしていますか。その場合に個人が用いる方法と活動はどのようなものですか。成果は上がっていますか。
- 19 洗礼を受けた成人は自ら宣教を行うよう招かれているという自覚をもっていますか。このことに関してどのようなことが見られますか。

信仰の宣教と伝達はキリスト教共同体を生み出します。

- 20 信仰の伝達を通じて教会にどのような実りがもたらされましたか。
- 21 個々のキリスト教共同体はどれくらいこの実りを認め、支え、深めようとしていますか。不足している成果は何ですか。
- 22 宣教の障害、試練、つまずきとなっているものは何ですか。共同体はこれらの障害から霊的・宣教的刷新の機会を引き出すことを学んでいますか。

第3章 キリスト教的体験への導入

「だから、あなたがたは行って、すべての民をわたしの弟子にしてください。彼らに父と子と聖霊の名によって洗礼を授け、あなたがたに命じておいたことをすべて守るように教えなさい。わたしは世の終わりまで、いつもあなたがたとともにいる」(マタイ 28・19、20)。

キリスト教入信の過程、福音化の過程

18 社会と文化のさまざまな問題のただ中で福音を伝えることが、今日のキリスト教の課題です。教会の中で、状況は、人々を信仰に導き入れ、秘跡にあずからせるためにとるべき方法を反省し、再考させました。第二バチカン公会議で述べられたことば⁽⁶⁹⁾は、当時の多くのキリスト教共同体の望みを反映したものでしたが、今や多くの地域教会で現実となりました。公会議が挙げた多くの要素は、わたしたちが日常的に経験することの一部となっています。まず、キリスト教入信の秘跡を結びつける内的なきずながほとんど全世界で意識されるようになりました。洗礼、堅信、聖体は3つの別々の秘跡でなく、キリスト教的生活の誕生から成人に至る成長の過程の段階と考えられます。この過程は一般的な信仰への導入プログラムの一部をなします。今やキリスト教入信の過程は十分に理解され、地域教会の司牧手段となっています。

キリスト教入信の過程において、二千年にわたる信仰入門の伝統をもつ地域教会は、若い教会から多くの恩恵にあずかっています。古来の教会も若い教会も、キリスト教入信の過程において、幼児に限られることのない成人用の方法を用いることを学びました⁽⁷⁰⁾。洗礼の秘跡は古代のキリスト教入信の過程の儀式を司牧計画として取り入れることを通じて、重要な意味を帯びるようになりました。この司牧計画は、現代文化の中で、より自覚的に秘跡にあずかるために、徹底した準備を行い、新たに洗礼を受けた人が将来、キリスト教的生活に積極的に参加できるようにします。多くのキリスト教共同体は、洗礼式を大きく変えました。そのために、幼児洗礼における両親の参加のしかたを見直し、洗礼式を福音宣教の機会、信仰をはっきりと宣言する場として明確に示しました。共同体がいっそう参加できる洗礼式を計画し、

また子どもをキリスト教に導入するという課題を果たすよう両親を助けました。子どもをキリスト教に導入するという課題はますます困難になっているからです。東方カトリック教会の経験を考慮することにより、秘義教育が強調されるようになりました。つまり、キリスト教入信の過程は、洗礼式で完成するのではなく、継続的な教育だと考えるようになったのです。このことは、指導の目的は大人のキリスト教信仰だということを思い起こさせるのに役立ちました⁽⁷¹⁾。

神学的・司牧的考察は、さまざまな典礼の特別な性格を考慮することにより、信仰入門と信仰への導入の特別な方法を取り入れた改訂を行う助けとなりました。その一例は、キリスト教入信の過程の順序の問題です。教会には異なる伝統が存在します。成人のキリスト教入信と幼児洗礼に関して、東方教会の習慣と西方教会の実践の間には多様性が見られます。こうした多様性は堅信の秘跡の実践においてさらに大きく見いだされます。

西方キリスト教の未来と、それが西洋文化にキリスト教信仰を語る力は、西方教会がどのように洗礼の実践を見直すかにかかっています。しかし、この自己評価は、必ずしもつねによい成果を上げていません。一部の人々はこの評価を誤解し、さらには過去とのまったくの断絶をもたらすような変化を行うためにこの評価を用いました。そこから、一部の人々は、新しい実践を、最近の教会はよくなかったと判断して、現代においてキリスト教を語り、生きるための前例のない社会学的モデルを導入するための機会と考えました。こうした考えから、幼児洗礼の実践をやめることもしばしば見られます。逆の極端もあります。一部のキリスト教共同体の無気力が、当時行われた再評価の深刻な障害となりました。彼らは繰り返されてきた過去のやり方をただ守ることが教会活動の善益と成功の保証だと考えたのです。

現在の見直しを行うにあたり、一部の地域と状況で、教会は重要な問題に直面しています。そこからキリスト教共同体は、識別を行い、新たな司牧方法を採用するよう促されます。現代の教会の問題が、堅信を行う時期に関して共通の合意を見いだすことであるのは、いうまでもありません。このテーマは、聖体に関するシノドス第11回通常総会で提起され、シノドス後の使徒的勧告の中で教皇ベネディクト十六世も言及しました⁽⁷²⁾。最近、さまざまな司教協議会は、(教育学的、秘跡的、教會的に)異なる見方に基づく、異なる決定を行っています。教会が抱えるもう一つの問題は、キリスト教入

信の過程を再編するために、秘義教育の内容と過程を再検討できるかどうかということなのです。秘義教育がなければ信仰を生み出すための根本的な要素を欠くことになるからです。もう一つの問題は、とくに子どもと青少年に福音をのべ伝え、信仰を生み出すという教会固有の務めを、一部の知識教育または宗教教育に譲り渡す誘惑に打ち勝たなければならないことです。この分野の状況は国によって異なり、単一のお仕着せの解決法を見いだすことはできません。しかし、各地域教会はそれぞれの評価を行うことが求められます。

信仰への導入が福音宣教の不可欠の部分であることは容易に分かります。「新しい福音宣教」はこの問題に大いに寄与できます。実際、教会は決定的なしかたでこれまで行ってきた識別を継続し、同時に、疲弊やあきらめの兆候を示している個人と共同体のうちに内的な力を呼び覚まそうと努めなければなりません。わたしたちの共同体の将来の姿は、司牧分野にかける力と、再評価を行う具体的な取り組みと、再出発しようとする努力にかかっています。

最初の告知と、神について語る新しい形式の必要性

19 現代世界はしばしば信仰入門プログラムの見直しにもう一つの問題を提起します。すなわち、人々が神について語ることばに耳を傾け、自分たちの心を神に向けて開いてくれる場所や体験に出会うのがますます困難になっているということです。教会はこれまでもこの問題に取り組んできました。そして、困難を指摘するだけでなく、さまざまな解決法を示してきました。実際、教皇パウロ六世は、この問題を考慮して、教会がキリスト教信仰を示す新しい方法を探求するよう緊急の呼びかけを行いました⁽⁷³⁾。そこから「最初の告知」⁽⁷⁴⁾という発想が生まれました。「最初の告知」とは、信仰の根本の内容をはっきりと説明し、宣言することです。

当時、「最初の告知」ということばは、信仰入門過程の見直しのために用いられました。「最初の告知」は非信仰者、すなわち宗教に無関心な人々に向けられたものなので、一般的にいえば、福音をのべ伝える役割と、これまでイエス・キリストを知らなかった人を回心に招く役割の両方を果たします。福音の最初の告知と区別されたカテケジスは、すでに回心した人に向けて、最初の回心の深化と、信仰の指導を行い、そこから彼らをキリスト教共同体に組み入れます。しかし、この神のことばの奉仕職の二つの形式の関係を見

いだし、実際に二つを関係づけるのは容易ではありません。この関係がこれまで明確に語られたともいえません。この関係を、同じ司牧活動の中で結びついた、二重の活動と考えることが可能です。実際、多くの場合、カテケージスを受けた人は、いっそう深く回心した生活を送る必要があります。それゆえ、福音の告知をいっそう強調することが、カテケージスと信仰への導入プログラムに役立ちます。福音の告知は、回心へと招くとともに、回心を深め、保つからです。こうして新しい福音宣教は、宣教の告知的性格を強調することによって、現在の信仰入門のプログラムを強化することができます⁽⁷⁵⁾。

それゆえ、問題への最初の応答はすでになされています。しかしながら、この応答に加えて、わたしたちが行っている識別は、現代文化において神について語ることがむずかしい理由を深く理解することを必要とします。この問題はまず、これがキリスト教共同体自体にもどれだけいえるかを考察することを求めます⁽⁷⁶⁾。キリスト教共同体は、神について語る方法と手段を見いだすことを必要としています。この手段によって、彼らは現代人の不安と期待にこたえられます。そして、キリストの新鮮さがたまものとして与えられることを示します。この新鮮さは、わたしたちが皆待ち望んでいるものであり、皆が、意味を探求し、真理を渴き求めるひそかな望みとしてあこがれているものだからです。したがって、神について語られないことは、宣教の機会を与えてくれます。日常生活は「異邦人の中庭」⁽⁷⁷⁾とは何かを知る助けとなります。「異邦人の中庭」の中で、わたしたちのことばは、単に人々がそれを聞くだけでなく、人類の病に対する意味のある治療薬となります。「新しい福音宣教」の務めは、キリスト教を実践する人と、神を問い、探求するすべての人に、神の招きを自覚させることです。新しい福音宣教は、歴史の中で自分たちを導く聖霊にいっそう信頼するようという、キリスト教共同体への招きです。こうしてキリスト教共同体は恐れへの誘惑に打ち勝ち、神への問いを現代人の生活のただ中で語る場と方法を見いだします。

信仰に導き入れること、真理を教えること

20 神について語らなければならないなら、同様に人間についても語ることができ、また語らなければなりません。それは福音宣教に必要であり、福音宣教と直接かかわります。第二バチカン公会議が述べるとおり、信仰への導入と教育は深く結ばれているからです⁽⁷⁸⁾。教皇ベネディクト十六世もこの

ことを最近再確認しました。「現代の一部の人々は教会が教育にかかわることを疑問視します。教会の力を別のところに用いるほうがよいのではないかと考えるのです。……福音宣教は教会の第一の使命です。教育機関もそこで重要な役割を果たします。ですから、福音宣教は、人間の人格の尊厳に真にふさわしい社会を発展させたいという国家の根本的な願いにかないます。しかし、時として、教会が公共の場に貢献することの価値が疑問視されることがあります。それゆえ、信仰の真理と理性は決して対立しないことを思い起こすことが重要です」⁽⁷⁹⁾。教会は啓示された真理によって理性を清め、人類が、道徳と人間的倫理の基盤である究極的真理を認められるよう助けます。教会は本来、本質的な倫理観を備えており、人類の中に希望を生き生きと保ちます。

教皇ベネディクト十六世は、福音宣教と信仰への導入が教育活動を含むのが当然である理由を示します。教会はこの教育活動を世に対する奉仕として果たすのです。現代とその文化はあらゆる教育活動を困難にし、批判する可能性があるように思われます。教皇自身が「教育の緊急の必要性」⁽⁸⁰⁾について言及するとおりです。

教皇は「教育の緊急の必要性」ということばを用いて、キリスト教的教育活動だけでなく、教育活動全般が今日ますます直面している困難のことをいおうとしています。新しい世代に人生の基本的な価値と正しい行動を伝えることがますますむずかしくなっています。それは両親にも、学校等で教育活動に従事する専門的教育者にもいえます。両親は教育過程に影響を及ぼす力が衰えていることを目の当たりにしています。

こうした状況は、しばしば相対主義に支配される社会と文化の中で予想しうるものでした。相対主義は真理の光をもたないからです。多くの人は、真理について語るのは面倒で、あまりに「権威主義的」だと考えます。こうした考え方は、生命の善（「人間であることはよいことなのか」。「生きるのはよいことなのか」）や、人生を成り立たせている人間関係と約束の価値をも疑わせるに至らせます。こうした状況の中で、本当に確かなこと、生きるための規則、人間存在の本来の意味と目的を若者に示し、（個人としても共同体としても）世代から世代へと伝えることがどうして可能でしょうか。その結果、教育は、一定の技術や教えを人に伝えるだけに限定されます。こうした技術と教えは、消費社会の生産物やその場限りの満足感を通じて幸福追求を行う

ことを可能にするにすぎません。そのため、両親と教師は自らに固有の教育職を放棄する誘惑にさらされます。自分の役割と使命が分からないからです。

だから「教育の緊急の必要性」が生じるのです。わたしたちはもはや、わたしたちが当然伝えるべきもののすべてを若者に伝えることができなくなっています。わたしたちは、人生の基盤となる真の価値を伝えないことについて若者に責任を負っています。こうして教育の本質的な目的は遂げられず、忘れられます。教育の本質的な目的とは、人生を十全に生き、共通善に独自の貢献を果たせるように一人ひとりの人を教育することです。さまざまな地域で、真の教育と、真の教育者に必要とされることに関する問いかけがますます行われています。同じ問いかけは、両親（彼らは子どもの将来についてしばしば不安を抱えています）にも、教師（彼らは学校の荒廃を目の当たりにしています）にも、社会そのものにも同じように行われます。社会においては共生することが脅威にさらされているからです。

このような状況の中で、信仰と、主の弟子となって主をあかしすることを教える教会の務めは、これまでにまして真の貢献を果たすものとなっています。社会を苦悩から救うことができるからです。この苦悩の原因は、教育危機と、不信と、人間を疎外する「自己憎悪」です。一部の文化の特徴をなす墮落した行為はいうまでもありません。教会の教える務めは、キリスト信者に、社会の公共空間に進み出て、あらためて神について語り、教会がたまものとしてもつ、ふさわしい教育活動の伝統を示す機会を与えます。キリスト教共同体は、聖霊に導かれながら、教育活動を二千年にわたって行ってきたからです。

それゆえ、教会は長い教育伝統をもっています。すなわち、教育の源泉、勉学と研究、教育機関、教育者（修道会の奉献生活者と信徒）です。これらの教育者は、一般的な学術機関と教育活動において教会の影響を示すことができます。さらに、この教育伝統は、現代における社会的・文化的発展を考慮しながら、大きな変化を遂げてきました。したがって、この分野における識別は、変化に関する論点を整理するのに役立つだけでなく、教育において適切な対応を必要とする霊的資源や将来の問題を見いだすためにも役立ちます。同時にわたしたちは、教会の本質的な務めが、信仰と弟子の従順とあかしの生活を教え、キリストと御父との個人的関係へと人々を導くことであることを自覚しなければなりません。

「人間の人格に基づく環境保護」

21 教会の教育活動全体の目的は容易に分かることです。すなわち、教皇ベネディクト十六世が述べた「人間の人格に基づく環境保護」の構築のために働くことです。「ヒューマン・エコロジーともいえるものがが必要です。ただし、これは正しく理解されなければなりません。……決定的な問題は、社会全体の道徳的方向性です。もし生存権と自然死への権利に対する尊重が欠けていれば、もし人間の受精、懐胎、および誕生が人工的なものになってしまえば、もし人間の胚が研究の犠牲にされるならば、社会の良心は、ヒューマン・エコロジーを、そしてそれとともに自然環境の生態系への配慮の考えを失うことになるでしょう。教育制度や法が、未来の世代が自分自身を尊重することができるようにしていないのに、それらの世代に対して自然環境を尊重することを要求するのは矛盾しています。自然とは、一つであり、分けることはできません。それは、環境だけでなく、生命、性、結婚、家庭、社会関係を包含します。一言でいうと、それは、人間の全人的発展を含むのです。環境に対する義務は、人間——個人としての人間および他者との関係における人間——に対する義務と関係しています。ある義務を守り、他の義務を踏みこじめることは誤りです。これこそ、今日、わたしたちの思考と実践における深刻な矛盾となっています。この矛盾は、人間の品位を落とし、自然環境を混乱させ、社会に損害を与えます」⁽⁸¹⁾。

キリスト教信仰は知性が歴史と全存在の深い均衡を理解するのを助けません。それは一般的・外的なしかたによって行われるのではありません。むしろ、理性と認識の探求を分かち合い、理性を人間と宇宙の善に方向づけることによって行われます。キリスト教信仰は人間の基本的経験の深い内容を理解するための助けとなります。引用したテキストが示すとおりです。カトリック教会はこうした批判的議論を長年にわたり行ってきました。教会は、教育機関、研究所と大学を設立することによってますます豊かな活動を行うことができるようになりました。これらの施設は一部の機関の洞察とカリスマ、そして地域教会の教育に対する関心が生み出したものです。これらの教育機関は研究協力を行い、諸文化・社会における知識を発展させることによって自らの役割を果たしています。すでに述べた社会と文化の変化は、これらの機関に問いかけ、問題を示します。教会は、教育と文化にかかわることにより、

識別を行うことを求められます。識別は「新しい福音宣教」の第一段階です。それは、諸問題と諸勢力の重要な側面を見分け、教会と個人・人類の将来を保証しうる戦略を採用できるためです。

確かに「新しい福音宣教」は「異邦人の中庭」としてのこうした文化の領域を考察することを通して、人々が変化を経験しながら、自分の根本的目的ないし「使命」を実現する助けとなります。それは、現代の対話の中で神への問いとキリスト教信仰を示します。そして、文化の領域を、神への問いを自分の生活、家庭、職場で示すことのできる、自由で成熟した人間を教育できる場とするのです。

証人としての福音宣教者と教育者

22 現在の「教育の緊急の必要性」は、教皇パウロ六世のことばに特別な意味を与えます。『わたしたちの時代の人間は、教師よりもあかしする人に喜んで聞きます。それどころかもしその教師にその耳を傾けるとしたら、彼らがあかしをする人だからなのです』。……教会はとくに人々の交際様式と生活のしかた、つまり、主イエスに対する教会の忠実さの生けるあかし——教会の清貧と離脱、この世のあらゆる権力からの自由、そして結局のところ聖性を明らかに明示する生活自体により確認されたあかし——によって世界を福音化できるのです」⁽⁸²⁾。「新しい福音宣教」がいかなることを示そうとも、信仰の告知と伝達についていかなる司牧計画を作ろうとも、福音宣教の務めに力を与えるのが人々の生活であることは変わりません。こうして生活は模範としての性格を帯びます。彼らの無私の献身が本物であること、人々に教え、生きるように促すことが真理であることを確証するからです。現代の「教育の緊急の必要性」は、教育者に対して、この現実と価値を信頼の置ける形であかしするよう求めます。こうした価値は、個人の生活、また社会でともに生きる際の共通の計画の基盤となるからです。このことに関連して、聖パウロ、聖パトリキウス（389頃 - 461年頃）、聖ボニファティウス（672 / 675 - 754年）、聖フランシスコ・ザビエル（1506 - 1552年）、聖キュリロス（826 / 827 - 869年）とメトディオス（815頃 - 885年）、聖トリビオ・デ・モグロベホ（1538 - 1606年）、聖ダミアン・ド・ヴーステル（1840 - 1889年）、コルカタの福者マザー・テレサ（1910 - 1997年）の模範的生活を思い起こすだけで十分です。

それゆえ、現代の教会がなすべきなのは、長い間福音宣教と教育に携わってきた多くの人々（司教、司祭、カテキスタ、教育者、教師、両親）を支え、教育することです。同じことはキリスト教共同体にもいえます。キリスト教共同体は、教育の責務をいっそう自覚し、教会と人類の未来のためにこの不可欠の務めに多くの力を注ぐよう招かれているからです。福音宣教と告知と伝達の務めが何よりも重要であることを、教会の中ではっきりと述べなければなりません。個々の共同体においてもこの務めを第一に優先すべきことを再確認すべきです。「新しい福音宣教」の共通の計画に力を結集させるためです。

信仰を支え、深めることは、必ず家庭から始まります。家庭は社会の基本単位であり、祈りを身に着ける最初の場合だからです⁽⁸³⁾。信仰を教えることは、根本的に、子どもに祈りを教えるという形で、家庭で行われます。両親は、子どもとともに祈ることによって、主が愛をもってともにいてくださることを子どもたちを感じさせると同時に、両親も子どもたちに対して信頼の置けるあかしとなります。

すでに福音宣教を行っている人が力を回復するために必要な養成と配慮は、実践的な準備に限りません。たとえそれが必要であるとしてもです。むしろ養成と司牧はおもに霊的なものであるべきです。養成は、イエス・キリストの福音に照らされ、聖霊に導かれた信仰の学びやです。それは父である神を体験することの意味を人々に教えます。人々が福音宣教を行えるようになるには、その人が福音化されていなければならず、また、福音化されるよう身をゆだねなければなりません。すなわち、イエス・キリストとの個人的な出会いと生きた交わりを通じて霊的に刷新されなければなりません。こうして人は信仰を伝える力を身に着けます。使徒聖パウロがあかしするとおりです。「わたしは信じた。それで、わたしは語った」（二コリント4・13）。

新しい福音宣教は何よりもまずなすべき課題であり、霊的挑戦です。それゆえそれは、真剣に聖性を追求するすべてのキリスト信者の責務です。養成の理解に関連して、地域教会が、洗礼を受けた人に宣教また福音宣教の使命をいっそう自覚させるための施設・手段の構築に時間と場所を用いることが有益です。新しい福音宣教を必要とする領域で働くわたしたちのあかしが信頼の置けるものとなるために、現代において理解できるしかたで語り、これらの領域の中で、自分のあかしを支える希望の理由（一ペトロ3・15参照）

をのべる方法を知らなければなりません。新しい福音宣教という課題は、努力せずに果たせるものではありません。それは注意と教育と配慮を必要としています。

質問

新しい福音宣教は、福音を世にのべ伝えるために、教会内のあらゆる領域と活動を吟味することです。

- 1 わたしたちのキリスト教共同体は「最初の告知」を実践することをよく自覚していますか。「最初の告知」はわたしたちのキリスト教共同体で広く実践されていますか。
- 2 キリスト教共同体は、福音への忠実とキリスト教への回心をのべ伝えることを特別な目的として、司牧計画を立てていますか。
- 3 一般的に、キリスト教共同体は、社会と自分たちの共同体の中で神についての問いを示す新たな形を作るという要求にこたえていますか。他の部分教会と分かち合うに値する意味のある経験がありますか。
- 4 地域教会は「異邦人の中庭」という発想を取り上げ、発展させていますか。
- 5 キリスト教共同体は福音宣教を大胆に行うことを優先課題としていますか。キリスト教共同体を宣教活動に開く上で成功した取り組みがありますか。
- 6 人類に福音を喜びをもって分かりやすくのべ伝える経験、組織、新しいキリスト信者の会、グループが作られていますか。
- 7 6の質問で述べたグループと小教区が協力して行ったことはありますか。

教会はキリスト教入信と信仰入門プログラムの改訂に力を注いできました。

- 8 『成人のキリスト教入信式』は、わたしたちの共同体において信仰入門プログラムの見直しのモデルとなりましたか。
- 9 『成人のキリスト教入信式』をキリスト教入信の過程で用いましたか。

どのように用いましたか。『成人のキリスト教入信式』は、洗礼のための司牧計画を見直し、洗礼、堅信、聖体の秘跡のつながりを強調する上で、助けとなりましたか。

- 10 東方カトリック教会は幼児に3つのキリスト教入信の秘跡をすべて授けます。この実践の豊かさと違いをどう考えますか。カトリック教会のキリスト教入信の過程における考え方と変化にこの実践は影響しましたか。
- 11 「洗礼に向けた入信過程」は秘跡の準備教育の見直しに影響を与えましたか。それは秘跡の準備教育を霊的な歩みに変え、秘跡を受ける人だけでなく共同体の構成員（とくに成人）も積極的にかかわるものにしましたか。キリスト教共同体は、信仰を伝える上でますます困難を覚える両親を支えていますか。
- 12 堅信の秘跡を霊的歩みとして行うことについて、成果はありますか。成果を上げた理由は何ですか。
- 13 秘義教育の要素はキリスト教入信の過程に取り入れられていますか。
- 14 キリスト教共同体は信仰入門教育を成人にも適用し、それが幼児だけに用いられることを避けることに成功しましたか。
- 15 地域教会は、告知の役割や、信仰を生み出すことと洗礼のための司牧計画を重視する必要性をどのように考えていますか。
- 16 小教区共同体は信仰教育を、宗教教育を行う他の機関にゆだねる（たとえば、信仰教育の務めを学校に譲り渡し、信仰教育を文化的な形の宗教教育と混同させるといった）誘惑に打ち勝っていますか。

教会において、教育の問題は真に固有の意味で緊急性を帯びています。

- 17 この問題をどの程度認識し、これに対応していますか。そのためにどのような手段を用いていますか。
- 18 学术界でのカトリック教育機関の存在は、この問題にこたえる上で助けとなっていますか。カトリック教育機関の変化として興味深いものがありますか。この問題にこたえるために用いる手段がありますか。
- 19 カトリック教育機関と教会機関の間に関係が存在しますか。教育機関と小教区の生活の間に関係は存在しますか。

- 20 カトリック教育機関は、しばしば現代文化の影響を受けた公共の議論や思想にキリスト教の信仰体験を示すことによって、文化と社会に参加できていますか。
- 21 カトリック教育機関と非カトリック教育機関の関係はどのようなものですか。カトリック教育機関と一般社会との関係はどのようなものですか。
- 22 わたしたちの歴史遺産である優れた文化的機関（カトリック大学、文化センター、研究所）は、人格の基本的な価値（生命、家庭、正義、連帯、被造物の擁護）について、現代の議論の中で発言していますか。
- 23 カトリック教育機関は、人々が視野を広げ、真理を追求し、歴史に意味を与える神の痕跡を認めるための助けとなっていますか。それはキリスト教共同体が識別を行い、現代文化のさまざまな問いかけと深い期待に耳を傾ける助けとなっていますか。
- 24 いわゆる「異邦人の中庭」を実践している教会機関がありますか。キリスト者が人類の深い期待と神への渇きにこたえる対話の形態を大胆に模索する場がありますか。キリスト者がこうした対話において神への問いを大胆に示す場がありますか。キリスト者が自分の神探求の経験を分かち合い、イエス・キリストの福音のうちに個人として神と出会ったことを説明する場がありますか。

新しい福音宣教は告知とあかしのための養成を必要とします。

- 25 キリスト教共同体は、生活のあかしを通して福音宣教者また教育者となる人を探し、教育し、支える緊急の必要性を自覚していますか。
- 26 地域教会の中で、福音宣教をはっきりとした目標とした奉仕職——組織的な奉仕職または非組織的な奉仕職（後者のほうが多いと思われます）——が作られ、あるいは奨励されていますか。
- 27 小教区はある種の活気のある運動団体やカリスマ的グループに対して寛大ですか。
- 28 最近の数十年間に、多くの司教協議会は宣教活動と福音宣教を司牧計画の中心的な要素また優先課題としました。どのような成果が上がりましたか。キリスト教共同体に宣教の「霊的」側面を自覚させることができ

ましたか。

- 29 「新しい福音宣教」を強調することが司祭志願者の養成プログラムの見直しと再構築の助けとなりましたか。司祭養成機関（教区神学校、諸教区立神学校、修道会立神学校）は、生活規則を見直し、新しい福音宣教という課題に適用させることができましたか。
- 30 終身助祭職は教会の宣教使命に組み入れられていますか。

結論

「あなたがたの上に聖霊が降ると、あなたがたは力を受ける」（使徒言行録1・8）。

「新しい福音宣教」の基盤である聖霊降臨

23 イエス・キリストは、わたしたちの間に来られて、わたしたちを神のいのちにあずからせてくださいました。神のいのちは地の面を新たにし、万物を新しくします（黙示録21・5参照）。キリストの啓示は、わたしたちを救いのたまものを受け取る者とするだけでなく、それをのべ伝え、あかしする者となります。この務めを果たすために、復活したキリストの霊は、世のあらゆるところにまで福音をのべ伝えるわたしたちに力を注いでくださいます。これが最初のキリスト教共同体の経験したことでした。最初のキリスト教共同体は宣教とあかしを通じて神のことが広まるのを目の当たりにしました（使徒言行録6・7参照）。

時間的順序からいえば、最初の福音宣教は聖霊降臨の日から始まりました。その日、キリストの母とともに集まって祈っていた使徒たちは、聖霊を受けました。このようにして、大天使のことがどおり「恵みに満たされたかた」であるマリアは、使徒が宣教を行う間そこにおられ、使徒の後継者が福音をのべ伝えようとするところにい続けてくださいます。

新しい福音宣教は「新しい福音」のことではありません。なぜなら、「イエス・キリストは、きのうも今日も、また永遠に変わることはないかた」（ヘブライ13・8）だからです。むしろ新しい福音宣教は、現代の人類と諸国民の必要に、時のしるしと文化の新しい状況に合わせたしかたをもって、新たにこたえることです。わたしたちはこの文化を個人のアイデンティティの基盤とし、人生の意味を探求する場とするからです。したがって、「新しい福音宣教」とは、文化をより深く福音に根ざしたものとし、イエス・キリストと御父が与えてくださった霊を通じてわたしたちのうちに住む新しい人を見いだすことです。シノドス第13回通常総会の準備計画は、新しい福音宣教のための舞台となります。教会にとって、シノドスの開催を新しい二階の広間になぞらえることができます。この二階の広間で、使徒の後継者たちはキリストの母とともに集まって祈ります。マリアは新しい福音宣教の星と呼ばれて

きたからです⁽⁸⁴⁾。

「新しい福音宣教」——今日と明日の教会の展望

24 本文書の中でわたしたちは何度も新しい福音宣教に言及してきました。終わりに教皇ヨハネ・パウロ二世に向かうことによって、わたしたちはこのことばの深い意味と、そこに含まれた呼びかけを理解できます。この考えを支え、広めたのはヨハネ・パウロ二世だからです。ヨハネ・パウロ二世はいます。「新しい福音宣教」を繰り返し呼びかけたのは、「何よりもまず最初の熱意を、わたしたちのうちに再び燃え立たせる必要があることを指摘するためです。そのために、聖霊降臨の日に説教した使徒ペトロの情熱がわたしたちのうちにしみわたるにまかせましょう。パウロの燃える心を、わたしたちも追体験しなければなりません。彼はこう叫んでいます。『福音を告げ知らせないなら、わたしは不幸なのです』(一コリント9・16)と。この情熱は、教会に一つの新しい宣教熱を喚起しないではいられないでしょう。それは、少数の『専門家』に任せられるものではありません。むしろ、神の民の全メンバーの責任を総動員しなければならないものです。本当にキリストに出会った人は、それをただ自分のうちに秘めておくことはできず、告げ知らせなければなりません。これには、キリスト者共同体やグループが、日常的努力によって、使徒的な新しい飛躍を生きることが必要です」⁽⁸⁵⁾。

この文書はさまざまな変化や発展に言及してきました。わたしたちは、大きな変化を示し、しばしば懸念と恐れを引き起こすような状況に直面しています。こうした状況は新しい展望を必要としています。このような展望がわたしたちに、絶望ではなく希望に満ちた目で未来を見つめることを可能にします。わたしたち「教会」は、すでにこの展望を手にかけています。すなわち、キリストが告げ知らせ、たとえ話によって述べた、来るべき神の国です。神の国は、キリストの宣教により、何よりもその死と復活によってわたしたちに知らされました。しかし、わたしたちはしばしばこの展望を具体化できないと感じます。いいかえると、それを「自分のものにし」、自分と自分が日々出会う人々のためにそれに「いのちを吹き込み」、教会生活と司牧活動の基盤とすることができません。

このことに関連して、第二バチカン公会議と公会議後の教皇は、現在と将来の教会の司牧計画の優先課題は「新しい福音宣教」であることをはっきり

と示してきました。「新しい福音宣教」とは、イエスのメッセージを新たにのべ伝えることです。それは喜びをもたらし、人々を自由にします。この優先課題は必要とされる展望の基盤ともなりうるものです。それは福音宣教を行う教会という展望です。この展望は本文書の出発点でしたが、今やそれは結論においてわたしたちに与えられます。わたしたちが必要とする識別の過程の全体は、この展望をわたしたちの心に、わたしたち一人ひとりの心に、教会の心に浸透させることを目指します。それは世に奉仕するためです。

福音宣教の喜び

25 新しい福音宣教とは、世と救いへの深い望みを共有し、希望の理由(logos)を示すことを通じて(一ペトロ3・15参照)、わたしたちの信仰を理解可能なものとする 것입니다。人類は現代において生きることのできる希望を必要としています。この希望の内容は「人間の顔をもった神です。わたしたちをこの上なく愛してくださった神です」⁽⁸⁶⁾。だから、教会は本来、宣教的なのです。わたしたちは、イエス・キリストとの個人的な出会いによって与えられた永遠のいのちのこばを自分だけにとどめておくことができません。このいのちのこばはすべての人のためのものです。すべての現代人は、意識しているかいないかを問わず、このこばを告げられることを必要としています。

この必要に気づかないことから、荒れ野と空しさが生まれます。実際、新しい福音宣教の障害は、人々の間に喜びと希望がないことです。このことは現代世界のさまざまな状況によってもたらされ、広まりました。しばしば喜びと希望があまりに欠如していることが、わたしたちキリスト教共同体のあり方にも影響します。これが新しい福音宣教をあらためて呼びかける理由です。新しい福音宣教は新たな責務を負わすものではありません。むしろそれは、恐れに囚われた状況に喜びといのちを回復する方法なのです。

それゆえわたしたちは熱意をもって新しい福音宣教に向かいます。わたしたちは福音宣教がもたらす優しく慰めに満ちた喜びを学びます。たとえ宣教が涙とともに種をまくことのように思われるときにも(詩編126・6参照)。「わたしたちのこの喜びが、洗礼者ヨハネ、ペトロ、パウロ、その他の使徒たち、および教会の中の無数のすばらしい福音化の働き手をもって、だれも、何も消すことのできない、内的な熱情と喜びと同じものでありますよ

うに。この喜びが、ささげられたわたしたちの生涯の大きな喜びとなりますように。現代世界は、ときには苦悩のうちに、ときには希望のうちにより知らせを求めています。願わくは、現代の人々が、悲しみに沈んだ元気のない福音宣教者、忍耐を欠き不安に駆られている福音宣教者からではなく、すでにキリストの喜びを受け取り、その熱意によって生活があかあかと輝いている福音宣教者、神の国がのべ伝えられ、教会が世界のただ中に建設されるために喜んでいのちをささげる福音宣教者から福音を受け取りますように」

(87)。

注

- (1) ベネディクト十六世「中東特別シノドス閉会ミサ説教（2010年10月24日）」： *L'Osservatore Romano*, 25-26 ottobre 2010, p. 8.
- (2) 教皇庁新福音化推進評議会を設置したベネディクト十六世自発教令『ウビクムクエ・エト・センペル（2010年9月21日）』： *Ubicumque et semper, L'Osservatore Romano*, 13 ottobre 2010, pp. 4-5.
- (3) ベネディクト十六世シノドス後の使徒的勧告『主のことば（2010年9月30日）』 96、122： *Verbum Domini, L'Osservatore Romano*, 12 novembre 2010, pp. 96, 111-112.
- (4) パウロ六世使徒的勧告『福音宣教（1975年12月8日）』 80： *Evangelii nuntiandi*, AAS 68 (1976), 74.
- (5) 第二バチカン公会議『教会の宣教活動に関する教令』 2： *Ad gentes*.
- (6) 第二バチカン公会議『教会憲章』 2： *Lumen gentium* 参照。
- (7) ポワティエの聖ヒラリウス『詩編講解』： *In Ps.*, 14, PL 9, 301; カイサレイアのエウセビオス『イザヤ書注解』： *In Isaiam* 54, 2-3, PG 24, 462-463; アレクサンドレイアの聖キュリロス『イザヤ書注解』： *In Isaiam V*, cap. 54, 1-3, PG 70, 1193 参照。
- (8) パウロ六世使徒的勧告『福音宣教』 14： AAS 68 (1976), 13.
- (9) 同 15： AAS 68 (1976), 13-14 参照。
- (10) 第二バチカン公会議『現代世界憲章』 4： *Gaudium et spes*.
- (11) ヨハネ・パウロ二世「モギラ、聖十字架巡礼所聖堂における説教（1979年6月9日）」 1： AAS 71 (1979), 865「十字架が立てられるところで、その地に愛による人間の救いに関する福音が伝わったしるしが示されます。……（ポーランド教会の）千年期を祝っている今も、ここからそう遠く離れていないところで新しい木の十字架が立てられています。この十字架はわたしたちにしるしを与えます。このしるしは、新千年期の初めに、この新しい時代に、新しい生活条件の中で、福音があらためてのべ伝えられていることを示します。〈新しい福音宣教〉が始まりました。たとえ実際には永遠に同じものであっても、それは新たにのべ伝えられるかのようです」参照。
- (12) ヨハネ・パウロ二世「ラテンアメリカ司教会議（CELAM）第19回総会

- での演説(1983年3月9日、ポルトープランス)』3:AAS 75 I (1983), 778.
- (13) ヨハネ・パウロ二世回勅『救い主の使命(1990年12月7日)』30:*Redemptoris missio*, AAS 83 (1991), 276. 同1-3:AAS 83 (1991), 249-252も参照。
- (14) ヨハネ・パウロ二世使徒的勸告『信徒の召命と使命(1988年12月30日)』35:*Christifideles laici*, AAS 81 (1989), 458.
- (15) ヨハネ・パウロ二世シノドス後の使徒的勸告『アフリカにおける教会(1995年9月14日)』57, 63:*Ecclesia in Africa*, AAS 85 (1996), 35-36, 39-40; 同シノドス後の使徒的勸告『アメリカにおける教会(1999年1月22日)』6, 66:*Ecclesia in America*, AAS 91 (1999), 10-11, 56; 同シノドス後の使徒的勸告『アジアにおける教会(1999年11月6日)』2:*Ecclesia in Asia*, AAS 92 (2000), 450-451; 同シノドス後の使徒的勸告『オセアニアにおける教会(2001年11月22日)』18:*Ecclesia in Oceania*, AAS 94 (2002), 386-389参照。
- (16) ヨハネ・パウロ二世シノドス後の使徒的勸告『ヨーロッパにおける教会(2003年6月28日)』2:*Ecclesia in Europa*, AAS 95 (2003), 650. 第1回ヨーロッパ特別シノドス(1991年)の最終メッセージを引用している。同45:AAS 95 (2003), 677も参照。
- (17) 同32:AAS 95 (2003), 670「同時に、わたしはあらためて正教会の司牧者と兄弟姉妹に対して確認したいと思います。新しい福音宣教を決して改宗と混同してはなりません。真理と自由とすべての人の人格の尊厳を尊重しなければならないからです」参照。福音宣教の必要性和、福音宣教と改宗の区別、エキュメニズムにおける福音宣教に関する考察は、教皇庁教理省『教理についての覚書——福音宣教のいくつかの側面について(2007年12月3日)』10-12:AAS 100 (2008), 498-503で行われている。
- (18) ベネディクト十六世「ローマ教皇庁へのあいさつ(2009年12月21日)」:AAS 102 (2010), 40. 教皇ベネディクト十六世は同じ「異邦人の中庭」というイメージを「2010年『世界広報の日』メッセージ」(AAS 102 [2010], 117)でも取り上げる。そこで「異邦人の中庭」は新しいメディアが社会の中に造り出し、ますます多くの人を引き付けている

領域である。新しい福音宣教は、先進技術の分野においても福音をのべ伝える方法を創造することである。

- (19) たとえば、アレクサンドレイアの聖クレメンス『ギリシア人への勧告』: *Protrepticus* IX, 87, 3-4, Sources chrétiennes, 2, 154; 聖アウグスティヌス『説教』: *Sermo* 14, D [= 352 A], 3, Nuova Biblioteca Agostiniana, XXXV/1, 269-271 参照。
- (20) たとえば、ヨハネ・パウロ二世回勅『救い主の使命』 37: AAS 83 (1991), 282-286 参照。
- (21) ベネディクト十六世「教皇庁文化評議会総会参加者へのあいさつ(2008年3月8日)」: AAS 100 (2008), 245-248 参照。
- (22) ベネディクト十六世シノドス後の使徒的勧告『主のことは(2010年9月30日)』 102: *Verbum Domini, L'Osservatore Romano*, 12 novembre 2010, p. 97.
- (23) ベネディクト十六世回勅『真理に根ざした愛』 42: *Caritas in Veritate*, AAS 101 (2009), 677-678 参照。
- (24) ヨハネ・パウロ二世回勅『救い主の使命』 37: AAS 83 (1991), 282-286; ベネディクト十六世「2010年『世界広報の日』メッセージ(2010年1月24日)」: AAS 102 (2010), 117 参照。
- (25) ベネディクト十六世回勅『真理に根ざした愛』 42: AAS 101 (2009), 678 「長い間、貧しい民族が発展の固定された段階に残され、発展した民族の慈善による援助を受けることで満足すべきだと考えられてきました。パウロ六世は、『ポプロールム・プログレッシオ』において、この精神に強く反対しました。今日、このような民族を貧困から救うために存在する物質的資源は、以前よりも潜在的には多いのですが、それらは、おもに、先進国の人々の手中に収められています。これらの人々は、資本と労働の移動性における自由化からより多くを得ているからです。したがって、繁栄の諸形態が世界規模で拡大することは、自己中心的、保護主義的、あるいは私利私欲に向けられたような計画によって妨げられるべきではありません。実際に、新興国や発展途上国の関与によって、今日の危機をよりうまく管理することが可能になっています。グローバル化の過程に固有の推移は、多大な困難と危険を呈しています。それらは、人間を向上させる連帯という目標へ

とグローバリゼーションを導く、グローバリゼーションの根底にある人間のかつ倫理的な精神をつかむことができはじめて克服できるのです。残念ながら、この精神は、しばしば個人主義のかつ功利主義的な性格の倫理のおよび文化的願望に圧倒され、あるいは抑えられています」参照。

- (26) ベネディクト十六世回勅『希望による救い(2007年11月30日)』22 : *Spe salvi*, AAS 99 (2007), 1003-1004 参照。
- (27) 教皇庁教理省書簡『キリスト者の黙想について(1989年10月15日)』 : AAS 82 (1990), 362-379 参照。
- (28) ヨハネ・パウロ二世シノドス後の使徒的勸告『信徒の召命と使命』34 : AAS 81 (1989), 455 参照。
- (29) 同 26 : AAS 81 (1989), 438.
- (30) 同 34 : AAS 81 (1989), 455. 教皇庁新福音化推進評議会を設立した自発教令『ウビクムクエ・エト・センペル』 : *Ubi cumque et semper, L'Osservatore Romano*, 13 ottobre 2010, pp. 4-5 に引用。
- (31) ヨハネ・パウロ二世回勅『救い主の使命』34 : AAS 83 (1991), 279-280.
- (32) 第5回ラテンアメリカ・カリブ司教協議会総会『最終文書(アパレシーダ、2007年5月13 - 31日)』365 - 370 : http://www.celam.org/celam.info/download/Documento_Conclusivo_Aparecida.pdf 参照。
- (33) オリゲネス『マタイ福音書注解』 : *In Evangelium secundum Matthaeum* 17, 7 : PG 13, 1197B; 聖ヒエロニウムス『オリゲネス・ルカ福音書講話翻訳』 : *Translatio homiliarum Origenis in Lucam* 36, PL 26, 324-325 参照。
- (34) 第二バチカン公会議『神の啓示に関する教義憲章』4が述べるとおり、「彼を見る者は父を見るといわれる(ヨハネ 14・9 参照) そのキリストは、自分自身の全的現存と顕現とにより、ことばとわざにより、しるしと奇跡により、なかでも、おのが死と死者の中からはえある復活とにより、最後に真理の霊の派遣によって、神がわれわれを罪と死の闇から救い、永遠のいのちに復活させるため、われわれとともにいるという啓示を完全に成し遂げ、そして神的あかしをもって確証している」。

- (35) 教皇庁教理省『教理についての覚書——福音宣教のいくつかの側面について』2: AAS 100 (2008), 490 参照。
- (36) ベネディクト十六世回勅『神は愛 (2005年12月25日)』1: *Deus caritas est*, AAS 98 (2006), 217.
- (37) 教皇庁聖職者省『カテケージス一般指針 (1997年8月15日)』100 参照。
- (38) 同 141 参照。
- (39) ヨハネ・パウロ二世使徒憲章『ゆだねられた信仰の遺産 (1992年11月11日)』: *Fidei depositum*, AAS 86 (1994), 113-118 (教皇庁聖職者省『カテケージス一般指針 (1997年8月15日)』122 に引用) 参照。
- (40) ヨハネ・パウロ二世シノドス後の使徒的勧告『信徒の召命と使命』34: AAS 81 (1989), 455. ヨハネ・パウロ二世シノドス後の使徒的勧告『アメリカにおける教会』66: AAS 91 (1999), 801; ベネディクト十六世シノドス後の使徒的勧告『主のことば』94: *L'Osservatore Romano*, 12 novembre 2010, pp. 91-92 も参照。
- (41) 教皇庁聖職者省『カテケージス一般指針 (1997年8月15日)』47『『教会の宣教活動に関する教令』は福音宣教のダイナミックな過程を明らかにしている。キリスト教的あかし、対話、愛のわざ (同 11 - 12)、福音の告知と回心への招き (同 13)、信仰入門者とキリスト教入信の過程 (同 14)、秘跡とその奉仕者を通じて行われるキリスト教共同体の教育 (同 15 - 18) である。これが教会を基礎づけ、築くダイナミズムである』参照。
- (42) 同 48。『カテケージス一般指針』は、第二バチカン公会議『教会の宣教活動に関する教令』、教皇パウロ六世使徒的勧告『福音宣教』、教皇ヨハネ・パウロ二世回勅『救い主の使命』の基本的内容を簡潔明快に要約している。
- (43) 第二バチカン公会議『神の啓示に関する教義憲章』7 以下参照。
- (44) 世界代表司教会議第12回通常総会「神の民へのメッセージ (2008年10月24日)」第3部: *L'Osservatore Romano*, 25 ottobre 2008, p. 4 参照。
- (45) ベネディクト十六世シノドス後の使徒的勧告『主のことば』10、75:

- L'Osservatore Romano*, 12 novembre 2010, pp. 15, 74 参照。
- (46) 同 58 - 60 : *L'Osservatore Romano*, 12 novembre 2010, pp. 62-64 参照。
- (47) 同 90 - 98 : *L'Osservatore Romano*, 12 novembre 2010, pp. 89-95, 103 参照。
- (48) 同 104 : *L'Osservatore Romano*, 12 novembre 2010, pp. 98-99.
- (49) 世界代表司教会議第12回通常総会「提言(2008年10月25日)」38。ベネディクト十六世シノドス後の使徒的勧告『主のことば』74、105 : *L'Osservatore Romano*, 12 novembre 2010, pp. 73-74, 99-100 も参照。
- (50) ベネディクト十六世シノドス後の使徒的勧告『主のことば』93 : *L'Osservatore Romano*, 12 novembre 2010, p. 91.
- (51) ヨハネ・パウロ二世使徒的勧告『要理教育(1979年10月16日)』3 : *Catechesi tradendae*, AAS 71 (1979), 1279「このシノドスは神への感謝と大きな希望をもって、非常な喜びの中に作業をしました。それは、要理教育の刷新が、現代の教会に聖霊から与えられた最良のたまものであることを認めたからです。そして、全世界のすべての階層のキリスト教共同体は、感嘆すべき寛大さと豊かな創意をもってこのたまものにこたえています。そのために、きわめて現実的なことがらに基づいて必要な判断をし、神の恩恵と教導職の規範とに従うキリスト信者の熱意に信頼することができました」参照。信仰教育の状況とその進展と問題点の評価は『カテケージス一般指針』29 - 30に見いだされる。
- (52) 信仰教育の方法の紹介は、教皇庁聖職者省『カテケージス一般指針』第3部第2章、第4部第4、第5章に見いだされる。
- (53) ヨハネ・パウロ二世使徒的勧告『要理教育』55 : AAS 71 (1979), 1322-1323 参照。
- (54) 同 30 - 31 : AAS 71 (1979), 1302-1304 参照。
- (55) 教皇庁聖職者省『カテケージス一般指針』78 参照。
- (56) ヨハネ・パウロ二世使徒的勧告『要理教育』58 : AAS 71 (1979), 1324-1325「ところで、信仰の教育学も存在し、そしてそのような信仰の教育学が要理教育にもたらすことのできる利益については言い

過ぎることはありません。なぜなら、進歩した正しい教育方法が信仰の教育学に適用されるのは理にかなっているからです。しかしながら、つねに信仰の根本的特徴が考慮される必要があります。実際、信仰の教育学に関する場合、いかに高度なものであろうと、人間的の学問が教えられるべきではなく、神の啓示、しかも、その全体が教えられなければなりません。ところで、神は自らの救いの歴史を通して、とくに福音において、信仰教育が規範としなければならない教育学を用いました。すべての方法は、信仰を伝え、またその教育に役立つかぎり、要理教育にとって有益であり、さもないと一文の価値もありません」。この考察を取り入れ、改訂した、教皇庁聖職者省『カテケージス一般指針』143 - 144 参照。

- (57) 教皇庁聖職者省『カテケージス一般指針』105 参照。『カトリック教会のカテキズム』4 - 10 も参照。
- (58) 教皇庁聖職者省『カテケージス一般指針』68。
- (59) 第二バチカン公会議『教会の宣教活動に関する教令』14「キリストに対する信仰を、教会を通して神から受けた者は、典礼上の儀式によって洗礼志願期に受け入れられる。この期間は、ただ教義や戒律の説明だけでなく、キリスト教的生活全体の教育と、十分な時間をかけての見習いの期間であり、それによって弟子たちは師なるキリストと結び合わせられるのである。それゆえ、洗礼志願者は救いの秘義を十分に伝授され、福音に即した生活と、時間において継続的に行われる聖なる儀式とによって、神の民の信仰と典礼と愛の生活に導き入れられなければならない。次に、彼らはキリスト教入信の秘跡により、闇の支配から解放されて、キリストとともに死に、ともに葬られ、ともによみがえらされて、子とする霊を受け、主の死と復活の記念を神の民全体とともに祝う。……洗礼志願期におけるキリスト教への入信は、単にカテキスタや司祭のみならず、信者の全集団、とくに代父母によってなされるべきである。それは、こうすることによって、洗礼志願者が、当初から神の民に属するものであることを自覚できるからである。さらに、教会の生活は使徒的な生活であるから、洗礼志願者もまた、生活のあかしと信仰の宣言によって、福音の告知と教会の建設とのために積極的に協力することを修得しなければならない」参照。

- (60) 教皇庁聖職者省『カテケージス一般指針』91「『洗礼後の信仰教育』は、キリスト教入信の過程をそのまま真似たものではなく、カテケージス対象者のうちに洗礼の現実を認めるものではあるが、『このキリスト教的生活のための予備学校』から靈感を得、キリスト教入信の過程を特徴づける主要な要素によって豊かなものとされている」。
- (61) 同 90 - 91 参照。
- (62) 第二バチカン公会議『教会憲章』26。このテキストは『カテケージス一般指針』217で、教会における要理教育活動の責任者の考察を始めるに際して引用される。
- (63) 信仰を伝える上でのそれぞれの人の役割と責任に関する説明は、教皇庁聖職者省『カテケージス一般指針』219 - 232に見いだされる。
- (64) ベネディクト十六世「イタリア教会大会参加者への講話（2006年10月19日）」：AAS 98（2006），804-817 参照。
- (65) ベネディクト十六世「就任ミサ説教（2005年4月24日）」：AAS 97（2005），710。
- (66) 第二バチカン公会議『信教の自由に関する宣言』6：*Dignitatis humanae* 参照。
- (67) パウロ六世使徒的勧告『福音宣教』46：AAS 68（1976），36。
- (68) 同 15：AAS 68（1976），14-15。
- (69) 第二バチカン公会議『教会の宣教活動に関する教令』14 参照。
- (70) カトリック儀式書『成人のキリスト教入信式』（規範版1972年、改訂版1974年）の発布は、キリスト教入信の過程の大きな助けとなった。カテケージスを見直すために、同儀式書は当時の要理教育に関する考え方をよく反映している。
- (71) これらのテーマは皆、「洗礼に向けた入信過程」という標題のもとに『カテケージス一般指針』88 - 91で扱われている。
- (72) ベネディクト十六世シノドス後の使徒的勧告『愛の秘跡（2007年2月22日）』18：*Sacramentum caritatis*, AAS 99（2007），119「このことに関連して、入信の秘跡の順序という問題に注意を払わなければなりません。教会の中にはさまざまな伝統があります。こうしたはつきりした違いは、東方教会の習慣にも、成人の入信や幼児のための入信に関する西方教会の実践にも見られます。けれどもこうした違いは、

教義的な次元のものではなく、司牧的性格のものというべきです。具体的には、どのようにすれば、信者が入信の過程全体の目的として、聖体の秘跡を中心に置くことができるかを考える必要があります。司教協議会はローマ教皇庁の権限のある省と密接に協力しながら、最近のキリスト教入信の実践の有効性を評価しなければなりません。それは、信者が共同体内で受ける養成を通じて成長し、自分の生活を真の意味で聖体に生かされたものとしていくことができる助けとなるためです。こうして信者は、現代に適したしかたで、自分たちの抱いている希望について説明できるようになります（一ペトロ 3・15 参照）」参照。

- (73) パウロ六世使徒的勧告『福音宣教』51：AAS 68 (1976), 40 参照。
- (74) ヨハネ・パウロ二世回勅『救い主の使命』44：AAS 83 (1991), 290-291 参照。
- (75) 教皇庁聖職者省『カテケージス一般指針』61 - 62 参照。
- (76) ベネディクト十六世「教皇庁定期訪問中のブラジル司教団への講話 (2009年9月7日)」：*L'Osservatore Romano*, 7-8 settembre 2009, p. 5「第二バチカン公会議後の数十年間、一部の人は、この世への開放を、キリストのみ心から要求される宣教への熱意と解釈せずに、世俗化への移行と解釈しました。彼らは世俗化のうちに自由と連帯といったキリスト教的価値を見だし、自分たちがそれに進んで同意し、協力することを示しました。一部の指導的な聖職者は世論の期待にこたえて倫理的議論に加わりましたが、罪、恵み、信仰と希望と愛に基づく生活、審判といった、根本的な信仰の真理について語るのをやめてしまいました。彼らは無意識のうちに多くの教会共同体の世俗化に巻き込まれたのです。彼らは自分たちのところに来ない人々を喜ばせようと望んで、自分たちに属する人々が、もっているものを奪われ、失望して、離れ去るのを目にしました。同時代の人々がわたしたちと出会うときに、彼らが望んでいるのは、ほかで見いだされないもの、すなわち、復活した主からもたらされる喜びと希望です」参照。
- (77) このことばは教皇ベネディクト十六世の示唆に基づいて教皇庁文化評議会が開催した国際会議で用いられた。「異邦人の中庭」は、キリスト者と、いかなる宗教も告白していないけれども、少なくともも生活の

中で見知らぬかたとして神に近づくことを望む人々などが、互いを豊かにし、文化的に刺激し合う場を指す。

- (78) 第二バチカン公会議『現代世界憲章』22 参照。
- (79) ベネディクト十六世「カトリック教育者への講話（アメリカ・カトリック大学、2008年4月17日）」：*L'Osservatore Romano*, 19 aprile 2008, p. 9.
- (80) ベネディクト十六世「ローマ教区大会開会あいさつ（ローマ、2007年6月11日）」：*L'Osservatore Romano*, 13 giugno 2007, pp. 4-5.
- (81) ベネディクト十六世回勅『真理に根ざした愛』51：AAS 101（2009），687-688.
- (82) パウロ六世使徒的勸告『福音宣教』41：AAS 68（1976），31-32. ベネディクト十六世シノドス後の使徒的勸告『愛の秘跡』85：AAS 99（2007），170-171 参照。
- (83) 『カトリック教会のカテキズム』2685 参照。
- (84) ヨハネ・パウロ二世「一般謁見（1992年10月21日）」：*L'Osservatore Romano*, 22 ottobre 1992, p. 5 参照。
- (85) ヨハネ・パウロ二世使徒的書簡『新千年期の初めに（2001年1月6日）』40：*Novo millennio ineunte*, AAS 93（2001），294.
- (86) ベネディクト十六世回勅『希望による救い』31：AAS 99（2007），1010.
- (87) パウロ六世使徒的勸告『福音宣教』80：AAS 68（1976），75.

略号

AAS	Acta Apostolicae Sedis
PG	Patrologia Graeca
PL	Patrologia Latina

資料 2

第 13 回通常シノドス『提題解説』に対する 日本カトリック司教協議会の公式回答

2011 年 10 月 7 日

序論

日本における福音宣教への取り組み——NICE から現代まで

(1) NICE 開催 20 周年 (序論質問 1)

1965 年に第二バチカン公会議が終了し、1975 年にパウロ六世が「現代社会の福音化」に関する使徒的勧告を発表、特に 1981 年に教皇ヨハネ・パウロ二世が来日したことがきっかけとなって、日本司教団は、1984 年に「日本のカトリック教会の基本方針と優先課題」を発表し、1987 年に第 1 回福音宣教推進全国会議 (NICE-1) が京都で開催された。NICE-1 の参加者からの提案に答えた司教団は『ともに喜びをもって生きよう』を発表した。日本の教会の直面している課題として挙げられたことは、以下 3 点である。

① 日本の社会とともに歩む教会：生活から信仰を、社会の現実から福音宣教のあり方を見直すため、教会が真に社会とともに歩むために具体案を提示した。

② 生活を通して育てられる信仰：生活から信仰を、社会の現実から福音宣教のあり方を見直すため、生活を通して信仰を育てるために、具体案を提示した。

③ 福音宣教をする小教区：生活から信仰を、社会の現実から福音宣教のあり方を見直すため、真に福音宣教をする小教区となるため、具体案を提示した。

その後、1993 年に第 2 回福音宣教推進全国会議が「家庭の現実から福音宣教のあり方を探る」をテーマに開催された。1995 年には、戦後 50 年にあたり、『平和への決意』を発表し、2001 年には『いのちへのまなざし』を発行し、現代日本社会が抱える諸問題に、苦しむ人々とともに歩もうとする姿勢

をもって教会が取り組むことを表明した。

NICE-1 開催 20 周年に際し、NICE「振り返り」を行った司教は次のメッセージを発表した。

「NICE-1 から 20 年が過ぎました。司教団が掲げた「ともに喜びをもって生きよう」と「分かち合い」の勧めは確実に浸透しつつあります。とくに近年、聖書の分かち合いが各地で頻繁に行われるようになってきたことは喜ばしいことです。また、外国籍信徒の増加がめざましく、信徒総数の 50% を超えると思われ、韓国やフィリピンなど、アジアの人々との連帯も進んできました。他方、以前にもまして、多くの人々が心身の重荷に苦しみ、福音に飢え渴いています。現代の荒れ野とも言うべき、厳しい社会・家庭環境において人々が悩み、苦しんでいる今、わたしたちは「神であるにもかかわらず兄弟の一人となられたキリストにならい、全ての人に開かれ、全ての人の憩い、力、希望となる信仰共同体を育てるよう努めたい」（「第 1 回福音宣教推進全国会議 参加者一同の宣言」参照）との決意を新たに、それを未来につないでいきたいと思います」（「NICE-1 から 20 周年——パウロ年と列福式を迎えて——（2008 年 6 月 3 日）」）。

（2）日本における福音宣教に刺激を与えた出来事（序論質問2 その一）

最近の日本の教会の福音宣教活動に刺激を与えた出来事としては次のものが挙げられる。

① マザー・テレサの活動

マザー・テレサの活動は教会のみでなく日本社会に、小さな人々に目を向けることの大切さを教え、その視点を根づかせてくれた。彼女の生き方は多くの若者の指標になっている。バブルの時代とその崩壊を経験した日本は、その後遺症に苦しみながら、マザー・テレサの世界の大切さに気づいている。

② 教皇ヨハネ・パウロ二世の来日

ヨハネ・パウロ二世の訪日（1981 年）は、特に教会に大きな影響を与えた。教皇の広島での平和アピールに触発された司教団は、平和の推進を唯一の被爆国の使命と理解し、「平和旬間」を定め、毎年活動を行っている。それ以来、社会政治問題に介入することにためらいを感じていた日本の教会が、社会の福音化に積極的に取り組むようになった。

③ 東日本大震災と原発事故

2011年3月11日に起こった東日本大震災からは、人間が自然の前に謙虚になる必要を学び、文明に対する過度の信頼の危険、薄れてきていた種々の絆の大切さ、先人の知恵の大切さを学んだ。何よりも支援、ボランティア活動などを通して聖霊の働きを確認できた。福島原子力発電所の災害は、あらためて原子力の恐ろしさをまざまざと見せつけ、人間の知恵と技術の限界を私たちに教え、生活様式そのものの大転換を迫っている。

(3) 日本の福音宣教のあり方に影響を及ぼした社会変化

(序論質問2 その二)

一方、次の社会変化が、日本における福音宣教のあり方に影響を及ぼしている。

① 不況と自死の増加

日本は、第二次世界大戦後における経済の発展と科学技術の進展が、結局のところ多くの人の心に真の幸福をもたらすことはなかったことを体験した。とりわけ、右肩上がりの経済成長が限界に達し、徹底的な不況の波が押し寄せ、日本国内で13年にわたり年間3万人を超える人が自死に追いやられている現状を見る限り、この60年ほどの間、世界全体が目指してきた発展の方向性が、果たして神の目において正しいものであったのかどうか、ふり返る必要性に迫られている。

② 移住者の増加

日本の教会は、近年増加している日本における外国人（その中には多くのカトリック信者が含まれる）との共生を課題としてきた。移住者を中心とした教会共同体作りが多くの地域で推進されていることは特筆されるべきである。労働者としての滞在であれ、婚姻関係を通じた滞在であれ、日本の各地で、移住者信徒の存在はこれからの教会共同体のあり方を考える上で、無視できない存在となっている。

(4) 新しい福音宣教とは (序論質問3)

① 霊的体験の必要性

現代の日本社会は、明治時代に再宣教が開始して150年を経過するが、それ以前に国家として意識的にキリスト教を排斥し続ける250年余りの歴史をもつ。したがって、それはむしろマイナスからの再出発であり、キリスト教がインカルチュレーションを実現するには忍耐強い成長の歴史を重ねなければならないことを意識的に受け入れて歩む必要がある。このような社会で、福音（イエス・キリスト）の生きている現実とそのメッセージを、単なる翻訳を通してではなく、生きた自分たちの日常言語で宣教できるようになるには時間がかかる。独自のキリスト教文化が形成されるには、深く多くの霊的体験（キリストとの出会いの体験）の積み重ねが必要である。宣教のためのごとばを整えていくには、こうした霊的体験への導きも必要である。福音宣教のために日本社会への参加・貢献を重ねても、生きたキリストとの出会いの中で福音を受けとめ、意識化し、深めていかなければ、単なる行動主義に陥り、福音宣教のダイナミックな成長と広がりを生んでいくことはできない。

② 本質的なものからの再出発

日本社会の中で「新しい福音宣教」を行うとは、「見よ、わたしは新しい天と新しい地を創造する。初めからのことを思い起こす者はない。それはだれの心にも上ることはない」（イザヤ65・17）ということばに共鳴して生きることである。この呼びかけに耳を傾け、あらゆる存在の根底に神の創造的な働きを読み取る必要がある。存在の根底に立ち返るとは、福音そのものであるイエス・キリストご自身とはだれか、イエスが身をかがめる人間とは何か、わたしたち人間が生きている大地（社会・世界）とは何かを根本から問い直すことでもある。そのためには観想的なまなざしが必要である。こうした本質を問い直す絶えざる努力なしに、創造のわざである「新しい福音宣教」を実現することはできない。現代は、聖書がもっている視点であり（創世記1～3章参照）、日本社会にも受け入れられている（「天・地・人」）、「神と大地と人」の関係性の中で人間の本質が探究されている時代でもある。要するに「本質的なものから再出発すること」が、新しい福音宣教において問われている。

③ 主の愛を認めること

「本質的なものから再出発する」とは、次のことである。「〔キリストは〕わたしを愛し、わたしのために身をささげられた」（ガラテヤ2・20）と使徒パウロをしていわしめたように、心底から自覚して、わたし個人に向けられ

た主の愛を認めることなのです。主に限りなく愛されているという自覚だけが、あらゆる個人的な困難や制度面でのむずかしさを乗り越えていくことを助けてくれます。……彼らを強め、勇気を与えるこの愛こそが、彼らの心を燃え立たせ、何ごとにもチャレンジできるようにしてくれるのです」(教皇庁奉獻・使徒的生活会省『キリストからの再出発(2002年5月19日)』22)。

④ キリストのみ顔の観想

それゆえ、新しい福音宣教を考えていくとき、教皇ヨハネ・パウロ二世が指摘した次のことが重要な指針になると思われる。「問題の倫理的、社会的な側面は、キリスト教的なあかしにとって欠くことのできない要素を示しています。ですから、内向きで個人主義的な霊性への誘惑は退けなければなりません」(使徒的書簡『新千年期の初めに(2001年1月6日)』52)。その上で、「今日の人々は今日の信仰者に、たとえ意識的にでなくても、キリストについて『語ってほしい』だけでなく、ある意味でキリストに『会いたい』と願っています。……しかし、わたしたちがまずキリストのみ顔を観想しない限り、わたしたちのあかしは、耐えがたいほど貧弱なものであるにちがひありません。……わたしたちのまなざしは……今まで以上に主のみ顔の上をしっかり注がれていることでしょう」(同16)。新しい千年期において、日本社会に「救い主キリストの最初の告知」がなされるために、まず「キリストのみ顔の観想」へと招かれる必要がある。人々が教義以上に「神に出会った人」を探し求める日本の文化的・宗教的伝統から考えても、霊的なアプローチを強調することなしに「新しい福音宣教」はむずかしいと思われる。

⑤ 諸宗教対話の必要性

日本社会は、世俗化された「神不在の社会」といわれると同時に、さまざまな宗教が存在している「多宗教社会」でもある。このような社会において、伝統的な歴史をもつ諸宗教との対話は(『提題解説』5、8参照)、新しい福音宣教の不可欠な要素である。超越者と人間の体験を軸にした諸宗教との対話は、宣教の未来への重要な要素といえよう。

第1章 「新しい福音宣教」の時代

(5) 日本の教会の宣教の方向——人々の生活のただ中に生き、人々に寄り添う(質問1-2)

東日本大震災の経験

2011年3月11日の東日本大震災にあたり、被災地・被災者への救援のために仙台教区はカリタスジャパンの全面的な支援を得て「仙台教区サポートセンター」を立ち上げたが、全国から志願してきたボランティア（カトリック信徒もキリスト信者でない人たちも）の救援活動の拠点（ベース）として被災した地域にあるカトリック教会（6か所）の建物が提供された。この救援活動の対象は広く一般社会であり、被災した街の人々から非常に喜ばれている。この活動にかかわる中でカトリック信徒も「教会の使命はいわゆる教会の中だけ（内向き）でなく、社会の苦しんでいる人々に向けられるものだ」という理解が深まってきた。同時に司教団の決定による「被災地への救援プロジェクト」の推進は、文字通り「『社会のただなかに生きる』人々の生活に参加するという宣教的使命」を目に見える形で現していく実践として、今まで内向きでありすぎた信者にも、また信者ではない町の人々にも大きな刺激となるであろうと考える。

(6) 忘れられていた農村への福音宣教（質問1-4、1-12、1-13）

① 都市と農村

日本においてこれまで教会が十分に入り込むことができていないのは、農村地帯である。多くの教会が都市部に集中している。地方の教会にあっても、小教区は地方の都市部に集中している。その中で、日本人と結婚した外国人信徒の存在は、大きな希望を与えている。早くから移住者信徒の存在を認め、またその役割を十分に認識し、同時に日本人信徒との関係を巧みに築き上げてきた教会共同体では、新たな希望が目覚めている。

② 移民信徒の力を生かす

たとえば新潟教区の山形県新庄市（2010年10月）や、さいたま教区の茨城県常総市（2009年2月）には、新しい小教区が誕生した。その小教区には日本人信徒はわずかしかおらず、それ以外のほとんどの信徒は、フィリピン出身の信徒とその子どもたちによって構成されている。自分たちで生み出す教会共同体という意識は、移住者信徒にあっては、自分たちは日本でのお客様ではないのだという自覚を生み出し、日本人信徒にあっては、世界に広が

る教会の意義を肌で感じる機会を与えている。また特に、農村地帯で生活する外国人信徒にあっては、自分たちは神の計画の一部としてまさしく福音宣教のために日本に派遣されているのだという、福音宣教への意識覚醒が、小教区設立によってもたらされている。現在の日本の地方における教会の状況の中で、新しい小教区を設立する、しかも教会を新しく建設することは、「大胆」であると思う。新庄や常総では、農村地帯の小さな町に突然教会が出現したが、地域の住民からは好意を持って受け入れられている。

(7) 人々との対話の中で神への問いを示す (質問 1-8、1-9)

① 宗教への拒絶反応

日本においては、第二次世界大戦後の経済発展と技術革新の中で、世俗化が激しく進んでいった。その中で、宗教的なものはオカルト的興味の対象や、現実生活に対して利益をもたらすべき存在に追いやられてしまった。すなわちこの世の主役は神ではなく人間となった。1995年のオウム真理教事件は、多くの人々の宗教に対する意識に大きな影響を及ぼした。神秘的に人間を教祖とあがめるカルト宗教の行った犯罪行為が、一般的に宗教は危険なものだという意識を多くの人に植え付けてしまった。これは今でも変わっていない。一般的に言って、日本においては伝統的な神道や仏教以外の宗教に対する警戒心が強い。

② 新しい宣教の試み

NGO 活動 3月の大震災への復興支援活動においても、カトリック教会という看板を前面に出して被災者と向き合うと、まず第一に警戒心を持たれてしまう。そこで、国際的な信用を誇る NGO としてのカリタスジャパンのような一般世俗社会で通用する看板は大きく役に立った。

新しい宣教の場 岩下壮一神父 (1889 - 1940 年) が 1934 年に創立した真生会館 (東京) は、小教区でもカトリック教育機関でもない、カトリック青年の教育・宣教のための場を提供してきた。真生会館の元理事長を務めた宣教師の G・ネラン神父 (Georges Neyrand 1920 - 2011 年) は、1980 年に東京・新宿にサラリーマンのための宣教の場としてスナック「エポペ (Epopée)」を設立した。

若者との関わり 若い世代は、宗教に対して全く無関心の者と、新興宗

教などに狂信的に帰依する者とは分けることができる。そして、大多数が中間層で宗教にはほとんど興味を示さない。しかし、若者も初詣などで宗教的慣習には参加しており、スピリチュアルな書籍・スピリチュアリティには広く関心がある。現代は、「若者に場を与える」時代ではなく、「若者たちが自ら場を作る助けとなること、若者が作る場に同行する」時代である。教区を超えたカトリック青年の活動を支援する組織として2000年に設立された「日本カトリック青年連絡協議会」（日本カトリック司教協議会・公認団体）は「ネットワークミーティング」を開催している。インターネットと社会的フォーラムを用いて若者が自主的・積極的にかかわれる場を支援することが教会に求められている。

第2章 イエス・キリストの福音をのべ伝える

(8) 第一の福音宣教の場としての家庭（質問2-1、2-8、2-9）

① 家庭での祈りの教育

信者にとって霊的体験の最高の場は、言うまでもなくミサであるが、まず、典礼教育を十分に行う必要がある。日常生活においては、祈りが霊的体験の源泉であるが、祈りの指導はきわめて不十分で、日々の祈りもおざりにされているかもしれない。まず、それぞれの家庭で家族そろって祈るという習慣を定着させるよう努力すべきである。特に、家庭こそ祈りを身につける土台にならなければならないが（申命記6・4-9参照）、それがまだ実行されていないと思われる。特に若い母親は、子どもの信仰教育の最初の段階として、しっかり祈る習慣を子どもに身につけさせる大切な責任がある。肝心なのは、まず親子が一緒に祈る習慣を、各家庭に確立すること、また親子のみことばを分かち合うことである。ちなみに、1993年に開催された第2回福音宣教推進全国会議（NICE-2）のテーマは、「家庭の現実から福音宣教のあり方を探る」であった。

② 家庭における福音宣教

カテケージスを信徒が責任をもって引き受けることができる教会になることが「新しい福音宣教」の第一のステップになるのではないか。特に、カテケージスにおいて一方交通にならないように、カテキスタと求道者は、共

に福音を分かち合うという原則に基づくべきである。特に、日本において家族全員が信者である家庭はむしろ少ない。したがって、福音宣教を最初に行うのは各家庭にほかならない。教皇パウロ六世は、次のように家庭における福音宣教の大切さを強調しておられる。「家庭は、教会のように、福音が伝えられる場でありまたそこから福音が照らし出される場でもあります。そこでこの使命を意識している家庭では、全員が福音化を行いました同時に福音化されているのです。両親は子どもに福音を伝えるばかりではなく、子どもからも、彼らが生活の中で深く生きている福音を受け取ることができます。そしてそのような家庭は他の多くの家庭の福音宣教者となります」(『福音宣教』71)。「新しい福音宣教」をまず家庭から始めることが急務である。

③ 両親の養成

文化の世俗化が、各家庭で子どもたちに信仰教育を施すことをますますむずかしくしている。したがって、まず親たちの信仰の再教育によって、世俗化した時代においても、少なくとも家庭で子どもたちにカテケージスができる親たちを養成すべきである。また、いくつかの家庭が一緒になって共同体を育成することにより、子どもたちは、生活に根ざした信仰教育を受けることができる。特に、家族全員が信者でない場合は、複数の家族が協力し合うことが大切である。

(9) 若者がキリストと出会う場 (質問2-3)

① ボランティア体験学習プログラム

現代の若者たちはボランティア活動に関心をもっている。第三世界や被災地でのボランティアや体験学習を通して他者のために生きる人生や自分の信仰を考えさせることは、司祭・修道者・信徒奉仕者への「召し出し」を掘り起こすためにも有効だと思われる。貧しい人々とともに過ごし、現地の人と出会うことのできる体験学習に参加させることは、他者のために生きる自己を発見する機会となる。

② 若者の霊性への渴望にこたえる

また、生きるキリストと出会うことに飢え渴いている若者が少なくない。青年黙想会や召命黙想会に多くの若者が再び参加するようになっている。WYD (ワールドユースデー) や「ネットワークミーティング」にも多くの若

者が参加し、自主的に観想的な祈りを企画している。このような若者の渇きにこたえる努力が必要である。

(10) 福音宣教する信徒の養成（質問2－18、2－19）

キリスト者一人ひとりが宣教者であるという自覚はまだ育っていない。かろうじて、勉強会や、使徒的活動団体で活動している少数の信徒は、実際に福音を伝える場をもっているが、ミサに参加する以外に教会活動に与っていない信徒が大多数である。信徒自身が、非キリスト者に対しても、信者に対してもカテケージスができるように養成されれば、実りある働きができる。ほとんどの信者は、洗礼を受け、堅信によって聖霊の賜物をいただき福音宣教者に召されていることの基礎養成が不十分なので、自分が福音宣教者であるという自覚はまだ十分に育てられていない。そのために信仰の生涯教育を継続することが必要である。現実には生じる諸問題に福音の光を当てて見るためには訓練が必要であり、一言で言えば祈りを身につける必要がある。

(11) 「新しいカテケージス」の構築（質問2－16）

日本の教会は、第二バチカン公会議後の40年の歩みにおいて、典礼改革を初め、教会が組織・制度以上にまず歴史における共同体つまり「旅する神の民」であるという自己理解に目覚めたが、個々の共同体が福音的に真に刷新されたかどうかについてはかなりのバラつきがある。したがって、第二バチカン公会議が目指した教会全体の刷新を、これからは、「新しい福音宣教」として新たに取り組むことが求められている。その際、第二バチカン公会議に基づいた「新しいカテケージス」の構築と実施を刷新の第一ステップにすべきである。「新しいカテケージス」にはインカルチュレーションが不可欠である。

第3章 キリスト教的体験への導入

(12) 「異邦人の中庭」としてのカトリック学校（質問3－24）

日本におけるカトリック教育機関で働く大部分の教職員、学生・生徒は非キリスト者である。日本におけるすべてのカトリックの教育機関は「異邦人の中庭」になっている。カトリック系の学校、教育機関は予備宣教的な役割を果たしている。

日本におけるカトリック教育は100年以上の歴史をもつ。2010年現在、カトリック学校数は847、園児・生徒・学生数22万人、教職員2万7千人（うち聖職者・修道者1,470人〔5%〕）である。しかし、カトリック学校で働く司祭・修道者は減少しており、少子化の中でカトリック学校をめぐる環境は厳しい。カトリック学校はそれぞれ、建学の精神とカトリックのアイデンティティを再確認するために努力を重ねている。

最近、複数のカトリック校の教師たちが共に学び分かち合うグループが誕生している（宗教倫理教育担当者ワークショップ、カトリック学校に奉職する教職員のための養成塾）。司教協議会の学校教育委員会も『キリスト教理解のために——カトリック教育にかかわるすべての人に』（2011年）を発行して、教職員のキリスト教理解に積極的に取り組み始めている。

(13) 日本における信徒使徒職（質問3－5）

日本では戦後、1949年にカトリック青年労働者連盟（JOC）が、1950年にカトリック労働者運動（ACO）が、1968年にクリスチャン・ライフ・コミュニティ（CLC）が設立されるなど、いくつかの信徒使徒職団体が活発に活動してきたが、世界的な学生運動の影響を受けてその多くが衰退している。1969年にカトリック学生連盟が解散したのはその象徴的な出来事である。一方、福祉活動を中心とした「聖ヴィンセンシオ・ア・パウロ会」（1914年設立）、マリア信心を通して人々に奉仕する「レジオマリエ」（1948年）、「マリッジ・エンカウンター」（1977年以降）などの団体は今も各地で活発に活動している。現在、日本カトリック司教協議会・公認団体は19存在する。

(14) 「新求道期間の道」のもたらした分裂（質問3－27）

日本の一部の地方の教区はある種の期待をもって「新求道期間の道」を導入した。しかし、そもそも基礎となる教会共同体が小さい上に、外来の宗教

への警戒心が強い土地柄もあり、必ずしも福音宣教に成功しているとはいえない。かえって、すでに小さな小教区共同体をさらに分裂させる危険性が浮き彫りにされた。日本の田舎の教区においては、小教区というものの規模が大変小さいという現実を直視する必要がある。日曜日のミサの出席者が10名程度という小教区は、決して珍しい存在ではない。そういった所で、「新求道期間の道」のような活動を実施するためには、賢明な状況判断が必要であるにもかかわらず、他の地域と同じ取り組みを実施したため、成功を取めることがなかったのではないかと判断している。

「新求道期間の道」は福音宣教のために学ぶべきところを多く持っているが、以下の問題がある。すなわち、一つの方法論にこだわり、これを堅持し、ローマの認可を楯にとりて司教にも迫る。ことばとは裏腹に強固な団体を組織し、独自の命令系統、独自の金銭の流れを有するが、日本の法律はこの現状を許さない。また、教区内で司教の指示に従わない。

要するに日本の教会において、「新求道期間の道」は、現在では必要とされない運動の一つである。ローマ教皇庁は、特にこの運動（道）によって日本の教会がいかに苦しみ、教会の分裂の痛みを永年にわたりこうむってきたかを理解していないと思われる。日本の教会に限っていえば、彼らの宣教方法は今日まで大きな弊害となっている。

(15) 「新しい福音宣教」と司祭志願者の養成プログラムの見直し (質問3 - 29)

「日本カトリック神学院」の設立

日本社会、グローバル化への変化と現状に対する「新しい福音宣教」のビジョン、刷新、実践へのたゆまない祈りと努力のうちに、現在の「日本カトリック神学院」の姿がある。2009年、福岡と東京の二箇所に分かれていた大神学院が、日本の司教団の新しい福音宣教へのビジョンのもとに統合され、一つの神学院として司祭志願者への養成が現在、行われていることは、その大切な実りの一つのしるしである。

資料3 世界代表司教会議第13回通常総会 討議要綱（目次）

序文

序論

基準

シノドスへの期待

シノドス総会のテーマ

第二バチカン公会議から新しい福音宣教へ

『討議要綱』の内容

第1章 イエス・キリスト——人類への福音

福音宣教者としてのイエス・キリスト

福音化される教会、福音宣教を行う教会

すべての人へのたまものとしての福音

福音宣教の責務

福音宣教と教会の刷新

第2章 新しい福音宣教の時代

「新しい福音宣教」への問い

新しい福音宣教の諸分野

メディア分野の最前線

宗教分野の変容

諸分野におけるキリスト信者

「諸民族への (ad gentes)」宣教、司牧、新しい福音宣教

小教区の改革と新しい福音宣教

新しい福音宣教の定義と意味

第3章 信仰の伝達

信仰の優位性

教会は自らが生きる信仰を伝える

信仰の教育学

信仰の伝達の担い手

福音宣教を行う模範的な場としての家庭

福音宣教への召命

自らの信仰について説明する

信仰の実り

第4章 司牧活動の活性化

福音化の過程としての、キリスト教入信の過程

最初の告知の必要性

信仰の伝達と人格の教育

信仰と知識

福音宣教のための司牧計画の基盤

召命の中心的な意味

結び

イエス・キリスト——希望を生み出す福音

福音宣教の喜び

SYNODUS EPISCOPORUM

SYNOD OF BISHOPS
XIII ORDINARY GENERAL ASSEMBLY

(7 OCTOBER – 28 OCTOBER 2012)

THE NEW EVANGELIZATION
FOR THE TRANSMISSION
OF THE CHRISTIAN FAITH

事前に当協議会事務局に連絡することを条件に、通常の印刷物を読めない、視覚障害者その他の人のために、録音または拡大による複製を許可する。ただし営利を目的とするものは除く。なお点字による複製は著作権法第37条第1項により、いっさい自由である。

世界代表司教会議第13回通常総会 報告

2013年2月18日 第1刷発行

翻訳・編集 カトリック中央協議会 司教協議会秘書室研究企画

発行所 カトリック中央協議会

東京都江東区潮見 2-10-10 日本カトリック会館

〒135-8585 ☎03-5632-4411

